

VIEW21

〈ビュー21〉
高校版
Volume 4

2015
October

10月

アクティブであるべきは 誰か？

特集

思考を活性化させる 授業デザイン

—ツールとしてのアクティブ・ラーニング

新課程 指導最前線

新課程入試に対応するための
進路希望を
明確化させる指導

指導変革の軌跡

青森県立
むつ工業高校

新潟県・私立
新潟明訓中学・高校

半歩未来を考える教育オピニオン

カリキュラム・マネジメントで
「学力」が向上する

図面が無くても
部品が足りなくても
皆で考えて
創る、作る!



1



2



3

1 線路幅はJRなどの鉄道と同じ1067ミリ。レールは市販の鉄板を加工して使用する。これまで作った線路は直線だったが、今年から線路を分岐させ、進路が選択可能になった。

2 3 電車は最大で3両編成。乗客が座る座席部分には、私鉄会社から譲り受けた本物のシートが据え付けられる。

4 電車製作は4つのパートに分担して進められる。今年、最も苦労したパートの1つが、電車を効率的に動かすギアを改良する台車パートだ。

5 電車の車体を組み立てる。限られた予算の中でどんな材料をどれだけ購入し、どのように組み立てるのか、生徒の試行錯誤が続く。

6 電車の動力はバッテリーではなく、架線に流れる電気。それをパンタグラフで集める。パンタグラフと架線の接触圧力の調整にも、とても苦労した。



4



5



6

文化祭に向けて休日返上もいとわない。
土日の登校を、僕らは「出勤」と呼ぶ。

高校生でも仕事に一切の妥協なし
目指すは「去年よりも一段上」!

川越工業高校は、学校の中を1067ミリのレール幅で電車が走る、日本唯一の高校だ。「川工電鉄」には、町を走る電車同様に線路上の架線からパンタグラフで電気が供給され、20人以上の乗客を乗せて、約100メートルの線路を時速7キロで走る。同校の

電気科では、3年次に興味・関心のあるテーマを選択し、1年掛けて調査・研究、作品製作を行う課題研究に取り組み。電車製作は、課題研究の1つで、同校文化祭でも来訪者の人気を集める名物なのだ。プロにも決して劣らない、高校生鉄道員たちの熱い魂に迫る。

7 メンバーの半数以上は、電車製作に憧れて川越工業高校に入学してきた。自分たちの創意工夫で大きなものを作ることが何よりの誇り。

7

2 チカラ アワセテ

世代や経験の差を超えてお互いの良さを認め合う関係が出発点
富山県・私立荒井学園新川高校 数学科◎濱本克吉、神戸篤

4 特集

思考を活性化させる授業デザイン

— ツールとしてのアクティブ・ラーニング

6 提言と実践 ALの目的とその授業デザインを、自校の生徒像を軸に検討する

実践事例1 国語◎三重県立桑名北高校 石田実貴
『山月記』を題材に「生きることの意味」を考える

実践事例2 数学◎三重県・私立鈴鹿中学・高校 岩佐純巨
グループでの問題演習を中心に据え、活用できる知識を獲得させる

実践事例3 生物◎群馬県立中央中等教育学校 松井孝夫
知識の習得よりも思考のプロセスを重視する授業

20 ドキュメント 生徒を学びに向かわせるため、私たちは「AL」を選んだ
長野県屋代高校・附属中学校24 大学の取り組み アクティブ・ラーニングで教育の実質化と大学の国際化を推進
名古屋大 総長補佐(国際化推進担当) 土井康裕

26 ハートをこがせ!

埼玉県立川越工業高校 電気科 課題研究 電車班 ものづくりの喜びと苦しさを味わい、学びの意味を知る

28 新課程 指導最前線

新課程入試に対応するための進路希望を明確化させる指導
岩手県立盛岡北高校/鹿児島県立加世田高校

32 指導変革の軌跡

青森県立むつ工業高校

進学実績向上◎生徒指導と学び直して「荒れ」の状態を克服し国公立大合格者を出す

新潟県・私立新潟明訓中学・高校

進学実績向上◎基礎・基本の定着と上位層への意識喚起で全生徒の力を伸ばす

40 改良! 指導ツール ビフォーアフター

3年生・2学期後半 面接対策指導ツール

44 半歩未来を考える教育オピニオン

カリキュラム・マネジメントで「学力」が向上する

大谷大文学部 教授 荒瀬克己

48 未来をつくる大学の研究室

動作と身体構造を人間に近付け新たなロボットの開発に努める

早稲田大 創造理工学部 菅野重樹研究室

52 VIEW'S REPORT

「進路多様化推進会議」に全国の70校から130人が集結

進路多様校の躍進こそが日本発展の鍵! 指導力向上の全国的な研究会を実施

福岡県教育委員会「中高英語教員指導力向上研修」をレポート

4技能を統合して育成し、大学入試改革に対応する指導・評価について研修

68 Reader's VIEW

<http://berd.benesse.jp> 本誌記事は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでもご覧いただけます

*本文中のプロフィールは全て取材時のものです。また、敬称略とさせていただきます
*本誌記載の記事、写真の無断複写、複製および転載を禁じます

〈ビュー21〉
高校版
Volume 4

2015
October

10月

今月の表紙メッセージ

アクティブで あるべきは誰か?

◎今号の特集のテーマは「アクティブ・ラーニング(以下、AL)の視点を踏まえた、これからの授業デザインのあり方」です。ALは「主体的・協働的に学ぶ学習」と言われますが、その主語は誰でしょうか。もちろん、それは「生徒」です。しかしながら、ALを取り入れた授業において、生徒以上に主体的・協働的になることが求められるのは、実は「教師」なのかもしれません。読者の先生方も、今回の実践事例やAL普及のドキュメント記事を通して、そう感じられるのではないでしょうか。

『VIEW21』高校版
編集長 柏木崇



富山県・私立荒井学園新川高校 数学科
濱元克吉 + 神戸篤

世代や経験の差を超えて お互いの良さを認め合う関係が出発点

過去の挫折にとらわれる生徒に
自信を取り戻させたい

神戸 新任の頃から、大学の先輩でもある濱元先生に付いて回り、すっかり感化されて今の自分があります。

濱元 逆に私も、神戸先生から学ばせてもらっています。神戸先生は柔軟性があり、若いのに自分の意見をはっきりと伝えられる強さも持っています。

「あの会議は必要だったのでしょうか」といった、真つすぐな言葉に目が覚める思いをしたことが何度もあります。

神戸 それは、濱元先生が受け止めてくれるという安心感があるからです。

濱元 5年前に数学で学び直しの導入を考えた時も、率直な意見を聞きたくて、まず神戸先生に伝えました。

神戸 「絶対にやりましょう！」と即答したのを覚えています。

濱元 うれしい反応でした。本校には、本当は力があるのに、小・中学校時代の挫折から脱け出せず、「自分は勉強が出来ない」と思い込んでいる生徒が少なくありません。学び直しを通して、「頑張れば出来る」ことを実感させ、学力を高めながら、生きていく上で必要になる自信を与えたいと考えました。

神戸 当時、教師になったばかりの私は、生徒の自信の無さにショックを受けていました。だからこそ、濱元先生の考えに共感しました。

濱元 分数までさかのぼる100枚以上のプリントの作成は、神戸先生に中心になって進めてもらいました。そのプリントは、授業での活用その他、放課後や夏休みの補習でも使いました。

生徒に自信を持たせて 次のステージに送り出すために

濱元 プリントの作成など、学び直しの取り組みは、私たちにとっても決して楽なものではありませんでしたが、生徒の変化に元氣付けられましたね。

神戸 定期考査の平均点がアップし、ベネッセの基礎力診断テストのGTZ（学習到達ゾーン）（*）にも成果が表れましたが、何よりうれしかったのは生徒の表情の変化です。「分かった」という喜びに加え、教師の本気が伝わると、「ここまで自分に向き合ってくれるなんて」と感激する生徒もいました。

濱元 普通コースの生徒が自信を付け、大学進学を希望して特進コースに移った例もありました。その後、国語と英語にも学び直しを導入し、ますま

スタートラインに立てば 生徒は自ら学び始める

なぜ、勉強が分からないのか、その原因を取り除いてスタートラインに立たせてあげられれば、生徒は自ら学び始めます。数学という教科はそれが顕著であり、生徒がつまずいた箇所にさかのぼり、一つひとつ丁寧につまずきを克服していけば、必ず分かるようになります。そのため、神戸先生とは、生徒の実態や課題をどこん話し合いました。その中で、時には「自分はこう思います」と、私と異なる意見を主張してくれたからこそ、新たな気付きが得られ、取り組みが深まりました。だから、神戸先生に対しては、「後輩」という意識をあまり持っていません。自分に無いものを持っている頼もしい同僚というイメージです。



富山県・私立荒井学園新川高校
濱元克吉 40歳
はまもと・かつよし 教職歴16年。同校に赴任して17年目。進路指導主事。3学年主任。

*ベネッセのテストにおける共通の評価指標。「S1」～「D3」の15段階があり、基礎力診断テストではそのうちの「A2」～「D3」で評価される。

富山県・私立荒井学園新川高校

◎教育目標として、「心豊かで創造性に富み、主体的に活動する生徒を育てる」「社会に出て活躍する生徒を育てる」を掲げる。大学進学に対応する「特進コース」、専門学校への進学や就職の希望者を対象とした「普通コース」を設置。2年次には、全生徒が地元企業や公共施設において5日間のインターンシップを経験するなど、地域社会と密に連携した教育活動を展開する。

◎設立 1973 (昭和48) 年 ◎形態 全日制/普通科/共学 ◎生徒数 約 400 人

◎2015 年度入試合格実績 (現役のみ)

国立大は、富山大に1人が合格。私立大は、城西国際大、国土館大、拓殖大、立正大、新潟青陵大、富山国際大、金沢星稜大、名古屋商科大などに延べ10人が合格。

◎URL <http://www.niikawa.ed.jp/>



す生徒たちは変わりました。以前の学校の雰囲気をよく知る教師は、生徒が学習に落ち着いて取り組む様子に驚いています。学び直しに前向きに取り組み、定期考査や模試で成果を実感すること、生徒にとつての「今、すべきこと」が明確になったからでしょう。

神戸 学び直しを継続すると共に、今年度から特別活動係長として、学校行事の企画・運営でも生徒に成功体験を積みせたいと考えています。教師はほとんど口を出さず、生徒たちの力で問題を解決するように導いています。

濱元 特別活動は、生徒の主体性を引

き出す格好の機会です。「生徒だけで大丈夫か」といった教師の不安は、なかなか拭い切れませんが、神戸先生が時間を掛けて生徒の考えや主体的な行動を引き出す姿を見て、「これこそやりたかった指導だ」と感じています。

神戸 濱元先生には、特別活動の指導についても、何度も助言をいただいています。そうしたサポートがあるから、実現することができています。

濱元 生徒が自信を持って次のステップに踏み出せるように、お互いの良さを生かし合いながら、今後も新たな試みにチャレンジしていきましょう。

周囲を見渡し続け

広い視野を持つ教師になりたい

濱元先生は、どの世代の先生からも頼られる人望の持ち主で、新たな取り組みを始めれば皆が付いていきます。学び直しの取り組みも、そうでした。これまで私は、教科指導や学級経営に専念してきましたが、今年度から学年副主任を任せられ、自身の視野の狭さを痛感しています。濱元先生が誰からも頼られるのは、常に他の先生方の仕事に興味を持ち、進んでフォローをするからだと考えています。それを見習って、常に周囲を見渡し、「手伝うことはありますか」「先生のクラスの取り組みは良いですね」などと積極的に声を掛けるようにしています。まだまだ高い目標ですが、少しでも濱元先生に近付けるように努力を続けます。



富山県・私立荒井学園新川高校
神戸 篤 28歳
 かんべ・あつし 教職歴5年。同校に赴任して6年目。生徒指導部特別活動係長。3学年副主任。数学科主任。

思考を活性化させる

授業デザイン

ツールとしてのアクティブ・ラーニング

高大接続改革においても、その充実が求められているアクティブ・ラーニング（以下、AL）。

ただ、ALという言葉自体は浸透してきているが、その捉え方や考え方は様々であり、

現場での共通認識はなかなか進んでいないというのが現状のようだ。

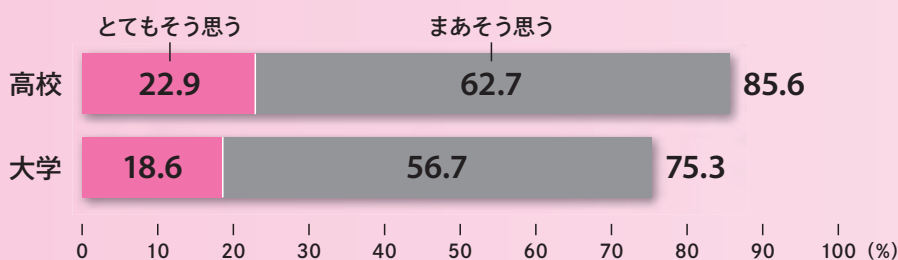
そのため、ALを授業に取り入れることに疑問や不安を抱き、二の足を踏んでいる教師も少なくない。

そこで今号では、現場の声からALについての現状や課題を把握しつつ、AL実践者への

ヒアリングと取材を通して、ALを取り入れたこれからの授業デザインのあり方について考えていく。

Q.

高校でディスカッションやグループワークなど、
講義以外の授業方法をもっと取り入れた方がよいと思いますか。



注) 対象は、全国の高等学校の校長及び大学の学科長。2013年11月～12月に郵送法による質問紙調査を実施。有効回答数は、高校1228、大学2012
出典/ベネッセ教育総合研究所「高大接続に関する調査」(2014)

本号のテーマ

これからの授業デザインのあり方とは？

教育改革や高校現場の課題解決のために求められている授業改善の目的

学力の3要素(知識・技能、思考力・判断力・表現力、
主体性・多様性・協働性)を身に付けさせ、主体的な学習者を育成すること

そのための方策の1つとして、受け身の学習だけではなく、
主体的・協働的に学ぶ学習=アクティブ・ラーニング(以下、AL)の充実が求められている

1 これからの授業デザインのポイント

提言と実践【P.6～19】

今号での取材や現場へのヒアリングを基にした編集部によるまとめ

- ◎高校教育におけるALの最も重要な目的は「生徒個々の思考の活性化・深化」。他者との協働的な活動は、思考をより深いものにするためには不可欠な要素であるが、それ自体が目的ではない。
- ◎思考の活性化・深化は、他者との協働的な活動(言わば「動」の学習)と、生徒個々の熟考や内省(言わば「静」の学習)を有機的に組み合わせる、教師の授業デザインによって実現する。
- ◎思考を活性化・深化させる授業デザインでは、ALは生徒の状況によって最適と考えられるタイミングで選択される。つまり、「ALありき」ではないが、分野・単元の深い理解にはALは不可欠である。

実践事例
1

国語【P.10～13】

『山月記』を題材に「生きることの意味」を考える

三重県立桑名北高校 石田実貴

実践事例
2

数学【P.14～16】

グループでの問題演習を中心に据え、活用できる知識を獲得させる

三重県・私立鈴鹿中学・高校 岩佐純巨

実践事例
3

生物【P.17～19】

知識の習得よりも思考のプロセスを重視する授業

群馬県立中央中等教育学校 松井孝夫



2 組織全体への普及を実現するために

ドキュメント

長野県屋代^{やしろ}高校・附属中学校【P.20～23】

生徒を学びに向かわせるため、私たちは「AL」を選んだ

大学の
取り組みアクティブ・ラーニングで
教育の実質化と大学の国際化を推進【P.24～25】

名古屋大 総長補佐(国際化推進担当) 土井康裕



ALの目的とその授業デザインを、 自校の生徒像を軸に検討する

高校現場では今、アクティブ・ラーニング（以下、AL）が教科や学校の枠を超えて大きな関心を集めている。しかしながら、ALへの取り組みはまだ一部にとどまっているのが現状だ。ALの視点を踏まえた授業改善について考えるために、編集部は現場の教師にアンケートやヒアリングを実施。そこから得られた声を基に、ALの視点を踏まえた実践のための「提言」を行うと共に、その提言に基づいた授業デザインの実践事例を紹介する。

ALの飛躍的充実が望まれる中 実践の動きは一部にとどまる

今、高校教育における「アクティブ・ラーニング（以下、AL）」充実への動きが急速に進んでいる。2014年12月、中央教育審議会が、高大接続に関する答申「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について」の中で、ALの「飛躍的充実」を含めた高校教育改革の必要性を示した。そして、同答申に基づき高大接続システム改革会議は、2015年9月、「中間まとめ」の中で、「小中学校において実

践が積み重ねられてきたグループ活動や探究的な学習等の学習・指導方法の工夫の延長上に、受け身の教育だけではなく課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習（いわゆる『アクティブ・ラーニング』）の視点からの学習・指導方法の抜本的充実を図る」ことを求めた。大学の教育の質的転換のための手法として認知が広まったALは今、高校教育改革のキーワードとなり、全国の自治体では、地域の大学と連携して高校教師がALについて学び、実践するプロジェクトなどが始まっている。

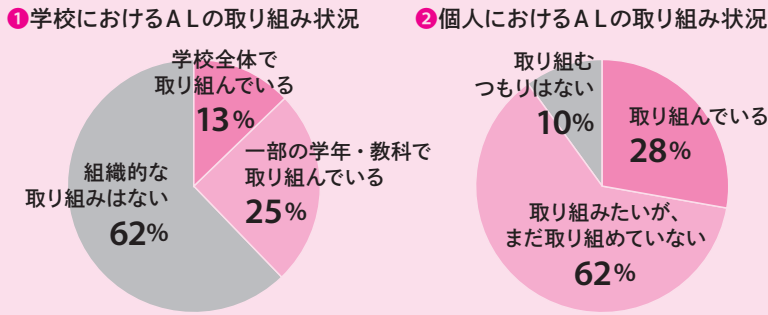
このように、教育環境の変化をマクロな視点で見ると、ALによる教

育改革は高校現場に急速に広がっていると言える。しかしながら、各校・各教師の視点で見れば、改革のスピードの「実感値」は決して速いものではないようだ。P.7のALの取り組み状況を見ると、本誌読者モニターの勤務校において、学校全体または一部でALに取り組んでいるのは38%にとどまっており、個人で何らかの取り組みを始めているのは30%に達していない。

現時点ではALに取り組んではないが「取り組みたい」と考えている教師が多いことから、ALの重要性は大多数の教師が認めていることが分かる。にもかかわらず、具体的

な実践に結び付かない理由を聞くと、「現状の大学入試制度の中で、どのような学力に結び付くのか分からない」「主体的な学びの土台となる基礎学力が生徒に身に付いていない」「ALの指導法を学ぶ時間的な余裕が教師になく、学校全体で共通理解を図る土壌も出ていない」といった、様々な課題の存在が浮き彫りになった。また、読者モニターアンケートの他、高校現場へのヒアリングなどを重ねる中で、一人ひとりの教師へのALの認知は確かに進みつつあるが、半面、「授業が活発になるのは良いが、深い思考力は身に付かないのではないか」「主体的な学習態度は、これま

アクティブ・ラーニングの取り組み状況*



読者モニターの勤務校の6割が「ALの組織的な取り組みはない」という状況。しかしながら、個人として（現在は取り組めていないが）取り組む意志を持っている人は6割を超え、既に取り組んでいる人と合わせてほとんどの教師がALの必要性を感じていることがうかがえる。

ALの取り組みが行われない理由*

ALの効果への疑問

- どのような学力に結び付くのが明確でない。
- 一部の教師が実施しているが、学校内でまだ効果検証されていないために、他の教師は実践に距離を置いている。
- 現在の大学入試制度において、どの程度貢献できる指導法なのか疑義がある。

生徒の学力不足

- 今はまだ、ALに必要な基礎学力の定着を図っている状況。

時間的余裕のなさ

- 入試対策で手いっぱいの状況で、時間的な余裕がない。
- ALについて学ぶ機会が少ない。じっくり教育や指導について考え、吟味する余裕がない。

取り組みの体制が整っていない、教員間の共通理解が得られていない

- ALの全容についての共通理解が不十分。各人の取り組みに任せられそうな感じがある。
- 推進役がない。周りに共感者が少ない。

その他

- 生徒には様々な体験を受け入れられる素地があるのに、教員の意識が今までの教育観を引きずってしまっている。

※出典／『VIEW21』高校版読者モニターアンケート結果より。アンケートは、2015年6月にウェブとファクスで実施。有効回答数は52。

での講義型の授業でも十分に身に付けられるから、ALは必要ない」といった、ALの価値に対する本質的な理解が実はまだ十分に広まっていない現実も浮かび上がってきた。実際、40代のミドル層からは、「本校で

は、ベテラン層の中でALに対する理解に大きな開きがあるため、若手やミドル層によるALが個人の活動にとどまり、教科全体や学校全体の動きにつながりにくい」と現状を率直に打ち明ける言葉も聞こえた。

現場との議論で 明らかにになった2つの視点

では、社会の要請でもあるALを軸にした教育改革を、各校はどのよう根付かせ、進めていけばよいの

か、『VIEW21』高校版編集部では、現場の先生方と議論を重ねてきた。そして、その中で浮かび上がってきたのが、「ALの目的の再認識」とそれを踏まえた「教師の授業デザイン力」の2つの視点である。

先生方との議論①「ALの目的の再認識」

ALは「課題の発見と解決に向けて生徒が主体的・協働的に学ぶ」学習活動である。だが、「active」という語句の側面だけに目が向き、授業の「活発さ」に過度の価値を置く傾向があった。確かに、他者との協働的な活動は授業に活発さをもたらすが、高校教育でより重要なのは、明確な課題に基づいた主体的な活動による「能動的」学習である。

つまり、ALは、「授業が活発になる」ことだけを目的としたものではなく、本来、「生徒個々の思考を活性化・深化させる」ことを目的としていることを改めて校内で確認し、今実施している（あるいはこれから実施する）ALが生徒の思考の活性化・深化をどのように実現しているかを検証する必要があるだろう。他者と

協働することの価値も、生徒同士が意見を述べ合い、自分とは異なる視点を知ることで、教師1人の発信から学ぶ講義型授業よりも思考を更に深化させる機会が増える点にあるという認識を、校内で周知したい。

提言② 「教師の授業デザイン力」 日々の授業は自校の生徒にどのような力を育むことを目的としているのか、生徒の課題やニーズを踏まえて考えてみることによって、ALという授業手法に何を期待すべきかが明らかになる。例えば、日々の授業への動機付けや基礎学力の定着が課題である学校と、学んだ内容を高次の思考へと昇華することがテーマである学校とでは、「自校がまず取り組むべきAL」として思い描く活動や実施のタイミングはおのずと変わってくるはずだ。

そうしたことを考える際には、各教科・科目の各分野・単元、日々の授業の狙いを明確にすることで、ALを取り入れた授業をスムーズに設計できると考えられる。授業のどのタイミングで、何を目的としたALを盛り込むのか、そしてそのALを成立させるためには、どのような教

材、発問、家庭学習が必要なのかといった、教師の授業デザイン力がこれまで以上に求められる。

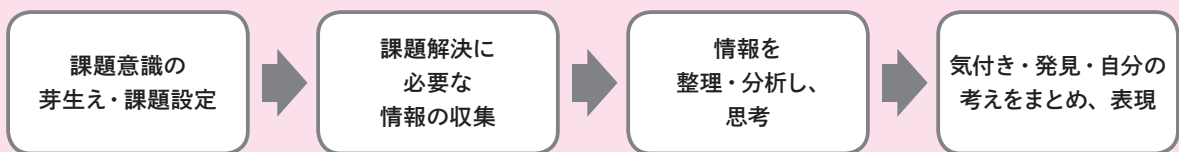
一般に、思考を活性化させ、思考の深まりをもたらす主体的な学びは、下の図のように、課題の発見・設定、情報収集、整理・分析、気付きのまとめといった要素で構成される。これらの各要素の中には、「動」の学習（他者との協働的な活動）と「静」の学習（生徒個々の熟考や内省）が含まれる。同様に、生徒の思考を活性化・深化させる授業の設計においても、この「動」と「静」の学習の場面を、授業の狙いや生徒の特性に応じて決めることが重要であり、それが「自校にとつてのAL」の構築につながるだろう。

高大接続システム改革会議の「中間まとめ」では、学力の3要素に対応する資質・能力などを育むため、狭義の授業方法・技術の改善に終始することなく、教師一人ひとりが研究、工夫、実践を重ねることを求めている。まさに、教師自身が自校の課題を捉えた上で、同僚性を発揮しながら、主体的・協働的にALを取り入れていくことが必要になると言えるだろう。

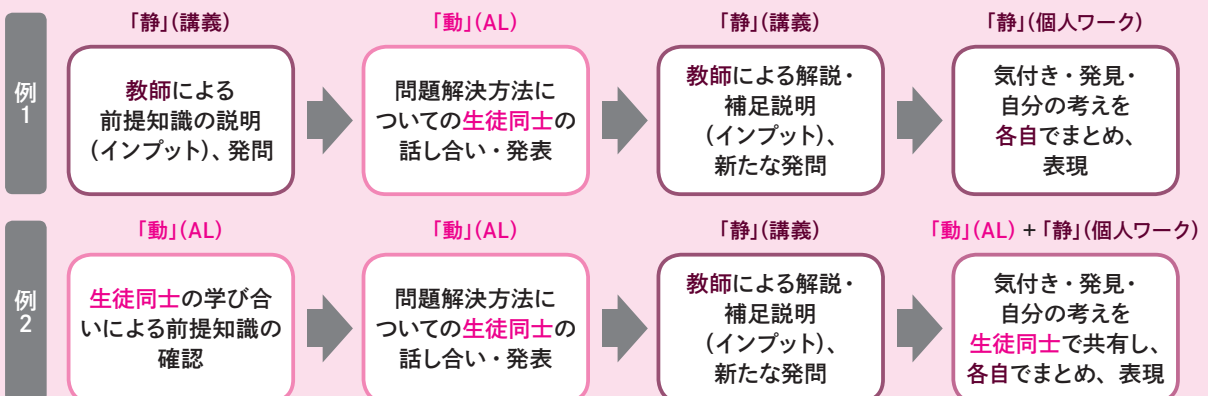
授業における生徒の主体的な学び

※先生方との議論を基に編集部が作成

主体的な学習者の姿 ※必ずしも下記の順序で進むものではない



「動」と「静」の学習で構成される授業で主体的な学習者を育てる ※必ずしも下記の順序で進むものではない



学力の3要素を踏まえた授業デザインへ

ALの視点を取り入れた3つの授業デザイン事例

ALの視点を取り入れた高校教育改革を、各教師は授業改善にどのようにつなげていけばよいのだろうか。今号では、3人の先生方と共に、生徒の思考を活性化・深化させ、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」の学力の3要素を育むための授業デザインに取り組んだ。

編集部が作成した授業デザインシート（下図）は、「その分野・単元の授業で身に付けさせたい力・姿勢」を明らかにし、それらを「学力の3要素」の観点で整理した上で、各力・姿勢を育む上で最も効果的な指導方法を精選するというものだ。このシートを基に、担当教科も在校生徒の志望進路も異なる先生方に、これまでの授業の流れや生徒特性を念頭に、ALを含む授業設計をしていただいた。

た。

いずれの先生方も、高大接続システム改革会議「中間まとめ」において、授業改善の視点として挙げられた、「問題発見・解決を念頭に置いた深い学びの過程」「自らの考えを広げ深める、他者との対話的な学びの過程」「自らの学習活動を振り返って次につなげる、主体的な学びの過程」を踏まえた授業設計となったが、紙幅の関係上、今回の誌面で紹介できる授業デザインシート、授業の様子はその一部となっている。また、教科や対象生徒の特性により、複数の授業時間でデザインする場合と、1コマの中でデザインする場合の2ケースが存在している。編集部作成の授業デザインシートを基本形に、それぞれの先生方が、授業の流れや生徒の思考の深まりを俯瞰しやすいうように改編したものであることをお断りした上で、次ページからそれぞれの実践をご紹介します。

P.10～19の実践事例で先生方に活用いただいた授業デザインシート・基本形

誌面では、分野・単元全体での設計バージョンと、ある1コマの授業に焦点を当てたバージョンの2種類を紹介している

本時あるいは分野・単元全体の狙いを記述。目的を明らかにした上で、指導内容の選択へとつなげていく

授業時数	自校の生徒の特性を踏まえた本時の主な目標（身に付けさせたい力・姿勢）	左記の力・姿勢の「学力の3要素」への分類	左記の力・姿勢を育むための指導内容
1時間目	場面設定や話の流れを把握する力	技能 思考力・判断力 主体性	3～4人の班をつくる。『山月記』の場面ごとに題名を付けたカードを班に1セットずつ配布し、本文を読みながら班全員でカードを場面順に並べ替える。最後にどのような順番になったのかを学級全員で共有する。
	仲間と協力して問題を解決する力	協働性	班全員でカードを場面順に並べ替える際は、メンバーで協力して作業する。
2時間目	内容を大まかに把握する力	知識・技能 思考力・判断力 主体性	「山月記Q&A」のプリントに、本文を読みながら、まずは個別に取り組んだ後、班で答えを共有。分からないところは教え合い、班でプリントを完成させる。完成したら、授業者指名された各班のスマールティーチャー（伝達係）が、授業者に持って行き、採点してもらう。採点結果は班で共有。
	仲間と協力して問題を解決する力	協働性	班でプリントを完成させる際は、メンバーで協力して作業する。
	音読する力	知識・技能 主体性・協働性	教科書の本文を場面ごとに拡大し、読み仮名を振ったものを教室の前後左右に掲示しておく。班になり、読んでいく中で分からない漢字が出てきたら、スマールティーチャーが掲示してある読み仮名を見に行き、班のメンバーと共有する。

学力の3要素は有機的につながっているものであるため、多くの指導場面では統合的に育成が図られるが、特に重視する要素をここでは挙げている

同じ分野・単元でも生徒の理解の状況などによって様々な指導方法が考えられる。今回、ここで取り上げた指導方法以外についても、ALであるかどうかにかかわらず、可能な範囲で言及していただいた

『山月記』を題材に「生きる」ことの意味を考える

三重県立桑名北高校 石田実貴

高校時代の頑張った経験が「生きる力」を育む

基礎学力がきちんと定着しておらず、授業では集中して教師の話聞くことが難しい生徒たちに、学力を付けるためにはどうすればよいのか。三重県立桑名北高校の石田実貴先生が、授業にアクティブ・ラーニングを取り入れた背景には、そうした課題意識があった。

県内の進学校から同校に赴任した石田先生がまず驚いたのは、生徒の生活態度だ。教師に対する言葉遣いが悪く、授業を妨げるような行為をする生徒もいる状況だった。授業も満足に出来ず、投げやりになりそうになった時、石田先生が思い出したのは、社会の過酷な派遣切りの実態

だ。石田先生は教職に就く前に会社勤めをしており、リーマン・ショックの影響で、非正規社員が次々と解雇されていくのを間近で見た。目の前の生徒たちも、数年後には同じ立場にならないとも限らない……。そう考えた時、彼らにとつて、高校時代は大人が深くかかわってあげられる最後のチャンスなのだと思いが付いた。

「自分は頑張っているけど、社会的な要因でつまづくことがあるかもしれません。そのような時、『高校時代にあれだけ頑張れたんだ』『必ず自分のことを見てくれている人がいる』といった経験や自信があれば、困難も乗り越えられるはず。そのような姿勢でいられる大人になりたいという思いが、私が教職に就いた原点でした。ここで私が諦めたら、生徒たちのチャンスを1つ潰してしまふことになる。もう一度頑張ろうと、心に決めました」（石田先生）

そうした折に出合ったのが、アクティブ・ラーニングだ。専門書を読み、研修会に参加する中で、「この方法なら生徒が学び始めるかもしれない」と可能性を見いだした石田先生は、すぐに実践した。最初の1年間は試行錯誤の連続だったが、生徒に合った教材やプリントに取り組みせるタイミングなどが徐々に分かり始め、2年目にはアクティブ・ラーニング中心の授業に全面的に移行した。

当事者意識を持たせて主体性を引き出す

今回、実践例として石田先生が取り上げたのは、高校の教科書で類出の『山月記』（中島敦著）だ。主人公が虎になるなどのユニークな設定ながら、高校生にはなじみの薄い擬古文で書かれているため、難読漢字が多く、漢詩も登場するというハードルの高い教材だ。この教材を3年生に指導することを想定して作った授業デザインシートが図1だ。

授業展開の特徴は、内容把握に相



三重県立桑名北高校 石田実貴 いしだ・みき
 教職歴6年。同校に赴任して4年目。「人の根底にある『成長したい気持ち』を信じ、生徒とかわり続ける」

三重県立桑名北高校

- ◎ 創立36周年を迎える。アクティブ・ラーニングの視点を取り入れた授業展開、多彩で魅力的な教育課程の充実など、学ぶ喜びを実感できる学校づくりを進めている。地域の保育所との交流学習は特徴の1つ。
- ◎ 設立 1980（昭和55）年
- ◎ 形態 全日制／普通科／共学
- ◎ 生徒数 1学年約240人
- ◎ 2015年度進路実績（現浪計）
 私立大は、静岡理工科大、愛知学院大、愛知工業大、中部大、名古屋芸術大、四日市大、大阪学院大などに延べ28人が合格。短大18人、専門学校53人、就職99人。
- ◎ URL <http://www.mie-c.ed.jp/nkuwa/>

当の時間を充てている点だ。1時間目は、作品を通読してから、3〜4人のグループで、場面ごとに見出しを付けたカードを物語のプロット通りに並べる。グループでの考えがまとまると、グループの代表者であるスモールリーダーがカードを物語のプロット順に黒板に貼り、学級全体で共有する。スモールリーダーは「右前に座っている人」などと、活動ごとに先生がランダムに決める。いつ当たるか分からないと

いう当事者意識を持たせ、活動を人任せにしないための工夫だ。

「読解の技術」を体験的に身に付ける

2時間目には、「主人公がしたかった仕事は何?」「主人公は旅に出た時どうなってしまった?」といった、物語の内容を把握するための一問一答形式のプリントにグループで取り組み、3時間目からは、段落ごとに内容の読み取りを行っていく。

まず、グループで音読を行う。『山月記』には難読漢字が多く登場する。教科書に書かれている振り仮名以外にも、生徒が読めない漢字があるため、全ての漢字に読み仮名を振ったプリントを教室の各所に貼っておく。グループ内で誰も読めない漢字があれば、スモールティーチャーがそのプリントを見て確認し、読み方をグループ内で共有して音読を続ける。これを約10分間で行った後、学級全体での音読として、生徒の座席1列ごとに1文ずつ音読していく。続いて、石田先生が段落ごとに作

図1 「国語」『山月記』授業デザインシート

授業時数	自校の生徒の特性を踏まえた本時の主な目標 (身に付けさせたい力・姿勢)	左記の力・姿勢の「学力の3要素」への分類	左記の力・姿勢を育むための指導内容
1時間目	場面設定や話の流れを把握する力	技能 思考力・判断力 主体性	3~4人の班をつくる。『山月記』の場面ごとに見出しを付けたカードを班に1セットずつ配布し、本文を読みながら班全員でカードを場面順に並べ替える。最後にどのような順番になったのかを学級全員で共有する。
	仲間と協力して問題を解決する力	協働性	班全員でカードを場面順に並べ替える際は、メンバーで協力して作業する。
2時間目	内容を大まかに把握する力	知識・技能 思考力・判断力 主体性	「山月記Q&A」のプリントに、本文を読みながら、まずは個別に取り組んだ後、班で答えを共有。分からないところは教え合い、班でプリントを完成させる。完成したら、授業者指名された各班のスモールティーチャー(伝達係)が、授業者に持って行き、採点してもらおう。採点結果は班で共有。
	仲間と協力して問題を解決する力	協働性	班でプリントを完成させる際は、メンバーで協力して作業する。
3~8時間目	音読する力	知識・技能 主体性・協働性	教科書の本文を場面ごとに拡大し、読み仮名を振ったものを教室の前後左右に掲示しておく。班になり、読んでいく中で読み方が分からない漢字が出てきたら、スモールティーチャーが、掲示してある読み仮名を見に行き、班のメンバーと共有する。
	丁寧に本文を読み取る力	知識・技能 主体性・協働性	場面ごとで作成したワークシートに取り組むことで内容を把握する。個人で取り組んで分からないところがあればメンバーに相談する。授業者が机間巡視をしながら、各班1人のワークシートだけを採点する。採点された生徒が必然的にスモールティーチャーになるので、その生徒を中心に班で共有する。全体で確認しなければならないことや、共有しておいた方が良いことは、適宜全体に向けて授業者が説明する時もある。
5時間目 (漢詩の部分)	本文中に出てくる漢詩を読み取り、内容を把握する力	知識・技能 思考力・判断力・表現力 主体性・多様性	●音読・暗唱/書き下し文を暗唱することから始めて、白文を読めるまで練習する。 ●現代語訳をする/班で協力して現代語訳をする。文法・句法のレクチャーはしない。難しい語句の意味だけ配布しておき、必要な時に利用する。 ●共有/班で完成させた作品を読み、全員と共有する。
	仲間と協力して問題を解決する力	協働性	班で現代語訳を完成させる際は、メンバーで協力して作業する。
9時間目	定期考査	知識・技能 思考力・判断力・表現力 主体性・多様性	定期考査の中で『山月記』を読んだ感想を書く。
10時間目	正解のない問いに仲間と協力して取り組む力	知識・技能 思考力・判断力・表現力 主体性・多様性・協働性	『山月記』から人生を考える。 定期考査時に生徒が書いた感想や、授業中に出てきた生徒の疑問を基に、次の問いを投げ掛ける。 A「人間らしさ、人間の心とは何か」を考え、自分たちで定義をし、「人間らしいのは李徴か袁修か」についての結論を出しましょう。 B「幸せとは何か」を考え、自分たちで定義し、「李徴と袁修はどちらが幸せな人生を歩いていると思うか」についての結論を出しましょう。 C「なぜ『山月記』は60年以上も前から高校生に読み継がれているのかなぜ教科書に載せ、高校生に読ませようとしているのか」を自由に考えて述べましょう。

進学校の場合は、3時間目から始めてもよいと思います(石田先生)

進学校の場合は、内容把握に掛ける時間を減らし、残りは大学入試を見据えた小論文の作成や言語活動に充ててもよいと思います(石田先生)

『山月記』の内容把握をしっかりと行っておけば、どのような学力層の生徒でも、このテーマについて考えることは可能です。高校生にはぜひ取り組んでほしい活動です(石田先生)

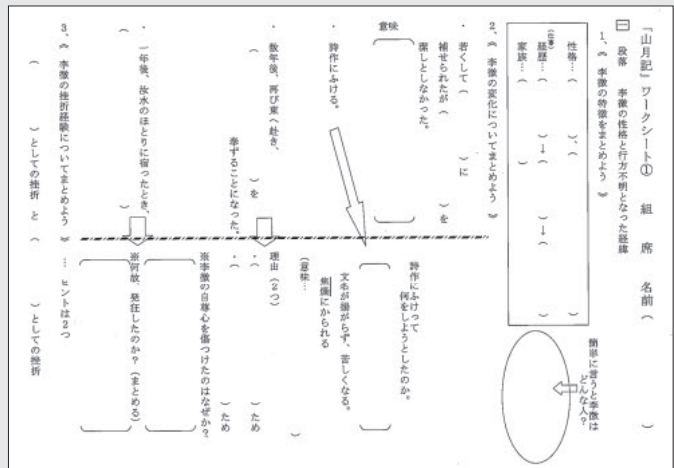
*石田実貴先生からの提供資料を基に編集部で作成

成したワークシート（図2）にグループで取り組み、内容を深く読み込んでいく。ワークシートは、事実情報を整理するパート、登場人物の行動や心情の変化の理由を考えるパート、そして思考力が求められる発展的な問題のパートで構成され、発展問題の前までは必ず取り組みように指示している。

授業中、石田先生が内容を解説することは基本的にはない。ワークシートに取り組んでいる時も、先生は机間巡視は行うものの、ほとんど説明しない。生徒がワークシートに書き込む様子を見ながら、例えば、グループの1人の答案をさりげなく採点する。すると、採点された生徒がグループの他の生徒に教えるというように、生徒同士で問題を解決できるようにしている。

学級全体で理解が浅いと感じた部分については一斉指導を行うが、その時間も1、2分程度。登場人物の性格や心情、行動の意味などを読解

図2 内容把握のワークシート



*石田実貴先生からの提供資料をそのまま掲載

する技術は、ワークや学び合いを通して体験的に身に付けさせていく。

自分たちの言葉で 分かりやすい現代語訳に

5時間目には、文中に登場する漢詩を学習する。書き下し文の暗唱から始め、次に返り点を打った漢文、最後に白文を読ませるのが目標だ。

まず、書き下し文に読み仮名を振らせ、ペアやグループで何度も音読

をし、学級全体で列ごとに1人1文ずつ読んでいく。生徒は何度も読み聞きする中で自然と文章が頭に入っていくので、最後は文法や句法が分からなくても、白文で読めるようになる。先生は文法や句法の解説をしながら、書き下し文が頭に入っているので、返り点が苦手な生徒も自然とレ点や二点などの意味が分かるようになるという。最後は、語句の意味を調べながら現代語訳を行う。型通りではなく、「**輟**」を「**リムジン**」と訳すなど、自分が分かりやすい言葉に置き換える生徒もいる。意味が分からない生徒にとっては、他の生徒の現代語訳が助けになり、最終的に全員が漢詩の意味を理解できる。

このように、8〜9時間を掛けて内容把握が終わると、定期考査を行う。問題は基本的な知識・理解を問うものを中心だが、物語の内容をしっかりと把握しているので、理解度や定着率は高いという。

キャリア教育の視点で 作品にアプローチ

キャリア教育的な視点から作品を更に深掘りしていくのも、石田先生

の授業の特徴だ。①「人間らしさ、人間の心とは何か」を定義し、「人間らしいのは李徴か袁慄か」について結論を出す、②「幸せとは何か」を定義し、「李徴と袁慄はどちらが幸せか」について結論を出す、③なぜ『山月記』は60年以上も前から高校生に読み継がれているのかを自由に考えて述べる、の3つのテーマからグループで1つを選び、話し合う。

活動前には、『山月記』が、説話の『**人虎伝**』を原典にしていることや、高校の教科書で最も長く採用されている作品の1つであることを伝えた。そして、個々で20分程考えてから、グループで30分程話し合い、各グループの結論は次の時間に全体で共有した。

「人生の目的や価値観などは、人に教わるものではありません。自分の人生の主人公は自分自身です。様々な価値観があると知り、生きるとは何かを、自分なりに考えてほしいと思います」(石田先生)

ある生徒は「いろいろな価値観があるということは、いろいろな生き方があって良いということ。自分を大切にするなら隣の人も大切にすべきだし、地球の裏側にいる人も大

切。みんながそういうことを理解すれば、戦争はなくなるのではないかと語ったという。

文字数を指定しなかったにもかかわらず、大半の生徒が200〜500文字の感想を寄せた。「様々な読み方が出来るから、長年読み継がれてきたのだと思う」「登場人物の心情をくみ取るだけではなく、人の幸せや人間らしさまで考えさせられる作品」「グループ活動で、1人で読むだけでは思いもしない意見を知ることが出来た。自分自身も考えるのがすごく楽しかった」など、生き生きとした文章からは、作品への共感、多様な価値観に触れる驚き、考える楽しさが伝わってくる。

持っている力の出し方が分らない生徒たち

授業は内容把握に時間を掛けたら、プリントを多用したりと、同校の生徒の学力に応じた構成としているが、前半の内容把握の時間を短縮し、最後に大学入試まで視野に入れた小論文の作成などの活動も含めること

で、進学校の生徒にも対応できるだろうと、石田先生は考える。

教材の準備は、『山月記』の場合、語句の意味や読み仮名などまでプリントにしていたが、題材によっては内容把握のためのワークに絞るなど簡素化している。平易な文章ならば内容把握を短縮し、最後の言語活動に多くの時間を充てることも可能だ。

今でこそ、生徒の状況に応じて授業を進め、教材を準備できるようになったが、石田先生自身、実践当初は試行錯誤の連続だった。「これはいける」という確信を得たのは、赴任1年目に始めたブックトークがきっかけだった。授業の度に「めんどい」「うざい」を連発する生徒に、「その言葉を口にするだけでは、暴言としか受け止められないけれども、学校をテーマにした本を読み、あなたの思いを400字の小論文にすれば、『暴言』も『主張』に変わり、社会の人たちが耳を傾けてくれるはずだよ」と伝えたところ、生徒は意外にすんなり受け入れ、ブックトークに取り組み始めたのだという。

「生徒はやんちゃで言葉遣いも悪いですが、それは力の出し方が分からないからではないかということに気づき、自信が湧いてきました」と石田先生は振り返る。

「静かに座っている授業」だけが理想の授業の形なのか？

石田先生は一斉授業を否定しているわけではない。同校の場合、生徒を授業に集中させ、学習内容を理解・定着させるために、生徒に頭や体を使って活動させる時間が多く必要なのだけだったという。

石田先生が疑問に感じているのは、生徒が黙って座っていれば授業は成立しているのかということだ。

「生徒が静かに座り、ノートを取っていたとしても、実は何も身に付いていないというのは、よくあることだと思えます。人間が学ぶ姿には、活動的な姿もあれば、静かに考えにふける姿もあり、時には感情があらわになることもあるはずです。『静かに座っている授業』だけが理想の形とする思い込みが、生徒の能力を

開花させる機会を奪っているのかもしれないと思うのです」(石田先生)

同校でも、協働的な学習を行った後や生徒同士で感想を共有した直後など、理解が深まり、意欲・関心が高まっている時に石田先生が説明を始めると、生徒は集中して先生の言葉に耳を傾けるといいます。ただ話を聞いているだけに見えるかもしれないが、それは受け身の態度ではなく、生徒たちの頭の中は活性化していて、能動的に学んでいるのだ。

「よく大人は子どもに、『将来のためにつらい勉強に耐えなければいけない』と言います。確かにそういう面もありますが、もつと大切なのは、『今ここで学んでいる幸せ』を感じられることだと思います。それを教師が言葉で語るだけでは、生徒には響きません。友人同士で学びを深め合う中で、『自分にも分かる』『成長している』と感じ、それが少しずつ自信になって将来へ向かう勇気が湧いてくる。それこそが本当の学びであり、教室という場でしか出来ないことだと思います」(石田先生)

グループでの問題演習を中心に据え、活用できる知識を獲得させる

三重県・私立鈴鹿中学・高校 岩佐純巨

「生徒を集中させる」ことを 出発点に授業を見直す

三重県にある私立鈴鹿中学・高校の数学科担当・岩佐純巨先生が、授業にグループ学習を取り入れ始めたのは約10年前。授業中の生徒たちの集中力が続かないと感じ始めたのがきっかけだった。

「生徒の間では、私の授業を受ければ成績が上がると評価されていたので、指導にはそれなりに自信がありました。ところが年々、授業中に集中できない生徒が増加し、授業中の教室の空気も以前とは違ってきました。生徒個人の責任だけではなく、社会の教育環境の変化も影響していると思い、どうすればよいのかと考えあぐねていた時に、佐藤学教

授（東京大名誉教授）の『学びの共同体』と出会いました」（岩佐先生）

岩佐先生は、専門書を読んだり、校外の研修会に参加したりして、協同学習について学びながら、授業で実践し、自分なりの方法を確立していった。現在の授業の進め方は、①前時の復習（グループ学習及び先生の説明）、②本時の目標の提示、③グループでの問題演習、④本時のまとめ・個人の振り返りが基本だ。授業で使用する教材は、先生が作成したプリントが中心。また、生徒にグループ学習のルール（図1）とその趣旨を説明し、徹底させている。

2年生「数学B」の「数列」における漸化式についての3回目の授業を例に見ていく（図2）。

前時の復習では、前時に取り組ん

図1 グループ学習のルール

- (1) 3つの時間を使い分けること
 - ① 1人で考える時間
 - ② 学び合う時間
 - ③ 先生の話聞く時間
- (2) 教科学習以外の話をしないこと
- (3) 「きき合う」関係をつくること
(きく：聞く、聴く、訊く)

* 岩佐純巨先生からの提供資料を基に編集部で作成

だ問題とその解答をセットにしたプリントを配布し、生徒に前時の学習内容を思い出させる。4人1組のグループにはなるが、まずは1人で考えるのが基本。分からないことが出てきたら、グループのメンバーに質問する。その間、先生は机間巡視をし、生徒の様子を確認。この日は具体的に生徒の理解度が低いと感じたため、本時の目標との関連を示しながら前時の学習内容を説明した。

「行事が重なり、前時から1週間空いたためか、一度取り組んだ問題にもかかわらず一から解いている生徒が目立ちました。解き直さないと解法が分からないというのは、解法が身に付いていない証拠。前時の復習



鈴鹿中学・高校
岩佐純巨 いわさ・じゅんきよ
教職歴24年。同校に赴任して25年目。「教師としての専門性を深め、生徒に数学の本質を教えていきたい」

三重県・私立鈴鹿中学・高校

- ◎ 中高一貫6年制の私立校。高校2年生まで文理共通カリキュラムとし、豊かな教養と実社会で応用できる真の学力の育成を目指す。全校体制でアクティブ・ラーニングの普及に努めるなど、教育改革への対応も進める。
- ◎ 設立 1986（昭和61）年
- ◎ 形態 全日制／普通科／共学
- ◎ 生徒数 1学年約120人（6年制）
- ◎ 2015年度入試合格実績（現浪計、6年制）
国公立大は、北海道大、東北大、東京大、名古屋大、三重大、大阪大などに64人が合格。私立大は、早稲田大、中京大、南山大、同志社大、立命館大などに延べ2777人が合格。
- ◎ URL <http://suzukakyoeigakuen.net/>

では、問題を見て解法をばっと思いつけるかどうかを確認するようにと、生徒には伝えていきます」（岩佐先生）

先生が説明する一斉指導の場面でも、自分が出来ないところが分かっているからか、生徒の表情からは、先生の説明をしっかりと聞き取ろうという意欲が感じられた。

生徒の頭の中が 動き出すように声を掛ける

本時の課題に入る前には、必ず本

図2 「数学B」「数列」漸化式(3) 授業デザインシート

本時の目標 漸化式 $a_{n+1}=pa_n+q$ の解き方を理解する

授業内容	時間	ねらい	生徒の動き	学力の3要素
1. 前時の復習	5分	漸化式の「基本3タイプ」、置き換えて「基本3タイプ」に持ち込む方法の練習	個人での取り組み →グループ学習: 前時の理解度を 確認する	
2. プリント演習 $a_{n+1}-c=p(a_n-c)$ の形に変形して解く	10分	基本的な解き方を理解し、 全員が出来るようにする	個人での取り組み →グループ学習: 全員が出来るよう に協力する	知識、技能
3. 種々の解法 1) $b_n=a_n-c$ とおく $a_{n+1}-c=p(a_n-c)$ の形に変形 2) $b_n=a_{n+1}-a_n$ とおく 階差をとる 3) $b_n=\frac{a_n}{p^n}$ とおく 両辺を p^{n+1} で割る	15分	種々の解き方を検討する	個人での取り組み →グループ学習: 3つの解法を比較 検討する	知識、技能、 多様性
4. 応用問題 1) $a_{n+1}=pa_n+q^{n+1}$ 2) $a_{n+1}=pa_n+q_1n+q_2$	15分	上記の種々の解法を応用 する	個人での取り組み →グループ学習: 解法を考える	知識、技能、 多様性
5. まとめと振り返り	5分	本時の学習内容とその理 解度(何が分かり、何が 分からなかったか)を自分 の言葉で説明する	個人での取り組み: 「授業振り返り用 紙」の記入	

授業では、「学力の3要素」の全てを身に付けさせることを常に意識しています。そのため、ここでは授業内容に則して、特に身に付けさせたい要素を挙げました(岩佐先生)

プリントは、教科書から本時の目標に応じた問題を抜き出して再構成し、1枚で1回の授業内容が完結するように作成しています(岩佐先生)

今回の授業では、3-1)までしか進めませんでした。残りは一度説明していますから、次の授業では10分程度あれば終わると踏み、1)を全員に理解させることに時間を掛けました(岩佐先生)

プリントや定期考査では、大学入試問題を出题することもある。「難関大と言われている大学こそ、既有知識を組み合わせて活用しなければ解けない問題を入試で出題しています。生徒の学習段階や理解・定着度に応じて、既有知識だけで解ける問題を、大学名を伏せて出題し、問題が解けた後に大学名を明かしています。大学入試問題だから自分には解けないという思い込みを捨て、今の自分でも解けるのだという自信につなげています」(岩佐先生)

*岩佐純巨先生からの提供資料を基に編集部で作成

時の目標を黒板に書いて伝える。この日は、漸化式の基本パターンの1つを示し、それを自力で解けるようになることが目標だと強調した。

「到達目標が見えていれば、生徒はどこに向かって頑張ればよいのか分かるので、学習意欲も高まります。生徒を能動的にする重要なポイントの1つです」(岩佐先生)

一斉指導を行うのは、最初・中間・まとめの各5分が基本。説明に5分以上掛かる場合であっても、5分ごとに説明を区切り、その内容に関するワークをして理解させてから、次の説明に進むと、岩佐先生は話す。

「私が話す時間を出来るだけ短くし、生徒がアウトプットする機会を多く設けるようにしています。頭の中で考えた内容を話したり書いたりすることで、その考えが数学的に正しいかが分かるからですし、言語化によって他者と比較・共有もでき、理解の深まりにつながります」

グループ学習の間、先生は机間指導をし、生徒の会話やプリントに書き込む内容を注意深く見取る。メン

バー全員が課題を理解できていなければ、グループ内で話し合うきっかけになるようなヒントを出す。あと少しで解けそうな生徒がいれば、その生徒の理解があやふやな点を指摘してそれを解消させ、理解につまづいている他のメンバーに教えられるようにする。生徒の書き込みを見れば、どこまで理解できているのかが分かるため、生徒の思考が動きかけとなるような声掛けを心掛ける。ただ、時には、グループになじめず、自分1人で問題を抱え込んでいる生徒に付きつきり指導することもあるという。

「この授業形態では、生徒同士で問題を解決できることが多いため、教師の指導が最も必要ないところ。集中的に手を掛けられるようになりました。例えば、今日の授業では、解法を理解しようとせず、集中できていなかった生徒がいたため、今日はこの生徒に徹底的に手を掛けようという覚悟を決めました。そのために授業は予定していたところまでは進めませんでした。今日の学習内容は今

後の学習内容にもつながる重要なものでしたから、理解できていない生徒を見捨てるわけにはいきませんでした」(岩佐先生)

自分の言葉で学習内容を要約できる振り返りを目指す

指導計画通りに終わらなくても、進度が大幅に遅れることはない。岩佐先生は、年度初めに、分野ごとに指導項目を洗い出し、時間配分を決めて、年間の指導計画を立てている。各分野の終わりには総まとめ的な問題演習の時間を2時間確保しているため、そこでの調整も可能だという。「分野全体を俯瞰して絶対に外せないポイントを把握していますから、生徒の理解度に応じて指導内容を足したり引いたりして、進度を保つようにしています」(岩佐先生)

また、本時の目標よりレベルの高い問題のプリントを用意しておき、プリントを早く終えた生徒に渡すようにしている。

そして、授業の最後には「授業振り返り用紙」を配布し、「学んだこと」「疑問点・課題」を書かせる。まず、1学期は、授業内容の理解が深まる

ように、自分で工夫して書く練習をさせる。そして、2学期からは、記入した用紙を提出させ、先生がコメントを書いて返却し、意味のある振り返りを行えるように指導している。

「現状では、生徒は授業で扱った式などを書いて『を学んだ』としか書いていません。生徒が自分の言葉で学習内容を要約できるようになられば、知識の再構成もでき、次の学習へとつながられます。また、生徒がきちんと振り返ることで、アクティブ・ラーニング型の授業における評価法にも活用できます」(岩佐先生)

既存知識を活用して新たな知識を得ることが学び

岩佐先生はこれまでの実践を通じて、数学にはグループ学習が適していると話す。

「既存知識を活用しながら問題を解き、新たな知識を獲得する。そのようにして、既存知識のレベルがまた上がっていく。それこそが学びだと思うのです。数学は、既存知識が少なくても、それらをうまく組み合わせれば初見の問題でも自力で解

けることがあります。ですから、教師が全ての定理や公式を教えなくても、既に持っている知識を生徒同士で補完し合いながら問題を解いていくことが出来ます。生徒が自分の頭の中を動かして考える分、一斉授業よりも学習内容が定着しやすいく感じています」

グループで教え合うのは、教師から教えられるのとは違うと、岩佐先生は話す。「教えて」と質問した時点で、その生徒には問題意識があり、解決するために能動的に「聞く」姿勢がある。一方、教師が説明する時は、生徒は教師からは教わるものという意識が染み付いているため、受け身な態度で聞いてしまいがちという。

「生徒にもプライドがあり、友だちの解答を丸写ししようとはしません。解答に行き詰まれば、グループのメンバーのプリントをのぞいて思い出す、それでも分からなければ質問する。生徒個々で既存知識の内容や量は違うため、同じ問題でも生徒によって解き方が異なることがあります。生徒たちはその多様性に触れることで、考え方を広げていき、同時に切磋琢磨していきます」(岩佐先生)

岩佐先生が、今、危機感を持っているのは、生徒が「勉強は教わるもの」としか捉えていないことだ。今年度担当している2年生では、学年団でその課題を共有し、主体的な学習スタイルへの転換を目指して、多くの教師がアクティブ・ラーニングを取り入れている。

岩佐先生は初めて受け持つ学年だったため、4月にはグループ学習に臨む上での意識と態勢づくりを行った。先生の話と生徒の活動の割合は半々。先生がある程度話したら、グループにして問題を解き、先生が話した内容を消化させる。それを何度も繰り返すと共に、グループ学習のルールを何度も説明する。生徒は、自分で考えて分かる楽しさ、グループで学ぶ良さを体験するに連れ、科学習以外の話はせず、授業に集中するようになった。

「生徒は能動的な姿勢を見せるようになりましたが、それはまだ授業中にとどまっています。家庭学習においても主体性が発揮されるよう、今後も学年全体でアクティブ・ラーニングを深化させていきたいと思えます」(岩佐先生)

知識の習得よりも 思考のプロセスを重視する授業

群馬県立中央中等教育学校 松井孝夫

知識の習得以上に 学ぶ力を身に付けさせる

群馬県立中央中等教育学校の松井孝夫先生が授業にアクティブ・ラーニングを取り入れ始めたのは、前任校の群馬県立尾瀬^{おせ}高校で体験的な学習に重点を置く「自然環境科」の授業を担当したのがきっかけだった。授業は、環境に関するテキストを用いて活動するものの、評価はペーパーテストで行っていた。しかし、ある時、生徒から「授業でいろいろな体験をしても、結局はテストでは知識を覚えていないと駄目なんですよね」と言われた。この一言で意識が変わったと、松井先生は語る。

「生徒は、体験に基づいた実践的な学びを求めているのです。ましてや、生物学の分野は日進月歩で、覚えた知識が将来そのまま使えるとは限りません。知識の習得以上に『学ぶ力を身に付けること』が大切だと考え、体験活動を中心とした授業の再構築に乗り出しました」

テキストはあくまで素材であり、それを用いてどのように科学的な思考を生徒に身に付けさせるかが重要——。その方針は、現任校でも変わらない。そんな松井先生が最も重視するのは、図で理解させる指導だ。「生物基礎」の「生物の多様性と生態系」を例に見ていく（P.19図）。教科書の第1節には「様々な植生」

として、植生の成り立ちや森林・草原の構造などの説明があり、森林の階層構造が図示されている。授業は週2時間なので、「植生とは」という説明から行うと時間が足りない。そこで、本文の内容を構造化した図に着目し、「図を使って森林の階層構造を説明できるようにする」ことを目標として授業を構成している。

「何も見ずに図を描き、他者に説明するためには、深い内容理解が必要です。すなわち、作図を通して、事象に対する理解度を自分自身で確認できるのです」（松井先生）

何も見ずに図を描けるようにするために、植生や森林の定義などの背景知識も必要になる。そこで、生徒には作図の準備として、教科書・資料集・問題集の「読み比べ」をさせる。教科書の内容をそのまま覚えればよいと考える生徒は多いが、同じ用語でも教科書や資料集によって解説の仕方や文章量に違いがあり、どれか1つを読むだけでは理解が偏る恐れがある。また、教科書では100文字で説明されている用語で



群馬県立中央中等教育学校
松井孝夫 まつい・たかお
教職歴23年。同校に赴任して5年目。「生徒同士が知的に刺激し合い、高め合えるような授業をつくりたい」

群馬県立中央中等教育学校

- ◎群馬県立中央高校を前身とし、2004年に6年制の中高一貫校として設立。「World Citizen」（地球市民としての日本人）を目指す生徒像に掲げ、国際社会へ積極的に参加できる人材育成を行っている。
- ◎設立 1963（昭和38）年
- ◎形態 全日制／普通科／共学
- ◎生徒数 1学年約120人
- ◎2015年度入試合格実績（現浪計）
国公立大は、北海道大、東北大、群馬大、東京大、一橋大、名古屋大、京都大、九州大、高崎経済大などに89人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大などに延べ312人が合格。
- ◎URL <http://www.nc.chuo-ss.gsn.ed.jp>

も、試験では50文字で説明を求められることがある。種々の資料から共通点を抽出し、事象を真に理解させることが、読み比べの狙いだ。

ホワイトボードシートで グループの考えを共有

読み比べでは、用語の意味を学級全体で定義することもある。白い紙をラミネート加工した「ホワイ

トボードシート」にグループで話し合った結論を書き、他のグループとそれを見せ合いながら、「この表現は必要ない」「この言葉を入れた方が良い」などと相談して、1つの定義にまとめていく。松井先生はこの方法を入試対策の指導でも用いている。問題をホワイトボードシートを使ってグループで話し合ってから解き、他のグループの解答と比較して、有効な解法や間違いやすい箇所を共有していくのだ。

いずれの場合も、生徒が考える活動は「個人↓グループ↓学級全体」という流れで行い、最後に再び「個人」で考えさせる。生徒たちが思考している間は、松井先生は基本的に答えは言わない。「教師が答えを言ってしまうと、広がり始めた思考がリセットされてしまいます。どれが答えなのか分からない状態を継続させることが、生徒の思考を活性化させるのです」と、松井先生は指摘する。

図の説明も同じ方法を用いることが多い。教科書や資料集を見ながら基礎知識を確認し、まず個人で図を描いた上で、ペアやグループで説明し合い、最後は学級全体で共有する。

作図で難しいのは、「どこから書き始めるか」だという。例えば、「炭素の循環」のような地球規模の模式図は、全体像を把握していきないと、とっかかりが分からない。炭素の性質、生物圏・大気圏・水圏などの地球の構造、光合成や発酵・腐敗などの原理を総合的に理解しておけば、連鎖的に全体像を描くことが出来る。「グループ活動では、『どこから描き始めるか』を切り口にするのも効果的です」と、松井先生は言う。

初見問題を楽しみながら解ける力を身に付ける

松井先生の授業は、知識の習得よりも思考のプロセスを大切にすることも大きな特徴だ。入試でよく出題される問題の1つに、最新の研究・実験のプロセスと結果を示し、それから分かることを述べさせるものがある。そのような問題が苦手な生徒が少なくないと、松井先生は言う。

「問題で与えられた情報から分かることだけを書くべきなのに、生徒はその情報だけでは判断できないことまで書く傾向があります。このような問題では、科学的な思考力や判断

力が問われるのですが、『テストでは覚えた知識を書いた方が良い』という思い込みから、与えられた情報だけでは言い切ることの出来ない『答え』まで想像して書いてしまうのです」

6年生（高校3年生）の学校設定科目「生物探究」の授業では、単細胞緑藻のカサノリを使って、核と細胞質の働きを調べた実験結果から分かることを話し合った。まず15分間、個人で考えてワークシートに記入し、20分間、グループで議論した（写真）。その後、ホワイトボードシートにグループの考えを書いて黒板に貼り出し、最後に生徒個々が自分の考えをワークシートにまとめた。思考力・判断力を鍛える学習と位置付けているため、松井先生はあえて授業時間内に答えを示すことはしない。モヤモヤした状態で授業を終えることで、授業後も友人同士で話し合ったり、自ら調べてみたりといった意欲を引き出すことも狙いだ。

「思考の練習を積み重ねることで、生物の学習はもっと楽しくなると思います。初見の問題でも、動揺せず、わくわくしながら解くようになってほしいのです」（松井先生）

生徒の状況を的確に判断する力が求められる

松井先生は、このような授業スタイルでは生徒を見取る力も重要だと強調する。

「机間巡視では、生徒の発言内容や読んでいる資料の内容など、注意深く観察します。生徒の表情から状況を読み取って、生徒に声を掛ける、あるいは思考を中断させないように見守るなど、その時々々の状況に応じたかわり方をしています」

知識量よりも思考力を重視する松井先生の授業は、生徒の意識を変え

写真 「生物探究」の授業の様子。ホワイトボードシートの授業は、同じ理科担当の松井透先生と共同で開発している。「良き理解者、相談者の存在があるから、私も挑戦できます」（松井孝夫先生）

つつある。知識・理解を問うテストよりも、文部科学省「全国学力・学習状況調査」のB問題のような思考力・判断力を問う問題の方が得意だという生徒や、初見の問題を楽しみながら解く生徒が増えていると、松井先生は手応えを語る。図を描いて理解することが、大学入試でも有効だったと話す卒業生も多いという。

課題は、思考力や主体性を含めた学力の伸びを客観的に測る方法が確立できていない点だ。生徒たちは楽しんで授業で学んでいるのか、どれだけ深く考えているのか、生徒が自らの成長を実感できているのかといった観点での評価方法を確立することが急務だという。

「進学実績を更に伸ばしながら、社会を生き抜くための思考力や主体性も高めるため、学校内外にネットワークを広げて情報交換に努め、自身の指導力を向上させ、アクティブ・ラーニングの深化につなげたいと考えています」（松井先生）

学校全体での高次なアクティブ・ラーニングへの挑戦は続く。

図 「生物基礎」「生物の多様性と生態系」授業デザインシート

授業時数	自校の生徒の特性を踏まえた本時の主な目標 (身に付けさせたい力・姿勢)	左記の力・姿勢の「学力の3要素」への分類	左記の力・姿勢を育むための指導内容
1時間目	資料を読み比べて、基本的な事柄を整理・理解する力	知識 協働性	<ul style="list-style-type: none"> 教科書、資料集、問題集の図や記述を比較しながら、「様々な植生」について理解し、ノート等に整理する。 ペアになって、互いのノートを確認し合う。
2時間目	資料(図や文章など)に示された事柄から読み取れることを基に議論し、考察する力	思考力・判断力・表現力 主体性・多様性・協働性	<ul style="list-style-type: none"> 教科書の「森林の階層構造」の図を理解する。 教科書、資料集、問題集の図や記述を比較しながら、理解を深める。 森林植生が階層構造になる理由について、グループでディスカッションする(明るさなどの環境条件を考慮しているか注目する)。 グループの見解をホワイトボードシートに記入して、掲示し、他のグループの見解と比較する。 個人で再度考え、自分の見解を記述する。
3時間目	資料(図や文章など)に示された事柄について、多面的に考察し、説明できる力	思考力・判断力・表現力 主体性・多様性・協働性	<ul style="list-style-type: none"> ペアやグループで、遷移のモデル的過程の模式図や写真のカードを使って、遷移順に並べながら、説明する。 遷移のモデル的過程を模式的に図示し、説明し合う。 遷移のモデル的過程の植生調査結果の表(年代を伏せて)を用いて、遷移の順に並べて、説明し合う。
4時間目	資料を読み比べて、基本的な事柄を整理・理解する力	知識 協働性	<ul style="list-style-type: none"> 教科書、資料集、問題集の図や記述を比較しながら、「遷移のしくみ」について理解し、ノート等に整理する。 ペアになって、互いのノートを確認し合う。
5～7時間目	<ul style="list-style-type: none"> 調査・測定を行い、データを収集し、表やグラフに整理し、表現する力 得られたデータから分かることを見いだす力 考えを発表し、論文にまとめる力 	知識・技能 思考力・判断力・表現力 主体性・多様性・協働性	<ul style="list-style-type: none"> 教科書に例示されている「植生と環境とのかかわり」に関する探究活動を参考に、調査計画を立てる。 グループごとに調査計画を確認してから、協力して調査を行う。 得られたデータを表などに整理する。 データから見えてくることについて、グループ内で意見交換し、グループの考察をまとめる。 発表後、各自で論文にまとめる。
8～9時間目	資料(図や文章など)に示された事柄について、多面的に考察し、説明できる力	思考力・判断力・表現力	<ul style="list-style-type: none"> 降水量が十分にある地域での「気温とバイオームの関係」を森林構造の模式図を使って理解し、説明する。 気温が高い地域での「降水量とバイオームの関係」を同様に理解し、説明する。 気候(気温・降水量)とバイオームの図を、作図しながら説明する。
10～11時間目	資料を読み比べて、基本的な事柄を整理・理解する力	知識 協働性	<ul style="list-style-type: none"> 教科書、資料集、問題集の図や記述を比較しながら、「生態系」に関する用語の意味を理解し、生態系を1つのまとまりとして捉え、ノート等に整理する。 ペアになって、互いのノートを確認し合う。
12～14時間目	<ul style="list-style-type: none"> 資料を読み比べて、基本的な事柄を整理・理解する力 相手に分かりやすく説明する力 	知識・技能 思考力・判断力・表現力 主体性・多様性・協働性	<ul style="list-style-type: none"> 炭素循環、エネルギー循環、窒素循環などについて、ペアになって、作図しながら説明し合う。この時、教科書以外の資料(資料集や問題集)の図も参考にしながら、理解を深める。特に、図のどこから書き始めるか、その流れを重視して考え、説明する。

学校やその周辺に、雑木林や雑草の生えている空き地などがあれば、実際の森林や雑草の群落を観察することから始めるとよいと思います。また、学習の最終段階で行うのもよいかもしれません(松井先生)

生徒の教科学習に対する意欲を最優先に高めることが必要な学校であれば、探究活動から学習をスタートするなど、まずは生徒の興味・関心を引き出す授業構成も考えられます(松井先生)

※この後、「資料を読み比べて、基本的な事柄を整理・理解する」(2コマ)、「インターネットや文献の検索結果(事例)を基に、議論する」(2コマ)、「教科書に例示されている探究活動から、任意のものを個人で選び、探究活動を行う(研究計画の段階などで意見交換を行う)」(4コマ)を実施。なお、授業時数は目安であり、指導内容は主な学習活動のみ掲載。

*松井孝夫先生からの提供資料を基に編集部で作成

生徒を学びに向かわせるため、 私たちは「AL」を選んだ

2013年度より、各教師が自発的にアクティブ・ラーニングの導入を進めている長野県屋代高校・附属中学校。新しい授業形態を教師はどのように受け止め、そしてなぜ、その導入を選択したのか。「授業改善」という全ての教師が抱く思いを原動力にして、ゆつくりと、しかし確実に新しい道を歩いてきた同校の2年間を追う。

変容する生徒に対応し、 進学校の責任を果たしたい

長野県屋代高校におけるアクティブ・ラーニング（以下、AL）の導入の動きは、2013年度、進路指導部（現在のキャリア教育係）のある発信に端を発したものだ。それは「生徒気質に合った授業改善」だ。その当時、校内では「入学生の質的变化とその対応」が大きな課題となっていた。北島匡晃^{まさあき}教頭は「その頃既に、生徒たちの学力、そして学びに対する意欲が変わってきたという共通認識が教師の間にあった」と

振り返る。

「授業で『ここは重要だから覚えておくように』と繰り返ししても覚えられない。頭の中に入っていないといふ以前に、頑張つて覚えようとせず、すぐに諦めてしまう……そんな生徒が少しずつ増えてきたと皆が感じていました。私たちもプリントの内容を工夫するなど、授業改善を重ねていきましたが、それでも学びに対する意欲を高めることは簡単ではありませんでした。生徒に『勉強したい！』と心から思わせるような仕掛けが必要だと感じていました」（北島教頭）

生徒の入学段階からの気質変容、

そして学力の多層化はベネッセの「スタディーサポート」の結果からも明らかだった。当時の進路指導部から

も「学習意欲と学力にこれだけ幅が生まれた生徒集団に、今までと同じ授業観で向き合い続けても、地域から求められる『進学校としての責任』を果たすことは難しい」と、非常事態宣言にも似た発信が盛んに行われるようになった。しかし、「では、どうするのか？」という問いに対して答えが見いだせてはいなかった。当時、教師が打った策は、授業進度や課題の量の調整を検討するような対処療法的な手段であった。

長野県屋代高校・附属中学校

- ◎1992（平成4）年、県内の公立高校として初めて理数科を設置。2003（平成15）年にはスーパーサイエンスハイスクールに指定されるなど、地域の理数教育を先導。「質実剛健」「文武両道」を校是とし、部活動も盛ん。
- ◎設立 1923（大正12）年
- ◎形態 全日制／普通科・理数科／共学
- ◎生徒数 1学年約270人
- ◎2015年度入試合格実績（現役のみ）
国公立大は、北海道大、東北大、東京工業大、新潟大、信州大などに125人が合格。私立大は、青山学院大、上智大、中央大、法政大、明治大、早稲田大、神奈川大、立命館大などに延べ252人が合格。
- ◎URL <http://www.nagano-c.ed.jp/yashiro/>

ALは授業改善のひと工夫 「これなら出来る！」

13年度の夏、進路指導部の宇都宮仁先生は、校外で開催されたキャリア教育の勉強会に参加し、そこで初めて「アクティブ・ラーニング」という言葉を耳にした。



長野県屋代高校・附属中学校 教頭
北島 健児 きたじま けんじ
教職歴32年。同校に赴任して11年目。「粘り強く、柔軟に」



長野県屋代高校・附属中学校
宇都宮 仁 うつのみや じん
教職歴25年。同校に赴任して5年目。キャリア教育係主任教諭。「その気にさせ、努力の方法を示し、諦めさせない」



長野県屋代高校・附属中学校
近藤 信昭 こんどう のぶあき
教職歴30年。同校に赴任して6年目。SSH主任。「基本を大切にし、自分の頭で考え、自分の言葉で表現させる」



長野県屋代高校・附属中学校
伊藤 雄基 いとう ゆうき
教職歴24年。同校に赴任して5年目。「楽しくなければ学校じゃない。楽しくなければ授業じゃない」



長野県屋代高校・附属中学校
駒井 健吾 こまい けんご
教職歴5年。同校に赴任して6年目。「外の世界にアンテナを張り、生徒と共有しながら学んでいく」

「生徒自身の能動的な学習」であるALに初めて接して、『これなら、幅広い学力層が存在する本校の生徒にも対応できる！』と確信しました。主体性や協働性を高めるALは、キャリア教育という側面から見ても魅力的でしたし、既に様々な進路行事を行っている中、これ以上新たな行事を増やすことなく、高校教育の本丸である授業のやり方を変えることで、変化する社会を生き抜く力を育むという考え方が、とても合理的に思えたのです。そして、ALを根付かせることで、学年や教科の枠を超えた共通の指導の軸をつくることが出来ると考えました（宇都宮先生）

勉強会の報告を聞いた当時の校長は宇都宮先生の考えに賛同し、「早急に校内で共有してほしい」と指示した。そして、ALとの出会いから3か月後の13年11月、授業改善に関する研修会で、宇都宮先生が講師になり、自身が校外の勉強会で見聞きしてきたことを同僚に説明した（図1）。「勉強会の後、自分でALを研究するうちに、これまで自分たちが授業

図1 校内研修会で初めてALを同僚教師に紹介した文書

1. フォーラム参加への経緯

- ① この数年、自分の授業で強く感じていることや悩み。
 - ・生徒の変化、学習内容定進度の低下
 - ・生徒の変化だけが理由か？
- ② 昨年度、中学部、伊藤雄基先生とともに高校1年を担当しての実感
 - ・「高1ギャップ」を埋めるだけではない効果
- ③ 「進路指導」だけではない「キャリア教育」の重要性。(資料①)
 - ・2つのLIFEとは。→自分の将来の①()と②() (資料②)
 - ①の力を養成する「キャリア教育」。②の力を養成する「アクティブラーニング」

2. 「アクティブラーニング (AL)」とその必要性

- ・ALとは (資料③)
- ・具体的にどのような「授業・学び方」のことをいうのか (資料④)
- ・AL実践の生徒と教師の感想 (資料⑤⑥)
- ・ALの課題 ～あくまでハイブリッドで～ (資料⑦)
- ・定着度の向上、学び別平均定着率 (資料⑧)
- ・大学や企業でも求められる「現代的能力の3要素」(キー・コンピテンシー)とは (資料⑨⑩)

3. で、フォーラム参加後の自分の授業では

- ・教科書減量中の問い、問題集・考査返却後の答え合わせの場面での実践 (時間がかかる)
- 個人学習→グループ学習で教え合い解答制作→発表・比較→授業者の正答例提示と比較 (前任校では) 高3生11月「大学入試問題を作成し模範解答を作る」のグループ学習実践

4. 今後への提案 (実話中であると存じますが)

- ①、実際にプロの「アクティブラーニング」実践セミナー講師をお招きしましょう(笑)。そして、お互いの授業を参考にしる機会を増やし、「感想」を送り合うことも。
- ②、教科の特性もあります。5分、10分、毎時でなくとも「生徒自身が動く時間」の設定は？
- ③、すべての教科で毎回の「考査の設問」を見直しませんか(六埋め問題+α論述問題も必出題)

*宇都宮先生が作成した文書を編集部が一部改編。

でやってきたことと全くの別物というわけではないことが理解できました。もちろん、ALにおける様々な指導手法を学ぶ必要はありますが、従来の指導内容に、生徒が話し合ったり、発表したりする場面を入れるだけでも授業は変わってくると思います。だから、校内研修会でも先生方に『こういった活動を少し授業に加えてみるだけです』と自信を持つ

で説明しました（宇都宮先生）
新しい授業設計の考え方を伝えるなら、専門知識を備えた外部講師を招いてはどうかという声も一部にあった。しかし、それをしなかったのは、まずは同僚だけの研修会で、授業改善へのモチベーションを高められたからだと宇都宮先生は話す。「本校の事情を十分に把握しているわけでもない外部の人に、聞いたこ

ともない教科指導法を勧められれば、自分が培ってきた指導法を否定されたように受け止める方もいるかもしれません。そこで、まずは校内で定期的に実施してきた授業改善の研修会の中で紹介し、関心を持ってもらうことを目指しました」(宇都宮先生)

実際、宇都宮先生の説明を聞いた同校の教師たちが抱いたALに対するイメージは、「それほど難しいことではない」「これまでの授業にひと工夫加えるだけ」といったものだったと、近藤信昭先生は振り返る。

「ALという言葉を知る前、つまり一斉授業が基本だった頃から、私も『ただ聞くだけでなく、自分の頭で考えることが大事だ』ということは分かっていたし、生徒が生き生きとしている授業をしたいと常々思っていました。ALとの出会いによって、その願いが実現する可能性が高まったと感じました」(近藤先生)

宇都宮先生がALの可能性と、更なる授業改善の必要性について語る中で、他の教師からは同校の体育科の取り組みが紹介された。体育科では既に授業改善の一環として、体育指導の様子を動画に記録し、授業後、

それを体育科内で共有する取り組みを行っていたのだ。

「体育科では、教師同士が昼ご飯を食べながら、指導の様子を撮影した動画を見て意見交換していると聞いて、私は『なんだ、授業改善の大きな一歩は、既に校内から始まっているじゃないか』と感動しました。全ての教科で教師同士が学び合えば、ALのスムーズな導入もきつと可能だと思いました」(北島教頭)

校内研修会が終わる頃には、何人かの教師からは「今度、私もやってみようかな」という言葉が聞こえてきた。そして、何日もしないうちに、授業中、ガタガタと机を動かす音が校内のあちこちから聞こえるようになった。

個々の工夫から始まり 教科ぐるみの活動へ広がる

翌14年度には、ALに造詣(ぞうけい)の深い他校の教師を講師に招き、実践的ノウハウを交えながらALについての講演をもらった。5分程度のAL先進校の授業ビデオも紹介したが、教師の反応は、「これなら自分にも出来そうだ」といったものだった。

その頃、既に教師の中には個人レベルでALに挑戦する者もいたが、14年度9月からは、宇都宮先生が属する3年生の国語科で、ALを導入することになった。

「素材文のみを載せた京都大の現代文の入試問題を配布し、生徒がグループになって設問を作成するという授業を行いました。また、グループでつくった入試問題の解答を、過去問題集の解答例や私の解答例と比較し、どれが一番良い解答かを皆で話し合うというスタイルを、入試直前まで繰り返しました」(宇都宮先生)

同校は、14年度センター試験の国語で下位層が減少し、上位層が拡大する好成绩を収めた。「その結果がALの成果かどうかは分からない」と断った上で、宇都宮先生は続ける。

「生徒が考えたり、話し合ったりする機会が増えたことは、少なくとも、伸びるための土壌にはなったのではないでしょうか」(宇都宮先生)

ALとの出会いから3年目の15年度は、更に各教師がALの実践を重ねている。そして、かつて大きな課題と認識していた生徒像が、少しずつ変化していることを英語科の駒井

健吾先生も感じるという。

「確かに、最近の生徒は知識を統合してアウトプットする能力が低くなっています。だからこそ、与えっぱなしで授業を終わるのではなく、教わった知識をALで活用させることで、本物の知識として定着しているように思います」(駒井先生)

AL導入による高校の授業の変化は、同校附属の中学校の教師にも影響を与えている。国語科の伊藤雄基先生は次のように話す。

「私は、高校のALの授業を見ることで、『中学校でももっと意図的に、課題を持って話し合わせよう』といった意識が強くなりました。以前から、感想を話し合う程度の活動は授業で行っていましたが、高校の授業を参考に、『教科書の文章を読んだ後に、テスト問題と解答を班ごとにつくる』といった、生徒の思考を深める活動を意識するようになり、中学校のALが確実に変わりました」(伊藤先生)

ALは教師が意図的に 使いこなすツールである

同校がAL導入による授業改善に取り組み中で、解決すべき新たな課

宇都宮先生の3年生の現代文の授業。生徒の話し合いに耳を澄ませることで、「今、生徒は何が分かっている、何が分かっているのか」をリアルタイムに把握し、生徒の理解度に応じて柔軟に授業を構成していく。生徒は、同級生の説明に一生懸命に耳を傾け、「分からない」「違う」などと率直に語る。「教師が一方向的に教える授業では、『実は聞いていなかった生徒』は必ず出てくる。そういった生徒を見逃したくなかったから、私はALを選択しました」(宇都宮先生)

題も見えてきた。

「人とかかわりながら学ぶことが苦手な生徒をどのように巻き込みながら、授業をつくるかは大きな課題であり、まだ答えは見えていません。そのような生徒に対しては、発表が出来ない分、提出物に書いた内容をしっかりと評価するといったことをこれまで以上に心掛けるなど、試行錯誤しています」(宇都宮先生)

「ALに懐疑的な教師の中には、生徒が授業とは関係のない話をしたり、ざわついたりして混乱するのではなにかと心配する声もありますが、本校の生徒を見る限りそれは杞憂(きゆう)でした。むしろ、教師が発問のレベルを間違えると、生徒が途端に話さなくなることに注意すべきです。理解の状況を見極めながら、慎重に発問する必要があります」(駒井先生)

「AL導入で授業進度は遅れなかったか」という問いには、「生徒の発言を生かしながら授業を深めると、面白くなり過ぎて、予定通りに進まないこともある」と近藤先生は笑う。

「授業を更に面白いものにしなが

ら、進度を維持する手法をもっと勉強したいです」(近藤先生)

「授業中に寝る生徒は確実にいなくなりまし、静かに授業は聞いてくれるけれどもテストでは点が取れない生徒も少なくなりました。他の生徒に説明するために、積極的に辞書を引く姿も当たり前のように見られます。従来の授業スタイルに戻り始める必然性はありません」(伊藤先生)

同校では今年度、ALについての理解を更に学校全体で深めるため、高校の教師全員が附属中学校の授業を見学することを計画している。

「生徒の課題を皆で認識した上で、授業改善策の選択肢としてALが提示されたから、そして、入試のためだけでなく、自ら考え、自ら学ぶ人材を育てたいというキャリア教育観を土台にしたから、ALが先生方に受け入れられたのです。私たちは生徒を育てる手法の1つとして、ALを手にしたわけです」(北島教頭)

目的を明確にし、能動的に授業をデザインする同校教師の挑戦は、これから続いていく。

アクティブ・ラーニングで

教育の実質化と 大学の国際化を推進

中部地区で唯一、文部科学省「スーパーグローバル大学創成支援（SGU）トップ型」に採択された名古屋大は、国際化に向けた取り組みの環境として、数年前からアクティブ・ラーニングの普及活動を進めている。その取り組みは、大学教育にどのような変化をもたらしているのか。また、生徒を送り出す高校にはどのような心構えが必要なのか。総長補佐（国際化推進担当）の土井康裕准教授に聞いた。

答えの無い問いに真正面から 挑戦する若者を育てる

本学では、数年前から教育の実質化を目指し、国際部門と高等教育研究センターなどが協力して、学習者を中心とした教育の普及に努めており、その一環としてアクティブ・ラーニングの研修などを行ってきました。

を履修すれば、それらの予習・復習や宿題といった最低限の学習しか出来ず、自身の興味や関心を伸ばす学習が出来ない状態になっています。

そうした現状も受け、学習内容を知識として定着させるだけでなく、知識を実際に活用できる能力にまで引き上げるために、アクティブ・ラーニングの研究と普及を推進することになったのです。現代社会の課題には、様々な利害関係から1つの答えを容易には出せないもの、特定分野からのアプローチだけでは解決困難なものが数多くあります。そうした課題に対処するためには、答えに至るまでの過程をしっかりと学び、更にその先に学ぶべき内容があることを理解することが大切です。本学では、自分で問題に直面し、学問知識や論理的思考の重要性を理解させた上で、学生が自ら学びたいと考える機会を提供することが重要だと考えています。つまり、使える能力を身に付けることこそが「教育の実質化」であり、答えの無い新しい問題にも真正面から取り組める人材を育成しようとしています。

欧米のいわゆるリベラルアーツの

大学は、そうした教育に熱心に取り組んでいます。それは、知識の詰め込みではなく、多様な考えを受け入れながら柔軟に考える基盤形成を行うことが、世界に通用する人材を育てるために重要だと考えているからです。本学はリベラルアーツを目指すわけではありませんが、積極的にその長所を取り入れ、学生がパッシブ（受動的）な講義ではなく、主体的・意欲的に取り組める活動を教育課程や授業に盛り込もうとしています。

海外の識者を招いて 全学的な研修を実施

そのような課題認識は、本学と同様、SGUに採択された多くの大学が共有しています。SGUには多様な人材の育成と評価を行う方針が課せられ、産業界の強い要請もあり、世界と肩を並べて競い合える人材の育成が必要だという認識があります。

本学でも数年前から、教員の意識啓発やノウハウの普及に努めてきました。例えば、2014年にはアメリカ・オレゴン大学から講師を招き、アクティブ・ラーニングを取り入れた模擬講義を行っていただきました。

た。その背景には、SGUの申請に向けた準備や全学的な国際化を推進する中で、教育の実質化がクローズアップされてきた実態があります。

今の学生は、例えば、低学年時に履修する教養教育科目を出来るだけ早い段階でたくさん履修し、規定の単位を修得しようとする傾向が見られます。優秀な学生でも、多くの科目

また、アメリカ・カリフォルニア大学ロサンゼルス校からも講師を招いて、教員対象の講演を10日間行い、更に、本学の授業に対する意見を聞く、学部系統別のワークショップも実施しました。また、同様のワークショップを愛知教育大や三重大と開催し、SGUの活動で得たノウハウや情報を、地域の大学に波及させる取り組みにも力を入れています。

今後は改革の第2段階として、学内での活動を充実させていきたいと考えています。まだ準備段階ですが、出来れば15年度中に、若手教員を中心としたワーキンググループを立ち上げ、アクティブ・ラーニングで何ができるのかを検討していく予定です。まずは多くの若手教員に参加してもらい、先生方が何を知らたいの



名古屋大 総長補佐 (国際化推進担当)
土井 康裕 とい・やすひろ

ドイツ・フライブルク大経済学部の学部・修士一貫教育である Diplom 課程 (修士相当) 修了後、名古屋大大学院経済学研究科で博士号を取得。

か、彼らの意欲や悩みを引き出しながら情報提供を行うところから始めたいと考えています。

その上で、教員が各自の授業を見直し、海外のアドバイザーにも意見をもらいながら、授業の改善を図っていくことが、その後の課題になります。次年度までには、学生がどれだけ学習意欲や学力を上げたのかを測る指標も開発し、具体的な成果を内外に発信していく予定です。

アクティブ・ラーニングが 大学教育を変える第一歩に

アクティブ・ラーニングに対する本学内の受け止め方は、様々です。中には、これまで行ってきた教育を否定されると感じる教員がいるのも確かです。そうした先生方に、これまでの教育には何が足りなかったのか、なぜアクティブ・ラーニングが必要なのかを説明し、理解してもらうことも大きな課題です。

教員の中には、「そのような方法を取り入れなくても、学生のモチベーションは十分上げられている」

という方もいます。全ての授業に、必ずアクティブ・ラーニングを取り入れなければならないということはありません。ただ、もう一段高いレベルの教育を行うために、アクティブ・ラーニングの方法論を通して授業設計を見直し、学生の力を更に取り出せるような学習環境を用意することには大きな意味があります。

少人数クラスなら、グループ・ディスカッションを行い、学生が主役になれる時間をつくる。大教室での講義であれば、学生の集中力が途切れないように、15分に1度は考えさせる質問をするなど、授業設計を少し変えるだけで、学生が生き生きと授業に取り組むようになるでしょう。

国内だけで競う時代は 終わりつつある

海外の状況を見ると、英語が公用語の1つであるシンガポール、英語が準公用語のマレーシアはもちろん、タイやベトナムなど英語が公用語ではない国でも、上位の公立高校では、英語で物理や化学の授業を行

う学校が増えています。また、韓国では、生徒の英語力を授業で徹底的に鍛え上げ、英語の外部検定試験のスコアを高校卒業資格に設定する学校もあります。それらの国の生徒の中には、将来、日本を含めた海外のトップ大学に進学して研究者になりたい、母国で一流の技術者として働きたいという希望を抱く若者が大勢います。日本の高校生にそうした海外の若者の様子を伝え、国内だけで競い合う時代は終わり、優秀な海外の学生と競争する時代になりつつあることを自覚してほしいと思います。

高校の先生方には、これまでのように大学入試を大切にして指導していただく一方、海外の中等教育の潮流や、国内の大学教育にも目を向けていただき、生徒にとってどのような力を身に付けさせることが大切なのかを考えながら、生徒が主体的に学べる環境を用意していただきたいと思えます。高校教育で身に付けた力を更に伸ばしていける大学教育を目指して、我々大学側も改革を推し進めていくつもりです。

ハートを
こがせ!

Vol.04

埼玉県立川越工業高校

電気科 課題研究 電車班

ものづくりの喜びと
苦しさを味わい、
学びの意味を知る

何日間も掛けて作り
何日間も掛けてやり直す

埼玉県立川越工業高校電気科の課題研究の1つである電車班の最大の目標は、10月の文化祭で自作の電車を披露することだ。しかも、展示するだけではなく、お客さんに乗せて実際に走行する。授業を通して電気に関する知識と技術を身に付けた彼らだが、人が乗れる電車を作り、動かすのは初めて。しかも凶面が用意されているわけでもなく、部品の大半は市販の鉄材を加工した手作りだ。ものづくりが好きな生徒たちだが、4月に電車班としての活動をスタートした時は、何から作業を始めてよいのか全く分からない状態だったという。

まずは担当の君島栄先生きみしまさかえから前年度の活動について説明を受け、先輩の作った電車をチェックしていくことから始める。そして、今年1年でどんなところを改良したいのかを全員で考える。課題

研究である以上、ただ作って動かすだけでなく、「先輩が作ったものを改良する」ことが重要なのだ。とはいえ、作業は決して順調には進まない。

「何日も掛けて作ったのに、途中で間違いに気が付いたら、また何日も掛けて解体し、やり直します。『出来た!』と喜んだ直後、動くはずのものが動かない時の絶望感の大きさといったら……。やつと原因を突き止めても、それを解決するためには一体どの工程まで戻らなければならないのかを考えているうちに、血の気が引いていくのが自分でも分かるんです」(槻木澤さん)

「それでも、自分たちがやつと作った小さな部品が、他の班の作った部品と組み合わせたり、動いてくれた時は本当に感動しました」(木村さん)

勉強の仕方、考え方が
大きく変わった

試行錯誤を繰り返し、小さな成功を積み重ね

教師の
思い

社会で生き抜くために
自分で考え、
やり抜く経験を積ませる



埼玉県立川越工業高校
君島 栄
きみしま さかえ
教職歴33年。同校に赴任して7年目。
電気科。電車班担当。

失敗から這い上がる経験が
課題研究の醍醐味

課題研究が始まった4月当初は、ある程度私から説明はしますが、役割分担が決まった後はほとんどノータッチです。試運転の日までにどうすれば製作が間に合うのか、生徒自身が考えるしかありません。私から答えをもらうのではなく、失敗して、挫折感を味わって、そこから這い上がる経験が大切であり、そこそが課題研究の醍醐味だと思えます。教師がかかわり過ぎると生徒の研究も面白くなくなりますし、こちらが黙って見ていると、「頭が柔らかいな」「私には思い付かない!」と感心させられることもしばしばです。生徒は、卒にはめたら伸びません。だから、私が掛ける言葉は「すごい!」と「間に合わせる!」だけです。



電車班の作る「川工電鉄」に使われている部品の8割は、生徒たちの手作り。完成品がイメージできるような精緻な図面に従って工作するというより、作りながら考えてまた作り直すという、まさに試行錯誤の連続。

るうちに、生徒たちはほとんどタフになっていく。「今まで、1つの物事に對して、これほど集中し、長期間取り組んだことはありませんでした。自分もやれるんだと自信になりました」（井口さん）

「作業中に、『こんな部品があればいいのに！』とアイデアが湧いてくるんです。でも、そんな部品は売っていませんから、じゃあ自分たちで作ろうという話になります。でも、作り方が分からないから、だったら皆で勉強して作ろうということになる。分からない時は、諦める前に勉強しようという考え方に変わったんです」（榎木澤さん）

課題研究を通して授業の受け方も変わった。それまでは、教科書の図や文章を覚えることが勉強だと思っていたが、実は、図を頭の中で描き直し

たり、文章を説明し直したりすることが出来てはじめて分かったと言えるのだと生徒たちは話す。「ものの考え方が柔軟になって、人の意見を聞けるようになったと思います。電車作りも、自分1人の考えでは限界がありますから、自分とは違う角度から見えてくれる仲間が必要です。みんなの意見と自分の意見を混ぜ合わせて、ブラッシュアップする楽しさを知りました」（久保田さん）

文化祭での運行というミッションを成功させるため、土日も登校し、作業する生徒たち。「大変ではないのか？」という問いに「電車製作に誇りを感じているから、苦にならない」と笑う彼らは、普通の高校生でありながら、しかし、紛れもなくものづくりのプロフェッショナルだ。

榎木澤拓海

つきざわ・たくみ

3年生。電車班全体リーダー。モーターやギア、動力部の製作を担当する「台車班」班長。

木村招太郎

きむら・しょうたろう

3年生。ブレーキや電気の配線などの製作を担当する「電装お面班」班長。

井口彰彦

いぐち・あきひこ

3年生。電車班全体副リーダー。レールの製作を担当する「軌道班」班長。

久保田亮一

くぼた・りょういち

3年生。車体やパンタグラフの製作を担当する「車体班」班長。

生徒が最も学んだのは「電気」ではなく「我慢」

電車班では、土日に作業することを「休日出勤」と呼んでいますが、「やるしかない」という感覚を高校時代に知ることはとても意味があると思います。生徒たちは4月からは社会人です。時に北風も吹き付ける社会に、いきなり高校生を送り出したら風邪を引いてしまいます。だから私は、課題研究では半分高校生、半分社会人というスタンスで接するようにしています。

生徒たちが3年間掛けて一番学ぶのは、実は電気の知識ではなく、我慢なのだとは考えています。我慢すること学んだら、上司に怒られても歯を食いしばって頑張れますし、おのずと知識も身に付くはずですよ。

埼玉県立川越工業高校

◎1年次から専門科目の授業を重視し、ものづくりの基礎から応用技術までを体系的に学ぶ。約1万9000人の卒業生が産業界で幅広く活躍しており、交通系ICカードの開発者など、著名な技術者も送り出している。

◎設立 1908（明治41）年

◎形態 全日制（デザイン科、化学科、建築科、機械科、電気科・定時制（普通科、工業技術科）／共学

◎生徒数 1学年約280人

◎2015年度進路実績（全日制・現役のみ）

4年制大は、岩手大、芝浦工業大、東京電機大などに34人が合格。短大、専門学校進学59人、就職は、JX日鋼日石エネルギー、本田技研工業、IHI、西武鉄道、関電工などに174人。

◎URL <http://www.kawagoe-h.spec.ed.jp/>

新課程入試に対応するための 進路希望を 明確化させる指導

大学入試に向けた切り替え時期に当たる2年生2学期以降は、
進路希望の方向性を明確にすることで学習意欲を高める好機となる。
新課程入試に対応すべく、各校はどのような進路指導を行ってきたのか。

面談、進路学習、学び合う集団づくりなど、
進路希望を明確化させるための2年生後半以降の指導を中心にひも解いていく。

学校事例 ①

岩手県立盛岡北高校

節目の面談と志望理由書の作成で 「学びたい学問」を追究させる

生徒の理系・資格志向が 志望のミスマッチを生む

岩手県立盛岡北高校は、例年3

桁の国公立大合格者を出す進学校だ。現行課程に対しては、学力差の拡大を懸念し、対策を立てていた(本誌2012年12月号「新課程のファースト・ステップ」で紹介)。

結果的に、15年度入試の合格実績は例年とほぼ変わらなかったが、生徒の進路選択の過程には課題が見られた。保護者の意見で看護学部を志望する生徒、理系に適性があるにもかかわらず経済学部を第1志望に挙げる生徒など、3年次で志望学部を確定すべき段階になっても、自分の希望や適性と志望学部とが食い違う生徒がおり、中には浪人中に文転する生徒もい

たという。

生徒の強い理系・資格志向が目立つと、進路指導主事のおだしまよし小田島淑人先生は指摘する。

「理系の学部は就職に有利、とにかく仕事につながる資格を取った方がよいという一般的なイメージで、大学を志望する生徒が後を絶ちません。生徒自身が将来像を描けていないため、保護者の意向に左右されるケースもありました」

小田島先生が「現在進行形の課題」と語る生徒の進路選択に対して、同校ではどのように向き合っているのだろうか。

進研模試直前の面談で 進路希望を焦点化

進路選択での大きな節目として同校が意識しているのが、1年生

3学期の文理選択、及び2年生2学期に取り組む志望理由書の作成だ。文理選択に向けては、1年生の早い段階から入試関連の資料を基に説明会を行ったり、学年集会で呼び掛けたりして、安易な選択をしないように啓発している。

そして、進路希望を明確化させるために、1、2年生を通じて重視しているのが個人面談だ。現1年生では、前3年生での進路指導の経験を踏まえて、進路希望調査を例年より多く、年4回実施。二者面談・三者面談で生徒や保護者の意思を確認しながら、進学先へのイメージを膨らませ、3学期での文理選択へとつなげていく。

2年生では、年3回の進研模試の直前に行う面談を軸に、志望の焦点化を図っている。最も重視するのは、初めて志望校を記入する7月模試だ。2学年主任の高橋直文先生は次のように説明する。

「面談前に、ベネッセのハイスクールオンラインから『2年生7月模試の目標突破に向けた戦略シート』をダウンロードし、志望校や進研模試の目標点を記入させ

ます。それを見ながら、生徒一人ひとりと志望校について話し合い、好きな学問や将来希望する職業などから可能性を探っていきます」

10月になると志望理由書の作成に着手する。生徒が書いた原案を担任がチェックし、生徒はそれを基に修正する。修正とチェックを何度か繰り返し、11月には完成させる。ただ、その時点でも、明確に志望理由を述べられる生徒はそれほど多くないという。

「その職業に就きたいと思った『きっかけ』を、志望理由と勘違いしている生徒が少なくありません。『幼い頃、病院で看護師に優しくしてもらったから』というのはあくまでも興味を持ったきっかけです。志望する職業を通してどのように社会に貢献したいのか、自己実現を図りたいのかということまで深めていかなければ、本当の志望理由にはなりません」（小田島先生）

「学びたい学問」に こだわる進路指導に転換

一般的な志望校選択のプロセスとして、就きたい職業から逆算し

て志望校を考えさせる学校は少ない。同校の進路学習も、以前は職業研究↓大学・学部研究という流れだったが、今は大学で「学びたい学問」を重視した進路指導に転換しつつある。それは、14年度、1年生の進路ガイダンスで、当時の副校長が生徒に呼び掛けた言葉がきっかけだった。

「君たちが社会に出るのは7年後、大学院を入れれば9年後となる。今は好調な業界や職種も、その頃にはどうなっているかわからない。進路選択で迷っている生徒は、不透明な未来を心配するよりも、大学での4年間で本当に学びたいと思う学問に没頭しなさい」

高橋先生はこの言葉を契機に、自身の進路指導が変わったと話す。「副校長の言葉に後押しされ、最後の最後に自分の気持ちに従って進路目標や文理選択を変えたという生徒もいました。私自身、それまでは職業重視か学問重視かで迷い、『心理学を学びたい』という生徒に『それで生活が成り立つのか』などと揺さぶりを掛けたこともあり

ました。今は生徒の本当に学び



岩手県立盛岡北高校
小田島淑人
おだしま・よしと
教職歴25年。同校に赴任して7年目。進路指導主事。



岩手県立盛岡北高校
高橋直文
たかはし・なおふみ
教職歴28年。同校に赴任して6年目。2学年主任。



岩手県立盛岡北高校
村上浩紀
むらかみ・ひろき
教職歴19年。同校に赴任して3年目。1学年主任。

◎「師弟和熟」を教育理念とし、勉学に励み自身を鍛える「青春道場」を目指す。◎全日制／普通科／共学／1学年約240人◎2015年度入試合格実績（現浪計）／国公立大は、北海道教育大、岩手大、東北大、筑波大、岩手県立大などに122人が合格。私立大は、学習院大、東京理科大、立教大などに延べ203人が合格。

たいという志が確認できれば、生徒の背中を押すようにしています」

進路学習の内容も、大学模範講義重視の方針に切り替えた。15年度の1学年では、社会人講師による講演に加え、大学模範講義も実施。更に、2学年では、2回行う大学模範講義のうち、10月分を1・2学年合同で行うことにした。2年生が活発に質問する姿に、1年生が刺激を受けることを期待する。1学年主任の村上浩紀先生はこう話す。

鹿児島県立加世田高校

2年生の修学旅行から春休みまで
意識を途切れさせない進路指導

急速な少子化により
学力・進路意識に変化

「私自身、数学が好きで、高校生の頃は就職のことなど考えずに大学の数学科に進みました。大学とは、本来そういうところなのだと思えます。大学の4年間で充実していれば人間的に大きくなれますし、たとえ職業に直結しない学問でも、一生懸命に学んできたことをアピールすれば社会も認めてくれるはず。好きな学問をとことん追究し、魅力あふれる人間に成長することで、おのずと未来は拓けるのではないのでしょうか」

今後の課題は、引き続き理系・資格志向の生徒との対話を大切にすることであり、そのためには「担任力」の向上が不可欠だと、小田島先生は語る。

「ここ数年、30代前半で採用される教師が増え、年齢相応の経験を積んでおらず、指導力が十分には付いていないケースが見られます。面談に説得力を持たせるためにも必要なのは、生徒との信頼関係です。1対1の対話を大切に、生徒のモチベーションを高めていけるよう、教師の指導力向上を促していきたいと思っています」

鹿児島県立加世田高校は、南さつま市にある地域を代表する進学校だ。100年以上の伝統を有し、地域の成績上位層が憧れる高校の1つだが、急速な少子化の影響で、ここ数年、学級減が続いている。学力も徐々に低下し、進路意識にまで影響を及ぼしているという。進路指導部主任の渡辺豊隆先生は、こう説明する。

「かつては、大半の生徒が『加世田高校に入ったからには、国公立大を目指したい』という意欲を持っていました。それが、現行課程になってから、入学段階での国公立大志望者が減少し始め、現2年生では50%にまで低下しました。学

力のみならず、進学意欲の喚起も大きな課題となっています」

自分の学力を客観的に見られず、実力がありながらも志望校を低めに設定する傾向もあるという。生徒が年々多様化していく中で、「元で難関大を目指し、志望を実現できる子どもを育てる」という目標の下、学力・意欲の向上を図ると、教師は奮闘している。

「志望大学別ゾーン集会」で
学び合う集団をつくる

同校が受験生への切り替え時期として意識しているのは、2年生2学期だ。12月の修学旅行を節目にして意識を高めていき、教師の異動などで指導が手薄になる春休みなどにしっかりと学習に取り組ませる。その上で、3年生1学期のイ



鹿児島県立加世田高校教頭
田嶋吾富
たじま・あつむ
教職歴27年。同校に赴任して1年目。



鹿児島県立加世田高校
當 武三
あたりに・たけぞう
教職歴35年。同校に赴任して9年目。3学年主任。



鹿児島県立加世田高校
渡辺豊隆
わたなべ・とよたか
教職歴19年。同校に赴任して8年目。進路指導部主任。

◎創立103年目。2014年度、鹿児島県の進学指導重点校の指定を受ける。◎全日制/普通科/共学/1学年約130人◎2015年度入試合格実績(現浪計)/国公立大は、東京外国語大、九州大、熊本大、鹿児島大、北九州市立大など59人が合格。私立大は、国際基督教大、西南学院大、福岡大など延べ130人が合格。

ンターハイ予選後に放課後学習の開始、入試に向けた標語づくりなどの諸施策を通して、最終的な切り替えを図るのが例年の流れだ。2年生前半は、グループで大学・学部研究を行って発表したり、ベネッセの「表現サポート」を使って志望理由を書いたり、志望への意識を徐々に深めていく。14年度の2年生には、10月にLHRを使ったクイズ形式での進路学習を行った。3年生の進路講演会の資

料を基に「何割の大学生が転部を希望しているか」「大学進学にかかわる費用は」など、進路選択にかかわる問題を選択形式で出題し、入試や進路選択の実態把握を促す。

一方、様々なカテゴリーによる集団づくりを通して、学習意欲を高めるのもこの時期だ。2年生9月には「志望大学別ゾーン集会」を実施。生徒数が少なく、志望大でグループ分けが出来ないため、「理系で個別学力試験に国語が課される大学」「個別学力試験で数学ⅠA・ⅡBが課される大学」など、入試の特徴に応じてグループを作り、ガイダンスを行った。年度によっては、GTZ(*)のゾーンの集会も開いている。

大学生主導のゼミを実施し 大学への憧れを喚起

例年、修学旅行は、東京の大学見学や卒業生との懇談会などを行い、生徒の意識を大学へ向けるためのキャリア教育の場にもしている。大学での学びを実際に体感させ、大学生活や学問への理解を深め、憧れを喚起することが狙いだ。

14年度は東京大・早稲田大の学生とのゼミ体験・懇談会を実施した。両校の学生がファシリテーターとなり、「新しい携帯電話のスタイルを提案しよう」というテーマで少人数グループによるゼミ形式の課題研究を行った。3学年主任の當武三先生は次のように述べる。

「生徒に与えた衝撃は大きく、『すぐにも大学に行きたい』という生徒がいたほどです。ゼミを主導した大学生の姿、彼らが語る学生生活の様子に大きな刺激を受けたのだと思います。教科担任からも授業態度が見違えるように変わつたという声が寄せられ、進路意識の向上が学習意欲を高めることを改めて感じました」

「レベルアップ40日作戦」で 3学期～春休みを乗り切る

修学旅行で高まった意欲を3年生まで持続させていくことも、この時期の大切なポイントである。同校では、1・2年生の各学年で、2月下旬～4月上旬の期間を「レベルアップ40日作戦」として有効に活用することを呼び掛けている。

田嶋吾富教頭は、取り組みの背景を次のように説明する。

「毎年、3学期から春休みの時期は、教師の入れ替えで慌ただしく、高校入試のための休日もあるため、生徒への学習指導が手薄になりがちです。しかし、2年生にとつては受験に向けた大切な時期です。スムーズに3年生につなげていくために、この期間を有意義に過ごさせることが重要だと考えています」

取り組みの目標は、「1年間の積み残しをしない」ことだ。学年末考査と進研模試の復習、春休みの課題などを実施する。これまで、他の時期の模試と同様、1月の進研模試も個票をそのまま生徒に渡していた。現在は、担任が2週間程掛けて生徒一人ひとりの個票をくまなく確認し、学習方法や結果に対するコメントを書き加えたり、大事などころにマーカーを引いたりして、3月上旬のLHRで渡している。教師が生徒の状況を詳しく把握すると同時に、手作り感のある個票を返すことで、生徒の意欲を高めたいと考えている。課題の出し方も工夫する。以前

は、高校入試期間と春休みを別々に捉え、それぞれに課題を出していたが、この期間を一続きとして捉え直し、2月末に5教科一括で課題を出すようにした。

「高い志望を実現するためには、主体的に学ぶ力を身に付けていることが重要です。課題提出までの期間を長く設定し、スケジュールを管理しながら主体的に学習に取り組む『段取り力』を身に付けてほしいと考えました」(渡辺先生)

今後も、引き続き学力層の拡大への対応が課題だと、當先生は話す。「成績上位層の生徒の減少もさることながら、度数分布の広がり近年の課題です。それぞれの学力層に対して、より一層きめ細かい指導が必要になるでしょう。現在、進路指導部を中心に、上位層の生徒に向けた添削指導や、下位層の生徒への基礎学力対策などの取り組みを整備しています。本校に期待して入学してきた生徒一人ひとりの志望を実現させたい、その思いを胸に、地道な取り組みを続けることが、少子化の中で本校が生き残る道だと考えています」

* ベネッセのテストにおける共通の評価指標。



◎下北半島の産業・経済の振興・発展と共に、地元出身の技術者の育成を目的として創立。校訓「自立」の下、「新しい時代を主体的に切り拓く若人」を育むことを目指す。文武両道を志し、部活動にも盛んに取り組む。

設立

1964(昭和39)年

形態

全日制/機械科・電子機械科・電気科・電子科・設備・エネルギー科/共学

生徒数

1学年約175人

2015年度進路実績(現浪計)

国公立大は、弘前大、山形大、長岡科学技術大、青森公立大などに6人が合格。私立大は、青森大、八戸工業大、日本工業大、東海大などに延べ9人が合格。専門学校進学13人。就職は、東北電力、トヨタ自動車、東日本旅客鉄道、本田技研工業などに121人。公務員11人。

住所

〒035-0082
青森県むつ市文京町22-7

電話

0175-24-2164

Web Site

<http://www.mutsu-th.asn.ed.jp/>

青森県立
むつ工業高校

進学実績向上

生徒指導と学び直して 「荒れ」の状態を克服し 国公立大合格者を出す

変革のステップ

背景

◎生徒の問題行動からは、学校・教師への釈然としない思いが垣間見えた。不本意入学者や意欲の低い生徒もいた

STEP 1

実践

◎生徒との信頼関係の構築に向け、生徒の思いに寄り添い、将来への目標を持たせる指導を重視。生徒が落ち着いた段階で、学び直しを実施

STEP 2

成果

◎基礎学力や学習意欲が向上し、国公立大合格者を出す。以降、進学志望の生徒が増加し、毎年国公立大合格者が出るように

STEP 3

生徒の思いに寄り添い
教師と生徒の信頼関係を構築

約10年間の変革を経て、毎年国公立大の合格者が出るようになった青森県立むつ工業高校。しかし、かつては、生徒の問題行動が多く、授業に集中できない生徒もいた。設備・エネルギー科主任の畑中次夫先生はこう語る。

「教師の言葉を聞こうとしない生徒の姿からは、高校以前の経験からくる、学校に対する釈然としない思いが見え隠れしていました」

2006年4月、赴任2年目の畑中先生は、設備システム科(現、設備・エネルギー科)の学科主任兼3年生担任となり、校内に落ち着きを取り戻すべく変革に着手した。まずは、生徒の心の内を知るために、生徒たちに「学校や学科に不平・不満があればどんなことでも私たちに言ってほしい」と何度も語り掛けた。すると、1人の生徒が「進路のことを相談できない」とつぶやいた。もちろん、同校ではそれまでも進路指導を行ってきた。しかし、生徒と教師との間に信頼関係が十分に出来ておらず、相談する気にならないという思いが隠されていた。そこで、教師たちは、生徒の不平・不満に耳を傾け、改善できることは改善し、出来ないことはきちんと理由を説明して、生徒との関係構築に努め始めた。

目標に向かって努力した生徒が 晴れやかな表情で卒業

いわゆる不本意入学者がいたことも、学校の求心力を低めている要因だった。

「過去に勉強などで挫折した経験から、自己否定をする生徒が目立ちました。しかし、そうした生徒も、心の中では『このままではいけない』という焦燥感を抱いています。そこで、生徒に『君たちはこのまま一生さばるつもりなのか。どこかで変わらなければいけない』



青森県立むつ工業高校
木村浩行 きむら・ひろゆき
教職歴25年。同校に赴任して2年目。教務主任。「生徒に学ぶ楽しさを知ってもらい、可能性を伸ばす」



青森県立むつ工業高校
田村博文 たむら・ひろふみ
教職歴18年。同校に赴任して5年目。電子機械科主任。「個々の生徒の性格、能力に沿った社会人の育成に努める」



青森県立むつ工業高校
畑中次夫 はたなか・つぐお
教職歴33年。同校に赴任して11年目。設備・エネルギー科主任。「生徒を成長させ、成長する姿を見て喜びを感じる教師でありたい」



青森県立むつ工業高校
渡辺 充 わたなべ・みつる
教職歴10年。同校に赴任して6年目。基礎学力向上委員会委員長。「教育に信念と謙虚さを持ち、生徒と共に成長できる教師でありたい」

ない。それなら今変わろう。高校で頑張ろう」

と、繰り返し呼び掛けました」（畑中先生）

生徒が進むべき方向性を具体化できるように、進路や将来についても語り掛けた。例えば、高校卒業後は、仕事をして生計を立てなくてはならないこと、なりたい自分になるためには努力が必要なこと、憧れの企業に就職した先輩が頑張っていた様子などを、毎日、帰りのホームルームで話す。更に、自分の将来についての作文を書かせ、正面から自己に向き合わせた。それには、自分の将来に目を向けさせ、前向きな気持ちで芽生えさせる狙いがあった。

また、1時間目から落ち着いて授業に取り組めるよう、始業前に百ます計算を実施。少しでも解けるタイムを早くすることに喜びを感じ、本気で取り組む生徒が増えるにつれて、学習に前向きになれなかった生徒も、真面目に取り組むようになった。

大きな手応えを感じたのは、3年生5月のクラス対抗漢字コンクールだった。1年生の頃から常に最下位だったクラスが、突然、校内1位に輝いたのだ。以前から学級の半分の生徒は真面目に取り組んでいたが、他の半分の生徒が足を引っ張っている状態だった。しかし、生徒に漢字の大切さや学習の意味を十分に話した上で、コンクールに向けた学習をさせたことで、消極的だった生徒がやる気になり、目標を持って頑張るようになった。

そのような指導を通して、生徒がそれぞれの進路を目指して奮闘する姿が見られるようになった。卒業式には、多くの生徒が晴れやかな表情をしていたという。志望通りの進路に進む生徒も、そうでなかった生徒も、力を尽くして頑張ったという実感があったからだ。

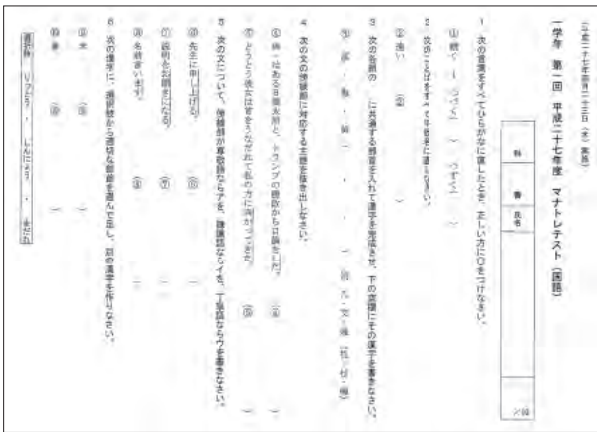
その後も、生徒との信頼関係を土台とする丁寧な指導を徹底し、生徒の「荒れ」の状態は急速に収まっていった。入学時に服装や授業態度などは厳しく指導しているが、上級生が良いモデルとなっているため、以前と比べて教師の負担は軽減している。

全学科に学び直しを導入し 課題だった基礎学力不足を克服

生徒の学びに向かう姿勢が整ってきたことから、10年度には基礎学力の定着と強化に向け、学び直しに着手。国英の担当教師で「基礎学力向上委員会」を組織し、全学年で朝学習の時間に、ベネッセの「マナトレ」（*1）を始めた。同委員長の渡辺充先生は次のように説明する。

「生徒の多くは、中学校までの学習内容が定着しておらず、授業でつまづく生徒や、採用試験の面接は合格点でも、筆記試験で合格点に届かないという生徒もいました。基礎学力の定着は本校の大きな課題でした」
朝学習の時間に1日1ページ、決められた教

*1 ベネッセの教材の1つ。学習力を身に付ける、小・中学校範囲の学び直し専用のプリント教材。



「マナトレコンクール」はクラス対抗のため、競争心を持って取り組む生徒が多く、平均点は高い水準で推移している。*学校資料をそのまま掲載

科に取り組ませ、やりっ放しにならないよう、学年単位で単元ごとのオリジナルのテストを作成し、年12回のクラス対抗「マナトレコンクール」を実施している(図)。このテストで合格点に達しなかった生徒は、放課後に補習を受ける。学び直しが定着するにつれて学力は着実に高まり、生徒の学びへの意識も変化している。

ベネッセの「基礎力診断テスト」(*2)も、生徒の学力や意識の向上に活用。学級ごとに分析し、課題の洗い出しと対策、生徒個々のデータを踏まえた個別指導や補習を行う。同校で行う模試は基礎力診断テストのみで、GTZ(*3)は生徒が自身の実力を客観的に把握する貴重な材料となる。また、定期考査は科によって

内容が異なるため、基礎力診断テストの結果を各科の学力の推移を比較する指標としている。就職志望者にも、基礎力診断テストの結果に基づいた指導を重視している。以前は、伝統校の強みもあり、就職面での苦労はなかったが、近年は不況などの影響から苦戦するケースが増え、生徒の学力向上が不可欠となった。そこで、卒業生の就職先と高校時代の評定平均やGTZをリスト化。それを生徒に見せながら、「頑張れば希望する企業に入れるかもしれない」と声掛けていく。具体的な数値を示すことで、生徒が目標を立てやすくなったという。

誰もが無理だと感じていた 国公立大合格への挑戦

「普段から授業内容などについての質問を受けることが増えました。学び直しを行うことで、自分のつまずきに気づき、克服しようという意識が高まったのだと思います。マナトレコンクールでは、全員が満点を取るクラスまで出るようになり、学校全体で競い合うようになり取り組んでいます。更に、就職の筆記試験の結果が原因で不採用になる生徒も減り、基礎学力の定着につながっていると実感しています」(渡辺先生)

同校では、慣例的に成績上位者は一部上場企業に就職しており、進学指導には相対的に注力していなかった。そこで、10年度には、当時の石田一成校長が、生徒の可能性を最大限に伸ばすことを目指し、「国公立大合格」を目標に掲げた。教師の誰もが「無理だ」と感じていた中で、石田校長が自ら先頭に立ち、大学進学の意義や国公立大の魅力を生徒に伝えていった。そして、学力が高く、進学意欲もあった3人が受験を決定した。教師が一丸となって指導した結果、3人も推薦入試により、国公立大に合格した。続く11年度も、2人が国公立大に合格。そうした実績が積み重なるにつれ、教師の意識は「無理に決まっている」から「挑戦すれば出来る」へと変化していった。教務主任の木村浩行先生はこう語る。

「教師は生徒に対して先入観を持って指導していたと反省しました。生徒自身も高校入学以前の成功体験の乏しさから、自分が大学に合格できるとは思っていませんでした。しかし、低学年次から目標を持たせ、3年間しっかり指導していくことで、生徒の可能性を大きく広げられると考えるようになりました」

入学時に国公立大を目指す生徒はほとんどいなかったため、教師が生徒に大学進学の意義を説いていたが、ほぼ毎年合格者が出るようになって、次第に生徒から国公立大への進学志望を口にするようになった。それに伴い、校内の指導体制

*2 GTZ(学習到達ゾーン)という指標で生徒一人ひとりの基礎学力の定着度と学習力、コミュニケーション特性(自我同一性)を測る。ベネッセの生活・学習指導用テスト。
*3 ベネッセのテストにおける共通の評価指標。「S1」～「D3」までの15段階があり、基礎力診断テストでは、そのうち「A2」～「D3」で評価される。

の強化に努めており、現在は進学志望者に対して、各教科の教師が分担して小論文や面接、プレゼンテーション、志望動機作成などの指導を行っている。

電子機械科のある生徒は、部活動でロボット製作に没頭し、「青森県高等学校ロボット競技大会」で優勝した。全国大会では上位に進めなかったが、その悔しさから「大学でロボットについて学びたい」という思いが強まり、当初の就職志望から大学志望に変更。本人の熱意と教師の指導が実り、弘前大に合格した。電子機械科主任の田村博文先生は次のように語る。

「学力的には国公立大合格は厳しい状況でしたが、教師たちが全力で生徒をサポートし、励まし続けました。面接では自作のロボットを持参してアピールするなど、必死に熱意を伝えたことが良い結果をもたらしたと思います」

15年度入試では10人が国公立大を受験し、過去最高の6人が合格した。そうした成績上位層の進学意欲の高まりから刺激を受け、中・下位層の生徒もそれぞれの目標に向けて努力する姿が見られるようになっていく。

「目標とする資格を取得しても満足せずに、更に上位の資格を目指す生徒が見られるようになりまし。学級内で教え合う姿もよく見られ、みんなで学びに向かう雰囲気が出てきています」(木村先生)

かつてのイメージを拭き去り 地域から信頼される高校へ

生徒の姿や校内の雰囲気が大きく変わったことで、地域住民からの評価も一変した。

以前は、地域から荒れている高校と思われることが、今では生徒の礼儀正しさや進学実績、就職率の高さなどが評価され、『生徒をしつかりと育てている学校』と評価されるようになった。同校の入学者は、周囲から『良い高校に入ったね』と言われることが多くなるなど、地域から信頼される高校となった。

また、生徒が母校の中学校を訪問し、中学校の教師から高校への要望を書いてもらっている

が、そこには「生徒がしっかりと育っていてあげたい」「以前のイメージとは違って驚いた」といった、同校の教育活動を高く評価する声が多く寄せられている。

「10年間を振り返ると、本当に良い学校に変化したと思います。しかし、ゴールにたどり着いたわけではなく、地道な努力が実って上昇気流に乗り始め、ようやく進学指導の入り口に立ったという認識です。今後は、指導を組織的に進められるよう体制を整えることが課題です。主体的に学ぶ生徒の育成に努め、進学・就職の両面で、より多くの生徒の志望を実現できるよう、高みを目指していきたいと思えます」(畑中先生)

情熱 若手教師が語る、指導変革への

教師が熱意を持てば 生徒は必ず応えてくれる

基礎学力向上委員会委員長 渡辺 充

基礎学力が定着していないと、進学でも就職でも志望を実現することが難しくなります。基礎学力向上委員会の委員長として、「マナトレ」や「基礎力診断テスト」などを活用し、いかに生徒の基礎学力を高めるかを考え続けてきました。結果として、生徒の学力や学習意欲が徐々に向上し、毎年のように国公立大合格者が出る高校になったことに大きな喜びを感じています。

本校の生徒にとって進学や就職、また資格取得は大きな目標ではありますが、それが最終的な到達点ではありません。本校では、工業高校として、一流の技術者を育てるための指導を大切にしていきたいと思っています。優れた技術者となるためには、自分の専門とは異なる分野への興味や幅広い視野を持ったり、努力を続けたりすることが素養として欠かせません。そこで、担当教科の数学の授業でも、生徒に自分が目指す目標とは一見関係がないように思えても、しっかり学ぶことが技術者としての成長につながるということを、何度も繰り返し話しています。

これまでの実践を通し、教師の熱意には生徒は必ず応えてくれることを実感しました。「渡辺先生がいるから頑張れる」と、最後まで諦めずに学習した生徒もいます。これからも生徒とのコミュニケーションを大切にし、生徒が自ら育っていく姿を感じていきたいと思えます。



◎勤労青年たちが教師を招いて開校した夜間中学講習会が前身。校訓は「好学・自治・協力・質実・奉仕」。2004年に現在地に移転、07年に中学校を併設した。15年度、新潟県魅力ある私立高等学校づくり支援事業「国際人材の育成」の指定を受ける。

設立	1921(大正10)年
形態	全日制／普通科／共学
生徒数	1学年約420人
2015年度入試合格実績(現浪計)	国公立大は、北海道大、東北大、筑波大、東京大、東京工業大、新潟大、名古屋大、京都大、新潟県立大などに165人が合格。私立大は、慶應義塾大、東京理科大、明治大、早稲田大、同志社大、立命館大、関西学院大などに延べ650人が合格。
住所	〒950-0116 新潟県新潟市江南区北山1037
電話	025-257-2131
Web Site	http://www.niigata-meikun.ed.jp/

新潟県・私立
新潟明訓中学・高校

進学実績向上

基礎・基本の定着と 上位層への意識喚起で 全生徒の力を伸ばす

変革のステップ

<p>背景</p> <p>◎自由な校風を重んじて、学習面も生徒の自主性に任せていた。その結果、成績上位層の生徒を伸ばし切れなかった</p> <p>STEP 1</p>	<p>実践</p> <p>◎宿題と連動した朝テスト、家庭学習時間調査で、家庭学習習慣と基礎の定着を図る。グローバル教育などにより、進路意識を喚起</p> <p>STEP 2</p>	<p>成果</p> <p>◎東京大・京都大を始めとする難関国公立大の志望者・合格者が増加。生徒が更に上の目標を目指すように</p> <p>STEP 3</p>
--	---	--

**生徒の学力・気質の変化に応じ
指導の転換を決意**

新潟市内にある私立新潟明訓中学・高校は、ここ十数年で急速に進学実績を伸ばしている。2004年に現在地に移転後、国公立大合格者はそれまでの70人前後から160人を超えるまでになり、医学部医学科合格者も輩出。中高一貫クラス1期生卒業時の13年には、東京大3人、京都大1人の現役合格者が出た。その背景には「生徒の力を伸ばし切れなかったのではないか」という教師の思いに端を発した学校改革があった。進路指導部長の坂田義史先生はこう話す。

「生徒のほぼ全員が大学進学を希望し、うち8〜9割が国公立大志望者です。しかし、改革以前の国公立大合格者数は、1学年の2割程でした。当時の本校は自由な校風が特徴で、生徒の学校への満足度が高い反面、学習面については生徒の自主性に任せ過ぎる傾向がありました。そのため、生徒の力を伸ばし切れなかったのです」

移転前は伝統ある私立高校として、県内でも成績上位層の生徒が入学してきた。ところが、郊外に移転後は、市の中心部へ通学を希望する層が受験を回避するようになり、08年に公立高校が全県一区となったからは、更に入学者の学力層が変化していった。生徒の気質も変わったと、進路指導副部長の寺澤琢磨先生は指摘する。

「以前の生徒には、難問にも自ら食らい付く力強さがありました。08年以降は、素直で言うことをよく聞く一方、受け身の姿勢が目立つようになりました。上を目指そうとする欲がなく、自ら学習しようとしないうえに、基礎・基本がなかなか身に付かず、難問を解く楽しさもあまり感じていないようでした」
 そのような状況を受けて、潜在能力のある生徒の主体性を引き出し、上を目指す気概を持たせられるよう、教師が手を掛ける指導への転換が図られた。



新潟明訓中学・高校校長
大滝祐幸 おおたき・ひろゆき
 教職歴42年。同校に赴任して4年目。「生徒は学ぶ目的と目標を求めている。倫理性の高い目的と目標を手にした生徒は自分の力で歩き始める」



新潟明訓中学・高校
坂田義史 さかた・よしふみ
 教職歴21年。同校に赴任して16年目。進路指導部長。「礼儀とけじめをしっかりと。ありがたう。ごめんなさいを素直に言える人に育てたい」



新潟明訓中学・高校
寺澤琢磨 てらさわ・たくま
 教職歴15年。同校に赴任して15年目。進路指導副部長。「ユーモアを忘れずに、生徒の笑顔と頑張りを引き出したい」



新潟明訓中学・高校
柴岡友洋 しばおか・ともひろ
 教職歴4年。同校に赴任して5年目。総務副部長。グローバル教育係長。「生徒の成長につながるよう、私自身も常に学び続ける」

朝テストを宿題と連動させ 家庭学習習慣と基礎の定着を促す

最も大きな課題は、家庭学習時間の不足だった。当時、生徒の1日の平均家庭学習時間は、1年生で1時間弱、3年生でも1.5時間程度であり、学習量の不足が入試結果に影響していることがうかがえた。

そこで実施したのが、1・2年生対象の朝テストだ。これは、毎朝SHR前の15分間に行う小テストで、国数英は週に1回ずつ、世界史・日本史・地理・物理・化学・生物は曜日によって選択させるという形式だ。問題は、前週の授業で学んだ内容を中心に出題。宿題にきちんと取り組めば得点できるテスト内容にして、生徒に家庭学習を促すことを狙いとした。得点は各教科の成績評定に加味し、得点が7割未満だった場合は、放課後の講習や課題の再提出などを義務付けた。そうした仕組みを構築し、基礎・基本の定着を図っていった。

更に、寺澤先生は担当教科の数学で、課題を提出していない生徒、朝テストで得点が7割未満だった生徒を対象に、週1回、放課後に質問会を開いている。

「効果的な学習方法の1つは、教師に質問し、出来るだけ早くつまづきを解決することです。教師に気軽に質問できる場を設け、日頃、課題を解けずに困っている生徒にこそ、

前向きに学習に取り組めるようになってほしいと考えています」(寺澤先生)

家庭学習時間などの客観データを 面談に生かし、きめ細かく指導

家庭学習時間調査も始めた。毎朝、SHRで前日に家で学習した教科とその学習時間を書かせ、生徒一人ひとりについて月ごとに集計。家庭学習時間と成績の相関を分析し、担任が面談などで学習アドバイスをする際に活用する。

「担任が最も注意しているのは、学習しているにもかかわらず、成果が表れていない生徒です。課題の提出状況や家庭学習時間などを総合的に見て、学習方法に問題がないかを探ります。つまづきが見つかれば、該当教科の担当教師に相談に行くように促し、学習方法の改善に結び付けています」(坂田先生)

面談週間は年3回あるが、大半の担任は必要に応じて、昼休みや放課後に随時面談を行っている。そうした学年団のフットワークの軽さも同校の強みだ。生徒からの学校評価アンケートの結果を見ると、「先生は私たちの意見をよく聞いてくれる」「先生は学習面で自分が努力したことを認めてくれる」などの項目がいずれも90%以上と高い割合を示している。教師が積極的に生徒にかかわっている表れだ。教師と生徒との距離の近さが信頼関係を生み、生徒が教師

の言葉にしっかり耳を傾ける姿勢が定着してきていることが、好循環を生んでいる。

上位層の生徒への指導を手厚くし 難関大を目指す生徒を育てる

国立大合格者が毎年3桁を超えるようになって、次の課題に挙がったのは難関国立大への合格だ。当時、旧帝大への進学実績は東北大のみで、東京大・京都大の志望者はいなかった。

「かつては、東京大や京都大の合格実績がなかったため、合格を狙える力がある生徒でも、東京大や京都大を現実的な目標として据えることが出来ていませんでした。高い目標や志を育み、更に上を目指す意欲を喚起する必要がありました」（坂田先生）

成績上位層の生徒を中学校段階で確保するために、07年度に中学校を併設した。中学校低学年時から難関大を目標にする意義を伝えることで、より高みを目指す雰囲気在校内に醸成していった。

難関大を目指す生徒の集団づくりも進めた。寺澤先生が担当した学年では、高校2年生から放課後に数学の特別講習「錬成会」を実施し、授業ではなかなか扱えない難易度の高い問題や、授業では触れる機会の少ない分野の問題を中心に演習に取り組ませた。これは、中入生・高入生のクラス別で実施。各40人程が参加した。

「朝テストや課題で生徒全体へのサポートは充実している反面、上位層の生徒への指導が手薄だったのが当時の課題でした。もちろん、基礎・基本の定着が先決ですが、それが出来ている生徒には、難問が解ける喜びや問題を解く楽しさを経験させ、意欲が高まることを期待しました」（寺澤先生）

海外研修で 諸外国の留学生と英語で討論

現在、同校が力を入れているグローバル教育にも、生徒が志を持った進路選択が出来るようにする狙いが込められている。12年度から同校のグローバル教育改革を主導している大滝祐幸校長は次のように語る。

「本校の方針は、大学進学後も力を発揮できる生徒を育てることです。世界に目を向けて自分の将来を思い描く過程で、自分がなぜ学ぶのか、なぜ大学に行くのかを考える。そのようにして内発的な学習意欲を喚起することで、更に上を目指すようになり、結果的に進学実績にもつながると考えています」

高校1年生の春休みには、アメリカ研修を実施。11日間、ボストンとニューヨークで語学研修や大学訪問、大学生との交流などを行う。定員は40人で、希望者の中から成績、英語力、志望動機などを総合して選抜する。

研修でのメインプログラムは、留学生対象の英語学校で行う語学研修だ。各自の英語力に合わせたクラスで、ヨーロッパやアジア、中東など、英語が母国語ではない留学生と一緒に授業を受ける。下のレベルのクラスは日常会話から学び、上のレベルのクラスでは英語で討論も行う。

生徒がカルチャーショックを受けるのは、諸外国の留学生のコミュニケーション能力の高さだ。総務副部長の柴岡友洋先生はこう言う。

「他国の留学生は、英語力がそれほど高くないにもかかわらず、本校の生徒は、筆記試験で高得点を取れても、彼らの積極性に圧倒されてしまい、なかなか議論に付いていきませんでした。それでも、最終日に近付くにつれ、会話のリズムをつかんで果敢に討論に加わろうとする姿が見られ、うれしく感じました。11日間で、彼らの表情や考え方がどんどん変わっていくのが分かりました」

「いながら留学」で なぜ、学ぶのかを考えさせる

学校にいながら海外研修と同様の経験が出来るように行おうのが、「エンパワーメントプログラム」だ。7月下旬に中学3年生は3日間、高校1・2年生は5日間、アメリカ・カリフォルニア大の学生や東京大の外国人留学生を招き、交流活動をする。中学3年生は全員、高校1・

2015年度「エンパワーメントプログラム」(高校生用)

	9:00-9:50	10:00-10:50	11:00-11:50	13:00-13:50	14:00-14:50
1日目	オープニングセレモニー	自己紹介	英語コミュニケーション力を高める活動(1)	スモールグループ・ディスカッション(1) テーマ: Positive thinking	
2日目	スモールグループ・ディスカッション(2) テーマ: My identity		英語コミュニケーション力を高める活動(2)	プロジェクト(1) 学校環境により優しくなろう	
3日目	スモールグループ・ディスカッション(3) テーマ: Leadership		英語コミュニケーション力を高める活動(3)	プロジェクト(2) 高齢化社会について考える	
4日目	スモールグループ・ディスカッション(4) テーマ: Globalization	留学生のモデル・プレゼンテーション(夢とその実現のために努力していること)		プロジェクト(3) 世界で起こっている問題の解決策を考えて、具体的に行動を起こしてみよう	
5日目	スモールグループ・ディスカッション(5) テーマ: 自分の将来の目標	プレゼンテーションの準備		プレゼンテーション、クロージングセレモニー	

*学校資料を基に編集部で作成

2年生は選抜制で定員は130人。15年度は外国人留学生26人が同校を訪れ、同校の生徒5、6人のグループに外国人留学生が1人ずつ入り、ディスカッションやプレゼンテーションを行った(図)。

ディスカッションでは、「アイデンティティ」「リーダーシップ」などをテーマに自由に話し合い、プレゼンテーションでは、「学校環境」「高齢化社会」などのテーマについて課題や解決策を考え、グループごとにポスターや寸劇などの方法で成果を発表した。議論の進行は外国

若手教師が語る、指導変革への情熱

教育はチームプレイ
周りの先生との協力関係を築く

総務副部長 柴岡友洋

大学卒業後、外食チェーンの正社員として4年間働きました。店長として後輩社員やアルバイトに仕事を教えていく中で、人を育てる楽しさや素晴らしさを知り、人の成長を支える仕事を一生の仕事にしたいと考えようになりました。そして、社会人枠で大学に入り直し、高校の公民科、中学校の社会科、小学校の教員免許を取得して、念願の教師になりました。

本校に赴任してからは、試行錯誤の連続です。最も強く感じている課題は、志望校をなかなか決められない生徒が多いこと。生徒に直接話を聞かなければ分かりませんから、始業前や昼休み、放課後などに面談を繰り返して行っています。また、学習方法が分からないという生徒も少なくありません。そのような生徒への指導で私が心掛けているのは、生徒が各教科でどのような指導を受けているのかを把握することです。先生方がそれぞれの授業でどのような点を大事にしているのか、国公立大の個別学力試験対策の補習を生徒はどのように受けているのかなど、他教科の先生方と密にコミュニケーションを取って情報交換に努めています。

4年間勤務して感じるの、教育はチームプレイだということです。周りの先生方と協力関係を築き、生徒がより成長できる環境を整えていくことが重要だと感じています。今後、学年の枠を超えて、実践例を共有したり、話し合う場をつくったりして、先輩方から更に多くのことを学んでいきたいと思っています。

人留学生が行うが、大学教員など3人のファシリテーターが議論を整理し、進行を助ける。生徒同士は日本語で話してもよいが、外国人留学生やファシリテーターとは全て英語で話す。

「外国人留学生は、大学で何を学びたいのか、学んだことを社会でどう生かしていきたいのかを真剣に考えています。そうした留学生の前向きな姿勢や考え方に触れることで、生徒は自分が将来どうしていきたいのかを考えるきっかけになっています。また、英語力の不足を痛感し、英語をしっかりと学ばなければと再認識する生徒もいます。受験勉強や大学の先を見据え、真の学ぶ姿勢を身に付ける、とても効果的な取り組みです」(柴岡先生)

15年度入試では高入生が初めて東京大に合格した。それも「なぜ、学ぶのか」にこだわり続けた結果だと、教師は感じている。15年度の3年生は、1学期時点で10人以上が東京大志望を表明した。それも今までにはなかったことだ。

「『東京大に行きたい』という言葉が、生徒の口から自然と出るようになったのが何よりの変化です。この流れを大切に、今後は毎年2桁の東京大合格者を出し続けると共に、あらゆる学力層の生徒の志望実現を後押しすることが、本校の更なる躍進につながると考えています。我々教師がしっかりと目線を合わせ、指導力向上を図っていくことが重要になっていくと思います」(坂田先生)

今回のテーマに関連する過去の記事はベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでご覧いただけます。

2013年10月号指導変革の軌跡「石川県・私立北陸学院中学・高校」など

▶▶▶ <http://berd.benesse.jp> → HOME > 教育情報 > 高校向け

3年生・2学期後半

面接対策指導ツール

自校の指導ツールを他校の教師と共に検討し、各校の生徒特性に合った形へ改善を図る本コーナー。今回は、推薦・AO入試受験者を対象にした「面接対策指導ツール」について検討する。

検討会メンバー



愛知県立
東海商業高校
新美廣勝
にいみ・ひろかつ

教職歴23年。同校に赴任して1年目。3学年担任。生徒会部、商業科。「自分への自信と、母校への誇りを持った、社会に愛される生徒を育てたい」



群馬県立
太田高校
新井高広
あらい・たかひろ

教職歴24年。同校に赴任して7年目。3学年担任。進路指導部、数学科。「正しい道を選ぶのではなく、選んだ道を正しいものに出来る生徒を育てたい」



宮崎県立
延岡星雲高校
柳井健二
やない・けんじ

教職歴23年。同校に赴任して7年目。主幹教諭。渉外広報部長。英語科。「伯楽にはなれないが、スポットライト係となって、個々の良さを照らしたい」

愛知県立東海商業高校・新美廣勝先生
推薦・AO入試受験者用「面接指導個票」と「指導の記録」

ビフォー

面接指導個票は、生徒が事前に進路指導室の資料などを使って、面接方式や過去の主な質問を調べ、記入しておくもの。面接官役の教師はここに書かれた内容を参考に模擬面接を実施する。

面接指導個票

組 番 氏名 _____

① 試験日
月 日 ()

② 試験の種類 (○で囲みなさい)
a. 指定校(グループ)推薦 b. 公募推薦 c. AO・自己推薦 d. その他

③ 受験校

学校名	学部名	学科名	専攻(コース)名

④ 面接方式
面接時間 分程度 【a. 個人面接 b. 集団面接】

⑤ 過去の質問

指導の記録 ※最初と最後は担任に面接してもらうこと

日時	指導者	評価・コメント
第1回	担任	マナー() 意欲() 目的意識() 論理性() 表現力() 知識・関心() 独自性()
第2回		マナー() 意欲() 目的意識() 論理性() 表現力() 知識・関心() 独自性()
第3回		マナー() 意欲() 目的意識() 論理性() 表現力() 知識・関心() 独自性()
第4回		マナー() 意欲() 目的意識() 論理性() 表現力() 知識・関心() 独自性()
第5回		マナー() 意欲() 目的意識() 論理性() 表現力() 知識・関心() 独自性()
第6回		マナー() 意欲() 目的意識() 論理性() 表現力() 知識・関心() 独自性()
第7回		マナー() 意欲() 目的意識() 論理性() 表現力() 知識・関心() 独自性()
第8回		マナー() 意欲() 目的意識() 論理性() 表現力() 知識・関心() 独自性()
第9回		マナー() 意欲() 目的意識() 論理性() 表現力() 知識・関心() 独自性()
最後	担任	マナー() 意欲() 目的意識() 論理性() 表現力() 知識・関心() 独自性()

指導後、評価できるポイントに○、改善の余地があるところに△を記入した上で、コメントの記入をお願いします

指導の記録は、面接官を務めた教師が、マナー、意欲、表現力などの項目について○・△の2段階で評価し、コメントを記入する。担任は、最初と最後の面接を担当する。それ以外の回で、面接官をどの教師に頼むかは、生徒が自由に決めることができる。

狙いと機能

志望を深め、進路を語り合う
雰囲気をつくりだす

愛知県立東海商業高校では、生徒の4〜5割程度が進学するが、そのほぼ全員が推薦・AO入試を利用する。面接に関連するツールは上の2点の他に、生徒が自分の高校生活や性格について整理する「面接指導準備シート」がある。

しかし、模擬面接で面接官役の教師が手にし、指導に使うのは上の2つである。これらの資料は、普段は生徒が保管し、模擬面接の度に生徒が持参することになる。

ビフォー アフター

検討

「聞かれたことに答える」から
「自分のアピールポイントを伝える」へ



新美 本校では、模擬面接を10回程度受ける生徒もいます。確かに、

面接の前には練習は必要ですが、その回数が増えるほど、**今回の練習では何がテーマなのか、教師と生徒で確認していくことが大切です。**



柳井 生徒の中には、面接官の質問に流ちょうに答えることを重視し過ぎている者がいます。実は、私自身も若い頃、「面接は、生徒に志望理由を暗記させて臨めばよい」と考えていた時期がありました。しかし、そんな対策では推薦・AO入試の面接試験には通用しません。**志望先に対する生徒の熱意を高め、自分の言葉で思いを語れるようにする指導が求められます。**

新美 志望先への思いよりも、志望先に関する情報・知識を披露することが大切だと思いついてる生徒もいます。相手のことを調べることは面接に臨む上での大前提ですが、そ

れだけで受験生として魅力的に見えるかといえば疑問です。



新井 特に学問分野なかと、面接官から質

問攻めに遭ってしまいかねません。そうすると、生徒は途中から「これは圧迫面接ではないか」と不安になり、志望先への思いを十分に伝えられなくなってしまう恐れもあります。面接では、**高校での経験を基に、大学生活への熱意を語ることを大切にさせたいですね。**

柳井 そのためには、修学旅行の班長や行事リーダーなど見落としがちな日常の体験から、生徒の魅力を一緒に掘り起こすような面接指導が必要で**す。生徒が「自分のことをアピールしたい」というポイントを個票に書き、それを意識した上で、模擬面接に臨んでもよいでしょう。**

新井 生徒自身が考えるアピールポイントが事前に分かれば、その生徒のことをよく知らない教師が模擬面

接を担当しても、生徒の志望を掘り下げ、志望への思いを確かめる質問をするためのヒントに出来ますね。

新美 一方で、既に関係性の出来た、自分が心を許せる教師にしか面接官役を頼まない生徒もいます。本当は自分のことをよく知らない教師、もつといえ、相性が合わないようなタイプの教師に面接官役を頼み、**相手に気持ちを伝えることの難しさに気付かせたいところ**です。

新井 複数の教師が面接官役を務めるので、生徒、教師双方がその都度、課題を確認した上で模擬面接に臨みたいですね。**面接が終わる度に生徒が感想や決意を書き込み、教師の評価とセットになって保管できるツール**を考えてみませんか。

課題と解決策

- 1 志望先への熱意を高め、思いを語る言葉を豊かにする面接対策の目的を生徒と教師で共有する
- 2 自身のアピールポイントを生徒自身が把握した上で、面接指導に臨ませる
- 3 たくさんの教師が面接官役を務めるからこそ、各面接で明らかになった課題を次の面接に引き継げるような配慮が必要

学校プロフィール

愛知県立東海商業高校

◎全日制／総合ビジネス科・情報科（1年次は面科共通のカリキュラム。2年次より分かれる）／共学／1学年約320人
◎2015年度進路実績（現役のみ）／4年制大進学30人、短大進学11人、専門学校進学65人、就職169人。

群馬県立太田高校

◎全日制／普通科／男子校／1学年約280人

◎2015年度入試合格実績（現浪計）／国立立大は、東京大、東北大、群馬大などに166人が合格。私立大は、慶應義塾大、東京理科大、早稲田大などに延べ669人が合格。

宮崎県立延岡星雲高校

◎全日制／普通科・フロンティア科／共学／1学年約200人
◎2015年度入試合格実績（現浪計）／国立立大は、九州大、九州工大、熊本大などに33人が合格。私立大は、法政大、関関大、福岡大などに延べ147人が合格。

検討会で明らかになった課題を踏まえ「面接指導個票」「指導の記録」を改良！次ページで紹介します。



アフター

面接指導個票には、「アドミッション・ポリシー」「君が面接で1番伝えたいこと」「アドミッション・ポリシーと君の目標や高校生活で力を入れたことを比べてみて、一致しているところ」の3項目を加えた。面接官に聞かれたことに答えられるようになるだけでなく、アドミッション・ポリシーを踏まえ、志望先への自分の思いをアピールできる力を養うことを目指す。

指導の記録には「授業を受けたことがない先生に積極的に面接をお願いしよう」と明記。その上で、教師用のコメント欄には、「良かったところ」「改善できるところ」の2項目を設けた。これにより、指導に連続性を持たせたいと考えた。また、改善点を自覚させ1回ごとの面接に意義が見込めるよう、生徒に「次回面接への決意」を書かせることにした。

面接指導個票

組 番 氏名 _____

① 試験日 _____
月 日 ()

② 試験の種類 (○で囲みなさい)
a. 指定校推薦 b. 公募推薦
c. AO・自己推薦 d. その他 ()

③ 受験校

学校名	学部名	学科名	専攻(コース)名

④ 面接方式

面接時間	分程度
[a. 個人面接 b. 集団面接]	

⑤ 過去の質問

⑥ アドミッション・ポリシー

⑦ 君が面接で1番伝えたいこと

⑧ アドミッション・ポリシーと君の目標や高校生活で力を入れたことを比べてみて、一致しているところ

特に、⑦⑧の項目について
面接官は根掘り葉振り聞きます

指導の記録

※最初と最後は担任に面接してもらうこと
※授業を受けたことがない先生に積極的に面接をお願いしよう

日時	指導者	評価 (○・△)	面接官コメント	次回面接への決意
第1回	担任	マナー () 表現力 ()	〈良かったところ〉	
		意欲 () 知識・関心 ()	〈改善できるところ〉	
第2回		マナー () 表現力 ()	〈良かったところ〉	
		意欲 () 知識・関心 ()	〈改善できるところ〉	
第3回		マナー () 表現力 ()	〈良かったところ〉	
		意欲 () 知識・関心 ()	〈改善できるところ〉	
第4回		マナー () 表現力 ()	〈良かったところ〉	
		意欲 () 知識・関心 ()	〈改善できるところ〉	
第5回		マナー () 表現力 ()	〈良かったところ〉	
		意欲 () 知識・関心 ()	〈改善できるところ〉	

指導後、評価できるポイントに○、改善の余地があるところに△を記入した上で、コメントの記入をお願いします

個票には「君が面接で1番伝えたいこと」「アドミッション・ポリシーと君の目標や高校生活で力を入れたことを比べてみて、一致しているところ」が面接で特に問われることを明記。これは、面接官役の教師に「アドミッション・ポリシーを念頭に、志望先への自分の思いをアピールできているか」を重視した指導を促し、指導の目線をそろえるためのメッセージでもある。

改訂後の狙いと機能
面接指導個票には、推薦・AO入試に関する客観情報だけでなく、入試に臨む生徒自身の思いを書き込み、面接で志望先に1番伝えたいこと(自分のこだわりやアピールポイントなど)を意識させた上で模擬面接に取り組むように配慮した。なお、「君が面接で1番伝えたいこと」については、回答を暗記して面接に臨むことがないように、文章化はさせずに、あえてキーワードレベルでの記述にとどめることを推奨する声があった。

指導の記録については、教師のコメント欄(良かったところ・改善できるところ)と、生徒が次回の模擬面接に向けての課題を整理する欄を設けた。次の面接担当の教師は指導の記録を見て、前回の課題となった点がどう変わったかもフィードバックし、指導の連続性を高める狙いだ。



このマークのある図版は、加工可能なデータとして、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト (<http://berd.benesse.jp>) からダウンロードできます。「HOME → 教育情報 → 高校向け → 生徒指導・進路指導ツール集」でご覧ください。

活用

伝えたいことをあらかじめ整理し、
模擬面接を通して更に掘り下げる

新美 先生方との検討を経て取り入れてみた
いと考えたのが、生徒

が「君が面接で1番伝えたいこと」「アドミッション・ポリシーと君の目標や高校生活で力を入れたことを比べてみて、一致しているところ」を事前に個票に整理し、教師はそれを見ながら面接を進める方法です。



柳井 想定外の質問に対応する力を身に付けることも必要ですが、

それ以上に、**面接を利用して自分の思いを伝えようという意欲を育みたい**ですね。個票で自分の志望を掘り下げさせて、「どんな質問が来ても大丈夫。根っこは1つだ」という自信を持たせたいです。



新井 自分の志望に自信を持つと、**変化球的な質問にも、表現を工夫しながら自分の思いを伝える対応**が出来るようになります。

難易度の高い質問にも「分かりま

せん」と臆せずに言えるでしょう。

新美 「この面接で伝えたいこと」がしっかり固まっていれば、意欲的な質問に1つくらい答えられなくても「大したことない」と受け止められますよね。

柳井 「これだけは伝えたい」という思いを生徒と教師がやり取りするうちに、生徒の志望が磨かれていきます。テクニックに流されず、志望を掘り下げていくことは生徒の成長につながり、仮に推薦・AO入試が不合格だったとしても、「ここで掘り下げた自分の思いを一般入試対策の原動力にしよう」と次の指導に生かせるでしょう。

新美 指導の記録では、生徒がこれまでどんな面接指導を受け、教師の指摘に対してどう改善を図ってきたかが分かるようになっていま



活用の流れ

- 1 面接に先立って、個票に客観情報とアピールポイントなどを生徒に記入させる
- 2 生徒が面接官役を教師に依頼する場合は、関係性の薄い教師にも依頼するよう指導する
- 3 面接の度に良かったところ、改善できるところを教師が指導の記録に記入する
- 4 生徒は、次の模擬面接までに改善したいことなどを指導の記録に記入する
- 5 次の面接担当の教師は、指導の記録を参考に面接を行い、前回指摘をした点がどう変わったのかも生徒にフィードバックする

す。改訂前よりも、**指導の連続性が確保でき、面接官の違いによる指導の大きなずれによって生徒を混乱させることが防げ**そうです。

柳井 そうですね。私たちには、「この部分は改善しよう」という指導に対して、次の面接ではどう変化したか、連続性を意識して生徒を見る責任があると思います。

新井 もちろん、面接官が違うことで評価の違いが生まれることはあつて当然ですが、だからといって、私たち教師が評価の観点の違いに無自覚なまま、各自が思い通りに評価をしていては生徒が混乱

するだけですよね。

新美 前回面接した教師と異なる評価をする際、指導の記録を基に、「A先生はプラスの評価だが、私は〇〇の理由で違う評価だ」「面接官で受け止め方が違うこともある」と生徒に説明したいですね。

新井 面接官役は教師ではなく、生徒が務めることも可能です。実際、本校では模擬集団面接で、生徒同士で評価させることもありま
新美 今回の議論を学校に持ち帰って、更に検討を続けます。

半歩⁺未⁺来⁺を考⁺える教育オピニオン

OPINION

「学力」が向上する カリキュラム・マネジメントで

大谷大文学部 教授

荒瀬克己^{あらかつみ}

高大接続改革実行プランの下、高校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的な改革に向けた検討が進められている。2016年度の中央教育審議会答申に向け、次期学習指導要領について審議されているが、その鍵を握るのが「アクティブ・ラーニング」と「カリキュラム・マネジメント」だ。中央教育審議会教育課程企画特別部会委員を務める大谷大の荒瀬克己教授に、次期学習指導要領の狙いとポイントについて聞いた。

学力の3要素に基づいた 教育改革を進めていく

中央教育審議会の教育課程企画特別部会で、2022年度からの実施を目指し、次期学習指導要領の方向性について議論を進めてきました。

最初にお伝えしたいのは、現行の学習指導要領そのものに欠陥があるという前提で、見直し

をしているわけではないということです。次の学習指導要領においても、「生きる力」とそれを支える「確かな学力」について変更はありません。しかし、それが十分定着していない現状を変えていくとしているのです。

これから社会に出ていく子どもたちは、近い将来、私たちの想定を超える様々な課題に直面することになるでしょう。そこで必要となるのは、時代がどのように変わっても生き抜いてい

学習指導要領の見直しの 狙いとスケジュール

◎荒瀬克己教授が委員を務める中央教育審議会の教育課程企画特別部会は、学習指導要領の改訂や、初等中等教育における指導・評価のあり方などについて審議する、中央教育審議会初等中等教育分科会の教育課程部会に置かれた部会である。同部会では、2017年度中の告示、22年度からの年次進行による実施を見据えて、学習指導要領の改訂について審議している。

改訂の方向性には、「何を教えるか」だけではなく「どのような力を身に付けさせるか」も含まれる。その力を確実に育むため、指導内容に加えて学習方法や学習環境についても検討してきた。15年8月に「論点整理」が公表され、そこには次期学習指導要領が目指す、育成すべき資質・能力、学習活動のあり方、アクティブ・ラーニングの意義、更に、それらを実現するために必要な方策として、カリキュラム・マネジメントの重要性について言及されている。

今後は、各学校段階・教科別の検討を行い「審議まとめ」を経た上で、16年度中をめどに中央教育審議会として答申できるように検討を進めていく予定だ。



ける力であり、その力を育成する教育をより充実させること、それが学習指導要領の改訂の狙いです。

この改訂は、現行指導要領と同じく、学校教育法第30条2項で定義された学力の3要素、すなわち「基礎的・基本的な知識・技能」「それらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力」、そして「主体的に学習に取り組む態度」に基づくものです。

14年12月に取りまとめられた「新しい時代にあふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について（答申）」でも、また、それを受けて議論している高大接続システム改革会議の「中間まとめ」（15年9月）においても、「（1）十分な知識・技能、（2）それらを基盤にして答え

が1つに定まらない問題に自ら解を見いだしていく思考力・判断力・表現力等の能力、そして（3）これらの基になる主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」が、未来を生きる子どもたちに必要な能力であるとしています。

少なくとも学校関係者は、「学力」を学校教育法に基づいて認識した上で、どのような「学力」を生徒に身に付けさせるかを考え、議論し、実践していくことが必要です。現在進められている高校教育・大学教育と大学入学者選抜の一体的改革の検討も、ここが出発点です。

アクティブ・ラーニングを キャリア教育として捉える

改訂のポイントは大きく2つあります。1つがアクティブ・ラーニングの導入です。その狙いは、主体的・協働的な問題発見・解決の場面を経験することで思考力・判断力・表現力を鍛え、学びへの興味と努力し続ける意志を引き出すことにあります。

子どもたちが将来、経験したことがない課

題、答えのない問いに直面した時に必要となるのは、「何を知っているか」だけではなく、「知っている知識を使って、どのように課題にアプローチするか」という姿勢です。課題に取り組む中で、全く新しい発想や未知の方法を試していかなければならない場合もあるでしょう。

また、1人で解決できない場合は、他者から学ぶ姿勢も必要です。その過程では、意見の異なる第三者の主張に納得すれば、自分自身の考えを変えていく、ある種の勇気も求められるでしょう。そこで重要になるのは、対話的精神です。相手を尊重しつつ互いに考えをぶつけ合い、自分自身が変容することもまた潔しとする。そのような協働性や柔軟性、本当の強さ、いわば、しなやかさとしたたかさが必要になります。このような点から考えると、アクティブ・ラーニングはキャリア教育を進める上でもとても重要なものであり、授業を行う際にはそのことを忘れてはならないと思います。

多くの実践から、学びの深まりや定着において、アクティブ・ラーニングは効果的だと言われています。なぜなら、経験的に学んで考えたことは深く刻まれ、記憶に残りやすいからです。単にテストのための暗記と違い、その後も活用できる力になります。

逆に言えば、学びが深まらず長期的記憶にもつながらないアクティブ・ラーニングでは意味がない、ということになります。この点はとて

あらせ・かつみ ◎京都市立堀川高校校長、京都市教育委員会教育企画監を経て、2014年度から現職。福井大教職大学院客員教授、国立高等専門学校機構監事。05年以降、中央教育審議会初等中等教育分科会、教育課程部会、高大接続システム改革会議等の委員を歴任。著書に『奇跡と呼ばれた学校』（朝日新聞出版）等、『月刊高校教育』（学事出版）に随筆を連載。

も重要です。

例えば、ある時間に覚えた解法を別の問題に当てはめて考えるという発想は、応用力・活用力が生みだされている状態です。そうした思考は、付け焼き刃の知識では出てきません。やってみよう、使ってみようとするのは、その知識が活用できる状態で根付いているからです。

このような学びの深まりや長期にわたって活用できる記憶を生むアクティブ・ラーニングに取り組むためには、評価方法を含め、教員相互の共通理解と協働が必要です。

カリキュラム・マネジメントで生徒に学力を付ける

「学力」について語られる際、いまだに知識・理解の域を出ないことが少なくありません。学校として学力向上を目指す以上、教師一人ひとりが「学力とは何か」にこだわらなければなりません。その上で、学力の3要素を学校としてどのように理解し、教育活動を構築していくのかを考える必要があります。

そこで重要になるのが、カリキュラム・マネジメントの発想です。

教育課程企画特別部会がまとめた「論点整理」では、「教育課程とは、学校教育の目的や目標を達成するために、教育の内容を子供の心身の発達に応じ、授業時数との関連において総合的に組織した学校の教育計画であり、その編

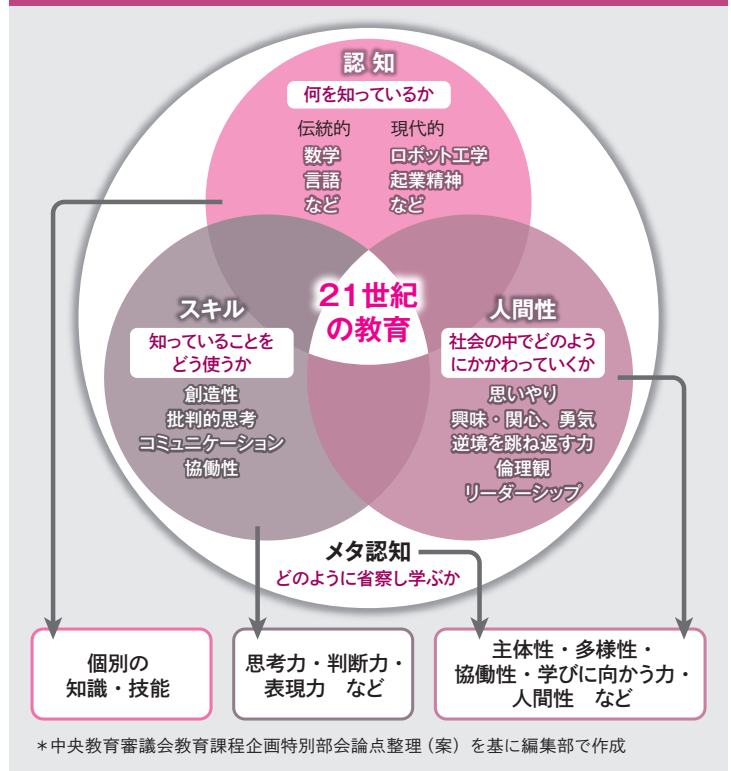
成主体は各学校である」と

し、「特に、今回の改訂が目指す理念を実現するために、教育課程全体を通じた取組を通じて、教科横断的な視点から教育活動の改善を行っていくことや、学校全体としての取組を通じて、教科等や学年を越えた組織運営の改善を行っていくことが求められており、各学校が編成する教育課程を核に、どのように教育活動や組織運営などの学校の全体的な在り方を改善していくのが重要な鍵となる」と述べています。

このようなカリキュラム・マネジメントの発想を、次期学習指導要領の総則に盛り込めなにかと議論してきました。

学習指導要領を他教科までチェックされている先生は、あまりいらつしやらないはずですが、なぜなら、これまでは、教育活動が教科という枠の中だけで行われていて、各教科で学ぶ力が1人の生徒の中でどのように結び付き、生きる力になっていくのかということへの関心が、希薄だったからです。これからは、教科の学習を通してどのような力を付けていくのかについ

カリキュラム・デザインのための概念と学力の3要素の重なり



て、教師同士がお互いに認識を重ね合うことが必要です。

各教科の学習と共に、教科横断的な視点で学習を成立させ、必要な資質・能力を育むことが求められます。そのため、各教科における学習の充実のもとより、教科間のつながりを捉えた学習を進める観点から、教科間の内容事項について、相互の関連付けや横断を図る手立て・体制を整える必要があります。

また、カリキュラム・マネジメントの発想は、教科学習にとどまるものではありません。各教

科で身に付ける力はもちろん、「総合的な学習の時間」や学校行事などのあらゆる活動について、身に付けさせたい力は何かを明確にし、身に付いた力がどのように発揮されたのかを評価しながら進めていく必要があります。

カリキュラム・マネジメントの3つの側面

カリキュラム・マネジメントは、3つの側面から捉えることが重要だとされています。「論点整理」では次のように示しています。

①各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校の教育目標を踏まえた教科横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していくこと。

②教育内容の質の向上に向けて、子供たちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立すること。

③教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせること。

これらを進め、実効あるものとするためには、教科の縦割りや学年を超えて、学校全体で取り組んでいくことが必要であり、学校の組織や運営についても見直しを図らなければなりません。これには、管理職や教務担当者だけでなく、

全ての教職員が取り組まなければなりません。

学校経営の観点から必要な条件整備を進める

カリキュラム・マネジメントを機能させる上で重要なポイントは、広い意味での学校の条件整備です。先ほど紹介した3つの側面の③に当たります。

各校の教育目標を実現するために、教職員の人事、人数や年齢構成、男女比、また、施設・設備や教材整備など、各校の学校経営方針に基づいて、必要な条件を学校と教育委員会が協議しています。しかし、その内容をもっと充実させられないかという思いを持つ方は、多いはずです。

学校は生徒に身に付けさせたい力に応じて教育活動を立案し、その実現のために必要な人員、施設・設備などの条件を提示して必要な予算を申請し、教育委員会はその内容を見て予算配分を決めます。私もまた、そのように、各校の創意工夫を尊重し、支援する仕組みづくりを進めていきたいと考えてきました。

例えば、少し踏み込んで校長の人事について考えてみると、種々の事情や理由があると思いますが、公立高校の校長は2、3年で異動するのが一般的です。長ければよいというものではありませんが、1年目は状況を見ることが中心になり、それに基づいて2年目に向けて方針を

出しても、その取り組みが本当に実るのは異動後になってしまいます。場合によっては、あいまになって消滅してしまう。そうなったら、本人にとっても学校にとっても、もちろん生徒にとっても残念なことです。

教育委員会や個人の事情を横に置いて申し上げれば、場合によっては、改革の行く末を見届けるまで異動させないことも必要なかもしれません。校長自身が「厳しい学校だが、骨を埋めたい」と申し出てもよいでしょうし、教育委員会が「とどまってもよいでしょうか」と打診してもよいと思うのです。単純な言い方の方ですが、校長の意思、意欲を尊重することが、学校を更に変えるのではないのでしょうか。

このように、教育内容から人事を含めた条件整備に至るまでのトータルデザインに学校全体で取り組み、必要に応じて設置者、教育委員会と話し合い、生徒にとってより良い学びの場を構築していくことが、カリキュラム・マネジメントの要諦であると考えます。

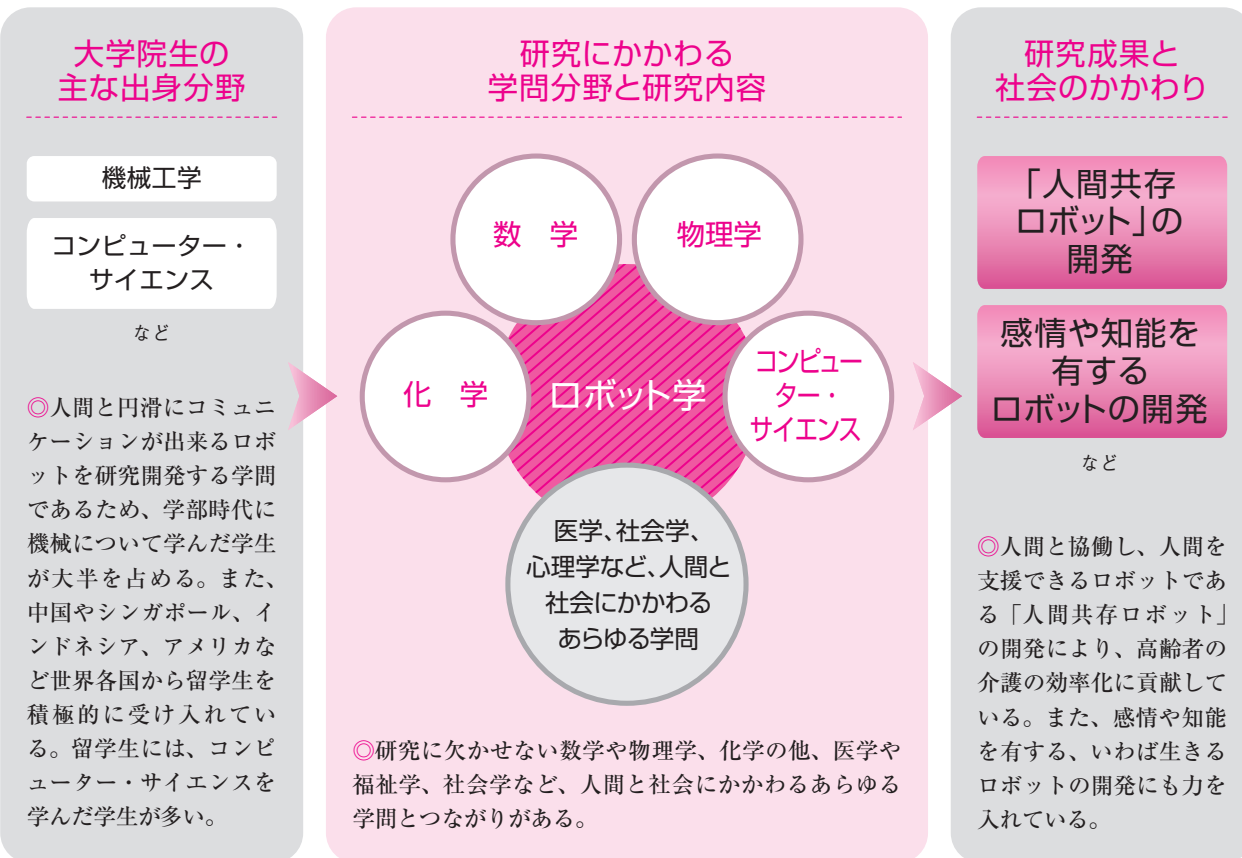
そのためには、自分たちは何が出来て、何が出来ないのか、学校の課題や弱点を組織全体で共有するところから始めなければなりません。カリキュラム・マネジメントは、教師にとってのアクティブ・ラーニングと言えるかもしれません。取り組みを通して教師の「学び」が深まるか。それは、教育に対する学校の見識が問われることでもあります。

動作と身体構造を人間に近づけ 新たなロボットの開発に努める

早稲田大 創造理工学部 すがのしげき 菅野重樹研究室

ロボットは現在、医療用、ペット用、掃除用など、用途に応じて様々な機能を備えたものが実用化されている。高齢化が進む現代社会では、ロボットの導入を求める声が介護などの現場からも聞こえる。実現できるかどうかの鍵を握るのが、人間と社会にかかわるロボットを開発する学問、ロボット学だ。その第一人者である早稲田大創造理工学部の菅野重樹教授は、人間を支援するロボットを創出する一方、人間のように心を持ち、学習できるロボットの研究にも力を入れている。最新の研究と成果を聞いた。

フローチャートで分かる菅野重樹研究室



人間や社会を洞察する広い視野が必要

ロボット学が求める学生像

人間や社会への理解

機械やものづくりに対する関心

根気よく取り組む意欲

ロボット工学と、私の専門であるロボット学とは、表記ではわずか1字の違いですが、学問内容は大きく異なります。ロボット工学が工業製品としてのロボットを作ることに特化した学問であるのに対し、ロボット学は人間と機械とのコミュニケーションをいかに円滑にするかを追究します。そのため、人間や社会に対する深い理解が求められます。

もちろん、ロボットを扱う学問ではありませんから、機械やものづくりに対する関心は欠かせません。研究では、思い通りの成果が得られることよりも、得られないことの方が圧倒的に多くあります。それでも根気よく実験に取り組み、なぜうまくいかないのかを検討しなければならないため、ロボット学への高いモチベーションが必要です。更に、今までに無い機能を備えた、新しいロボットの開発に取り組むので、既存のロボットはほとんど用いられません。つまり、基本的に全てのパーツを自作することになります。そのため、材料の検討、設計、プログラミングといった、ロボット製作のあらゆる工程に携わります。多方面にかかわることを喜べるような、ロボットをとことん極めたいという情熱を持った人に学んでほしいと願っています。

高校生へのメッセージ

探究心や粘り強さは、大学で学ぶ上でとても重要なので、高校時代に身に付けておくことよと思います。そのためには、興味の持てることを見つけ、熱中する経験が大切です。熱中すればもっと詳しくなろうとするはずですし、うまくいかなくても投げ出さずに取り組めるからです。そうして、力を付けてほしいと思います。



菅野重樹 教授

菅野重樹 早稲田大学創造理工学部学部長、教授。同大学院創造理工学研究科研究科長。同大学院博士課程教育リーディングプログラム「実情情報学博士プログラム」コーディネーター。同大学院博士後期課程単位取得退学。工学博士。同大理工学部助手などを経て、現職。日本ロボット学会功労賞などを受賞。著書に『人が見た夢 ロボットの来た道』（JIPMソリューション）など多数。

研究を志したきっかけ 世界初の偉業に 衝撃を受け ロボット研究を夢見る

私は、子どもの頃からSFや機械が大好きでした。これには、新しい技術や機械が世界中で次々に作り出された時代に育ったことが影響しているのではないかと。例えば、東海道新幹線の開通は小学校入学の1年前、アポロ11号の月面着陸は小学5年生の時のことです。更に、中学3年生だった1973年には、全身のパーツがそろった人間型ロボットが、当時の本学理工学部機械工学科の加藤一郎教授により世界で初めて開発されました。その映像を見た時の衝撃は、昨日のことのように鮮明に覚えています。ロボットが見事に二足歩行をする姿に、機械が人間に大きく近付いたと感じました。ものづくりにも興味があった私は、「将来、加藤教授の下でロボット開発に携わりたい」と考えるようになったのです。

そのため、私は本学理工学部機械工学科に進学しました。入学して間もない頃に、思い切って加藤教授の研究室を訪ねたことがあります。す

ると教授は、研究室を丁寧に案内してくださいました。人間の手や足などを模した精巧なロボットをいくつも目の当たりにした私は、世界最先端の研究が行われていることを肌で感じ、興奮で足が震えました。憧れがますます強まりましたから、3年生で加藤研究室に所属できた時のうれしさは忘れられません。

研究概要

感情と知能を備えた 生きるロボットの 開発に取り組む

人間とかかわるロボットを作るといふ加藤教授の志を引き継いだ私の研究には、2つの柱があります。1つめは、人間と協働し、人間を支援する人間共存ロボットの開発です。そのロボットには、人間と同じように作業できる性能が求められます。

例えば、壊れやすい物は優しく握り、滑りやすい物はしっかり持つというように、物体の特性に応じて手の指をうまく動かさなくてはなりません。更に、人間同士が何かに取り組む時と同様に、相手の視線の向きや表情などを把握し、相手の置かれた状況によって力を加減できるようにする

必要もあります。つまり、動きの巧みさに加え、人間への適応性や安全性を高める必要があるため、モーターの制御方法、表面や関節に用いる素材などについて検討を重ね、実験を繰り返しています。

研究の2つめの柱は、感情や知能を有するロボットの開発です。頭をなでると目を細めるなど、人間の特定の行動に対して喜ぶしぐさをするように設定するのではなく、人間のように心を持ち、経験を通して学習し、判断・行動できる、言わば生きるロボットを作ろうとしています。人間の最も根源的な本能には、「自己保存本能」と「周囲とかかわろうとする本能」があると考えられます。その2つをロボットが人間同様に身に付けた時、人間に備わっているような感情と知能が芽生えるという仮説を立て、研究に取り組んでいます。本能は身体と密接に関係しますから、人間の身体構造を再現することが、感情や知能を有するロボットを開発する鍵となります。人間共存ロボットのようには人間と同じ作業が出来るだけでなく、神経や血管などに相当する組織を体内に備えるなど、

本質的な構造も人間と同じようにする必要があるので。そのため、人工的に再現しなければならぬ組織が無数にありますし、成長や生殖機能などをいかに再現するかといった難問も残されています。しかし、実現すれば、全く新しい生命が誕生します。これほど大きな目標を掲げたものづくりが出来ることは、研究者冥利に尽きる喜びです。

研究の成果と展望

ロボットの開発により 高齢化社会に 貢献したい

人間共存ロボットは、私の研究室でいくつも開発しています。最新型は、2007年に発表した「TWENDY・ONE」

NE」(写真)です。これは、あらゆる方向に自在に動くことはもちろん、野菜や果物、食器など、家事に必要なほとんどの物をふさわしい持ち方で操ることが可能です。また、一人ひとりの人間に合わせた力の加減も出来ますから、ベッドから車いすへの移乗など、介護支援にも役立つでしょう。被介護者の方が、親族や介護士には頼みにくいと感ずるよ



写真 「TWENDY-ONE」は、外見の親和性も重視し、無数の配線を内部に収納できるように設計されている。写真提供：早稲田大創造理工学部菅野重樹研究室

うなことも、ロボット相手であれば気兼ねなく任せられることがあるはず。実用化に向けて更に研究を進めたいと考えています。

感情や知能を有するロボットの開発も、少しずつですが着実に前進しています。センサーなどから伝わる情報を蓄積・分析することによって、自己保存に適するのはどのような状況を判断し、ふさわしい行動が取れるようになりつつあります。ここで実現した機能を応用すれば、人間共存ロボットは今まで以上に人間と同じように動けるようになり、利便性が高まるでしょう。そうすれば、高齢社会において活用の幅が更広がるかと期待しています。

用語解説

1 アポロ11号

アメリカ航空宇宙局の有人月飛行計画「アポロ計画」による11番目の宇宙船。1969年7月20日に人類史上初めて月面に着陸した。

2 触媒

化学反応の前後でそれ自身は変化せず、他の物質の反応速度を変化させる物質。ここでは、その物質を用いた技術のこと。

3 強磁性体

磁力の働く空間である磁場において強く磁気を帯び、磁場の外でも磁気を残す性質のこと。鉄やコバルト、ニッケルなど。

故障を自分で直せる 夢のロボットを実現したい

長濱 峻介さん

ながはま・しゅんすけ 早稲田大大学院創造理工学
研究科博士課程3年。静岡県・私立浜松日体中学・高
校卒業。

Q なぜこの研究分野に
進んだのですか

A 私は大学の学部時代に、プラスチックや医薬品といった化学製品の製造に欠かせない技術、触媒の研究に取り組んでいました。研究自体は面白かったものの、何時間にもわたる実験が毎日続いたため、正直、少し疲れていました。そこで、私の頭にある考えが浮かんだのです。「自分の代わりに実験をしてくれるロボットを作れないかな」と。それ以来、ロボットへの関心は日

日に高まり、専門的に学びたいと考えるようになったのです。

Q 菅野教授の研究室での
研究内容を教えてください

A 感情や知能を有するロボットへの開発に携わり、ロボットに人間と同じ「自己保存本能」を付与する研究に取り組んでいます。この研究では、従来、経験則に基づいて危険を回避するといった情報処理の機能、つまり人体で脳などが担う機能を、ロボットに持たせることが中心でした。一方、私は人間の生命維持の根幹を担う機能に注目し、心臓や血管から成る循環器系をロボットに整備しようとしています。

ロボットが動かなくなる、つまり自己保存が出来なくなる主要な原因の1つに、摩擦や切断による導線の機能不全が挙げられます。人間でいう神経の損傷ですが、人間ならば循環器系の働きにより、損傷を修復したり、損傷しないように事前に管理したりすることが出来ます。ロボットにもこの自己修復・管理機能が付きたいと考えているのです。

具体的には、人間の血管に見立てたチューブを導線に沿って張り巡ら

せ、血液となる液体をチューブに満たし、導線を修復する物質、修復材をチューブに入れて循環させます。ただ、それだけでは修復材が導線の損傷箇所うまく届かない可能性があります。そこで、修復材に導線と同じ強磁性体を用い、磁場が修復材を導線の損傷箇所を選択的に引き付けるようにしました。

私の研究が完成し、自己修復・管理システムが整備されれば、故障しないロボットの実現につながり、社会のあらゆる作業が大幅に効率化されると期待しています。今後は、循環させる物質を修復材以外にも広げ、ロボット自らがエネルギーを補給できるように研究などにも取り組んでいきたいと考えています。

Q 高校生への
メッセージをお願いします

A 大学の研究では、分野を横断して学ぶことが求められます。私の研究では、数学や物理学、化学の他、海外の論文を読むための英語力が必須ですし、研究を進めるヒントを哲学から得ることもあります。大学で何を学ぶにしても、幅広い知識を身に付ける必要があるはずです。高校での学習は、大学で学ぶための基礎となります。そのため、皆さんには、目の前の学習にしっかり取り組んでほしいと思います。また、大学では海外の留学生と一緒に学ぶことも多いので、機会があれば、高校時代に英語の会話を伸ばす学習もしておくといでしょう。

私の高校時代

模試対策で身に付けた 主体的に学ぶ姿勢

●私の高校では、模試を実力試験として重視していました。2・3年生では年間の模試成績によって習熟度別にクラスが編成されたため、私は1年生の頃から模試の対策に力を入れ、模試の事前・事後学習は自分で工夫して取り組みました。事前学習では、教科書や参考書で問題演習を積み、事後学習では、模試で間違えた問題の類題に繰り返し取り組み、同じような間違いを二度としないようにしたのです。前回の模試でつまづいた問題とよく似た問題が、次回の模試では解けるようになっていたことが何度もありましたから、確実に力が身に付いていることを実感できました。3年間を掛けて実力を積み上げたからこそ、志望大に現役合格できたのだと思います。

主体的に学習する習慣を高校時代にしっかり定着させたことは、今、研究者として新しい技術・機械を開発する上で、とても役立っています。

「進路多様躍進校会議」に全国の70校から130人が集結

進路多様校の躍進こそが日本発展の鍵！ 指導力向上の全国的な研究会を実施

2015年7月、群馬県立高崎東高校において、「第2回 進路多様躍進校会議」が2日間にわたって開かれた。前年度の第1回から規模が拡大し、25都県の70校から130人の教師が参加。基調講演後、3つの分科会に分かれて、自校の取り組みを発表し、様々な指導ノウハウを共有した。主催者である高崎東高校の山口和士校長に、開催を思い立った理由、会の内容、今後の展望、教育の変革期にあつて進路多様校に求められることを聞いた。

課題や悩みを本音で語り合い 同志のネットワークを築く

「進路多様躍進校会議」は、その名の通り、生徒の卒業後の進路が多様な高校の教師が集まり、自校の取り組みを互いに紹介し合うことで指導ノウハウを共有し、各校の指導力向上に資することを目的とした会議です。各校が立ち向かっている課題、教師が抱えている悩みなども本音で語り合い、解決の方策を少しでも見いだすだけでなく、全国の先生方がいつでも相談し合えるネットワークを築きたいと考え、県教育委員会に

も相談の上、勤務校の群馬県立高崎東高校を会場に開催しました。

私がそうした会が必要だと考えたきっかけの1つに、2年半前、本校の校長に着任したことがあります。本校は創立三十二年の地域の中堅進学校です。生徒の卒業後の進路は国立大進学から就職まで多様で、入学時の学力や意欲、更には保護者の意識や経済状況なども様々ですが、教師がほんの少し導くだけで伸びるだろうと感じる生徒が大勢いました。しかし、平均年齢が若く、進学指導の経験も少ない教師が多かったため、生徒の力を伸ばしたいという意欲があつても、方策にたどり着いていな



群馬県立高崎東高校
校長

山口和士

やまぐち・かずし
教職歴37年。同校に再赴任して3年目。藤岡高校、高崎東高校、富岡高校、高崎高校（進路指導主事などを歴任）、藤岡高校（定）教師、藤岡中央高校（定）教師、前橋東高校教師、伊勢崎高校副校長などを経て、現職。「勝負は今。今日、質問に答えぬ教師は、明日への生徒の信頼を失う」

いという課題が見えました。私は先生方の「熱」に懸け、学校全体として指導力向上に取り組みうと考えました。ただ、研鑽を積もうにも、校内だけでは限界があります。もち

ろん、目の前の生徒の実態を把握して指導することが最も重要ですが、生徒の多様化に対応するには、教師自身の視野を広げる必要があります。そこで考えたのが他校との連携です。

「進路多様躍進校会議」概要

● 概要

国公立大、私立大、短大、専門学校、公務員就職、民間就職など、生徒の卒業後の進路が多様な高校の教師が集まり、自校の進路指導や生徒指導の取り組みを公開し、指導ノウハウの共有、課題認識などの情報交換を目的とした会合。群馬県立高崎東高校を会場とし、年1回、2日間（金曜午後と土曜午前）にわたって実施。北は青森県から南は鹿児島県まで、全国から高校教員が参加。2015年度は25都県にも及んだ。

● 参加者数

2014年度：33校、101人 2015年度：70校、130人

● 2015年度の内容

- ・群馬県立女子大・濱口富士雄学長の基調講演「文系として際立つ群馬県立女子大学」と質疑応答
- ・3つの分科会「難関国公立大学・私立大学指導対策研修」「国公立大学指導対策研修」「医療・看護系進学対策研修」に分かれてワークショップを実施。2日目に全体会でその内容を発表。



*山口和士校長からの提供資料を基に編集部で作成

本校と同じような状況にある高校は県内のみならず全国にあります。本校を開放し、同じように苦悩を抱える全国の進路多様校に呼び掛け、一堂に集まる研究会を開こう。そうすれば、本校の教師も深い学びの種を得られると考えたのです。

進路多様校に活力を生み 高校教育の飛躍につなげたい

本校の課題を出発点にもう1つ考えたのは、進路多様校の躍進こそ、

全国の高校の教育力向上に結び付くのではないかとことです。

普通科を有する高校は、全国に約2600校あり、そのうち「進学校」と呼ばれる高校は約300校、少し幅を広げても500校ほどで、それ以外の約2100校は「進路多様校」と呼ばれる高校です。日本の高校の大半を占める進路多様校の先生方が元気になり、現実を変革したいと思っ

て生徒と向き合うようになれば、日本の高校教育が大きく変わるのではないかと考えたのです。

上層の生徒が国公立大に挑戦する道筋のつくり方、中層の生徒を

難関私立大に挑戦させる仕掛け、専門学校を志望する実学志向の生徒に応じた指導の仕方、公務員・民間企業の就職指導の仕方など、その指導経験がある先生方の話を聞き、学び続けることで、今は経験がない教師でも力が付いていくはず。そうならば、卓越した指導力のある教師がいなくても、学校全体として大きな力を持つことが出来るはず。

実際、本校の教師は積極的に参加し、意識改革が進んだ結果、学校全体が大きく変わりました。すると、国公立大現役合格者が13年度入試で

は15人、14年度は17人、15年度は24人と着実に伸びていったのです。

全国に共通する課題には 国を俯瞰した教育観が必要

当初は5〜6校が集まれば大成功だと思っていました。14年度第1回は、参加校数33校、参加者数101人に及びました。北は青森県から南は宮崎県まで、年齢層も20代〜50代と、まさに多様な教師が集まりました。中には、自費で参加された先生もいました。この会議にそれだけの意義を見いだしてもらえたことをうれしく思い、実際、期待に応えられるだけの活発な意見交換がなされたことに、会の成功を感じました。また、進学校の参加も複数校ありました。東京大や京大など超難関国立大の合格者が輩出する高校でありながら、専門学校進学などの多様な進路を抱える生徒も出てきたことに対して、危機感を抱いているのだらうと思いました。

そのような手応えを得て、また、参加者から次年度も開催してほしいという声を多くいただいたため、15

年7月に第2回を開催しました。

第2回を第1回以上に有意義な会合とするために考えたのは、「高等学校基礎学力テスト（仮称）」と「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」、いわゆる「新テスト」について、大学から率直な考えを聴く場を設けることです。19年度から順次実施といわれている新テストがどのようなものかは、高校現場の最大の関心事です。この日本全国に共通する教育の課題を考えるためには、学校や県の枠を超えて、日本を俯瞰した教育観が必要になります。だからこそ、全国から教師が集まるこの会議で考へるべき課題だと思いました。

そこで、私は昨年から群馬県内の国公立大、私立大、短大の学長や副学長、理事の方々を訪問し、新テストへの対応、個別学力試験の作問の方向性や体制について尋ねてきました。正直なところ、県内の各大学は対応に迷っているというのが実情だと分かりました。そうした状況においても、大学の考えを高校現場に向かって率直に話そうと言っていたら、群馬県立女子大の濱口富士雄学長を第2回の講師に迎えました。

改革期の今こそ、 未来を展望し、攻めの姿勢を

今後、「高大接続改革実行プラン」を軸として教育改革は進んでいきます。かつて、共通一次試験がセンター試験に切り替わった時、傍観していた高校、対策が遅れた高校がその地位を失っていくのを目の当たりにしてきました。それを繰り返さぬために、今から十分に備えておくべきです。最も必要なのは、周到な準備と対策を自校で行おうとする強い意志、攻めの姿勢だと考えます。03年度の学習指導要領改訂時にスクール・アイデンティティ（S I）の重要性が強く訴えられていましたが、同様に変革期を迎える今、再び新たなS Iの確立が重要ではないでしょうか。ただ、改革といっても、自校にとつての不易の部分、改革すべき部分の両方があるはずです。変えていかなければならないとすれば、どのような形態で実践するのか、そのスタンスを明確にして、改革実施年までのタイムテーブルを作ることが、確実な成果に結び付くと考えます。

また、新テストでは合教科・科目型、総合型の問題にも注目が集まりました。教科再編や指導内容の融合、分離などの変化に対応できるように、校内で融合問題や複合型教材を製作し、その方向性の確立にも早期に着手した方がよいはず。古典を英語で訳して外国に発信する、数学と物理を融合したプリントを作るなど、その検討には時間が掛かると思われる。少しずつでも始めることが重要です。いずれ、新テストの試作問題が発表されます。その時には教科を超えて問題分析をし、指導の可能性を探ることが必要になります。他教科の教科書にも目を通し、生徒が何を学んでいるのかをつかんでおくことが、指導内容の融合への対応策の第一歩となるでしょう。

生徒の学習状況の把握は、中学校、小学校にさかのぼっても行っておきたいことです。未来の高校生の実態をつかんでおかなければ、対策も立てられません。新テストを初めて受ける生徒は今の中学1年生となる予定ですが、保護者は新時代の教育改革を実感として展望できていないようです。そうした保護者に自校の対

策をアピールして、啓発していくことも求められるでしょう。本校はこの課題にも敢然と挑戦します。

全国の先生方に勇気を与え 新たな進路指導の道を拓く

校長となった今も、私は毎朝、校門の前に立ち、生徒に「おはよう」と声を掛けています。また、1年を通じて生徒と面談し、答案を見て弱点を指摘し、個々に合った戦略を授けています。多様校といえど、熱意のある教師と出会い、学びたいと思える学間を見つけることで、生徒の人生が変わる瞬間は無数にあるのです。どのように改革が進んでも、教育の王道、本質は変わらないのです。生徒の現状を分析すると共に、それぞれの教師が抱える課題を整理し、学校の方針として解決する。その際に必要なのが、幅広い視点であり、経験から得られる知恵であり、それらを共有する教師たちの交流です。本校と全国の先生方に勇気をもたらす、新たな進路指導の道を切り拓く場とするため、今後もこの会が発展していくことを願っています。

参加者が語る

進学校こそ進む多様化に対応し 自らの視野を広げることが必要

新潟県立国際情報高校

山崎健太

やまさき・けんた



教職歴12年。同校に赴任して8年目。進路指導主事。「学ぶということは、優れた人格を持つて、他者に貢献すること。そうした生徒を1人でも多く育てたい」

地方の高校で進む ユニバーサル化に危機感

大学ではユニバーサル化が進んでいます。高校でも同様のことがいえます。地方の公立高校は、都市部にある一部の高校を除き、進学校といえども全入に近い状況の高校もあり、多様な生徒を抱えるようになってきました。更に、少子化の影響で学級数が減り、教師数も減っていくことが、今後ますます現実味を帯びていきます。生徒の多様化に今よりも少ない数の教師で対応していくために、1人何役もこなさなければなら

なくなると思います。

本校も旧帝大に現役合格者を出すいわゆる地域の進学校ですが、近年、学力も含めて生徒の多様化が進んできていると感じています。そのため、全国各地の高校の実践例を直接見聞きして、知見を得たいと思います。昨年に続き、今年も本校から私を含めて2人が会議に参加しました。

今年3つの分科会があり、私は「国公立大学指導対策研修」に参加しました。各校が挙げた課題の中に、教師個人の経験値の違いなどが原因で面談内容にばらつきが生じているということがありました。それに対し、ある高校では、卒業時に行う生徒へのアンケートに「先生との面談で一番印象に残ったのは、いつ、どのような場面だったか」という質問を設け、その回答を集約して全校で共有し、以降の学年の面談に役立て

ているとのことでした。自分にはない発想であり、すぐに実践できる工夫を得られるのも、大勢の教師が参加しているこの会ならではのと思っています。

校内だけでなく、

全国に目を向ける必要性を実感

私が他県の先生が集まる研修会に初めて参加したのは3年前、山形県で開催された「環日本海進学ネットワーク」です。その前年に進路指導部に配属になり、学校全体の進路指導について学んでいる時でした。

各県の各地区の進学校が集まり、実践報告や意見交換をする中で、校内だけでなく、全国に向けて意見を発信し、高校教育全体をより良くしようと奮闘する、山口校長のような先生方がいることに衝撃を受けました。そして、多様な視点、幅広い経験、県民性、学校の特性などが入り混じった状況で先生方と意見を交わし、思いを共有し、発展させることが、今後の教育につながると実感しました。学校の伝統、同僚性、県民性に左右され、自校の視点では特別に感じることが、全国では一般的なことも

あります。そうした気付きを得られる場でもありました。最近、高校のスポーツ界では、日本人と外国人の子どもが活躍し話題になっていきます。今後、国策により外国人労働者が増えそうですが、そうならば、親が外国籍という生徒が増え、学力や気質以外の面でも多様化が進んでいくかもしれません。そのことに気付いたのも、他校の先生方との交流があったからだと感じています。

それぞれの教師が県を超えた思いのつながりを大切にして生徒と向き合うことで、生徒は志を持って社会に巣立ち、変化の激しい社会を切り拓き、前に進んでいくことが出来る。そのためにも、教師のネットワークを更に広げていきたいと思っています。



写真 「国公立大学指導対策研修」の分科会の様子。40校の教師が参加。全体で意見を述べ合った後、4つのグループに分かれて、自校の取り組みを報告。取り組みのポイントへの質問や更に良くするアイデアなどが出された。

福井県教育委員会「中高英語教員指導力向上研修」をレポート

4技能を統合して育成し、大学入試改革に対応する指導・評価について研修

福井県教育委員会は、2015年8月、県内の全ての公立中学校・高校の英語教員を対象に、「中高英語教員指導力向上研修」を実施した。講師はベネッセのGTEC開発担当者が務め、技能統合型の言語活動のあり方や、英語運用力を育成する観点からの定期考査・パフォーマンステストの見直し方について、参加者は様々な活動をしながら学んだ。ここでは、高校教員を対象とした研修会の模様をレポートする。

GTECの評価ノウハウを校内のテストに応用

福井県では、英語の4技能運用能力の育成と共に、新たな大学入試への対応を視野に入れ、英語教育の改革に取り組んでいる。現在、公立高校の入試において、スピーキングの導入も検討中だ。

改革の中で特に注力しているのが、評価方法の見直しだ。2012年度には、全ての公立高校がCAN-DOリストを作成している（公立中学校に対しては13年度に実施）。ただ、その活用については課題があり、特に表現活動を評価するノウハウを求める



写真1 研修は、講演を聴くだけでなく、その内容を実感できるように、関連する英語の問題に取り組むなど、活動を取り入れながら進められた。

声も多い。そこで着目したのが、県内で導入が進んでいるベネッセのGTEC for STUDENTSだ。スピーキングとライティングについて、GTECの採点方法や採点基準などを学ぶことで、それらを定期考査やパ

「評価が変われば、指導が変わる」を目指して

全国的な課題ではありますが、英語を話す力や書く力を始めとした生徒の英語運用力を高めていくことは、本県においても最重要課題の1つです。そこで、「評価が変われば、指導が変わる」という考えに基づいて評価方法の見直しを進めており、その一環として今回の研修を企画しました。この機会に、教師がGTECの評価のノウハウを参考にし、それを定期考査やパフォーマンステストに生かすことで、英語の4技能を統合して子どもたちの英語力を伸ばすと共に、今後の大学入試改革への対策にもつなげたいと考えています。



福井県教育庁
学校教育政策課参事
橋本久代
はしもと・ひさよ

ベネッセは、GTECを始めとする全国規模の調査・検定を通して膨大なデータを蓄積しており、指導・評価に関するノウハウを豊富に持っています。その知見をお借りし、本県の実態に即した指導改善を進めていきたいと考えています。今回の研修の成果は、今後、教科会などを通して共有し、各校の指導改善の推進に役立ててもらうだけでなく、更なるサポートも検討していきます。教育は、目の前の生徒に対する教師の思いがあってこそ花開くものです。先生方には、生徒が学ぶ姿を見つめながら、日々の指導を通してチャレンジを続けていってほしいと思います。

福井県教育委員会「中高英語教員指導力向上研修」プログラム

●第1部

「指導と評価の一体化」ワークー CAN-DO リストと定期考査の比較検証
福井県教育庁学校教育政策課言語・総合教育グループ 主任 浅井裕規

●第2部

「英語教育環境の変化」

ベネッセコーポレーション高校事業部 GTEC 事業推進課 課長 込山智之

●第3部

「日々の指導・評価に生かせる、作問・クワイテリア・マーキング」

ー GTEC for STUDENTS のスピーキングテストを通して

GTEC 統括編集長 渡辺都子、GTEC コンテンツディレクター 森野勉

(研修コンテンツ作成協力/玉川大文学部英語教育学科 工藤洋路准教授)

* 研修資料を基に編集部で作成



福井県教育庁
学校教育政策課
言語・総合教育グループ主任

浅井裕規

あさい・ひろき

福井県では、既に全ての公立中学校・高校が CAN-DO リストを作成した。今後の課題は、そのリストを活用すると共に、生徒や保護者にも公

開する。その内容を紹介します。参加者はペアを組み、持参した自校の定期考査の問題と CAN-DO リストの内容とを比較し、内容が関連する箇所を説明し合った。続いて、5〜6人のグループとなり、自校の英語指導について良い点や課題を説明し合い、指導ノウハウを共有（写真2）。その内容をまとめ、各グループの代表者が全体発表を行った（図1）。

図1 CAN-DO リストと定期考査の関連についての発表内容

●定期考査の問題と CAN-DO リストが関連している点

- ・教科書の内容に関連する初見の文章での正誤問題などを出題した。
- ・教科書の中の課題文のテーマに関する自分の意見を英語で話す練習を授業でさせた上で、それを英語で書く問題を出題した。
- ・CAN-DO リストの「挨拶が出来る」の項目に沿い、挨拶のやりとりを会話形式の問題として出題した。
- ・教科書の中の課題文で印象に残った内容を選び、その理由を含めた英作文を書く問題を出題した。
- ・初見の英文を読み、ペアで内容について話し合い、その後、自分の意見を述べるというテストを実施した。
- ・定期考査では、まとまった量を書かせる時間が取りにくい。そこで、授業中に英作文のテストをしたり、ALTによるパフォーマンステストを実施したりしている。
- ・生徒用CAN-DO リストを技能ごとに作成。生徒は4段階で自己評価をして到達度を確認する。

●今後の課題

- ・CAN-DO リストの内容を、教員が全て把握できているわけではないため、定期考査ではCAN-DO リストと関連していない問題も出題している。
- ・CAN-DO リストを活用して、評価方法に占める定期考査の割合を減らし、Speaking、Writing のパフォーマンステストや小テストの割合を増やす。

* 取材を基に編集部で作成

パフォーマンステストなどに応用できないかと考えたのだ。
教育委員会では、ベネッセから講師を招き、15年8月の2日間、県内全ての公立中学校・高校の英語教員を対象に4技能の指導や評価の改善を図る研修を実施。1日目は中学校教員71人、高校教員2人、2日目は中学校教員5人、高校教員28人が参加し（写真1）、同じ内容で研修が行われた。その主な内容を紹介します。

第1部

「指導と評価の一体化」ワーク

パフォーマンステストや観察なども実施

まず、自校ではどの程度、指導と評価の一体化がなされているのかを、参加者が確認するためのグループワークが行われた。コーディネーターを務めたのは、福井県教育庁学校教育政策課の浅井裕規主任だ。

まず、自校ではどの程度、指導と評価の一体化がなされているのかを、参加者が確認するためのグループワークが行われた。コーディネーターを務めたのは、福井県教育庁学校教育政策課の浅井裕規主任だ。

パフォーマンステストや日々の授業における観察などによる評価も併せて行うのが望ましいでしょう」と浅井主任は強調した。

写真2 グループワークでは、持参した資料を示しながら、自校の英語指導で工夫している点などを説明。全校から教員が参加している利点を生かし、お互いのノウハウを共有し合った。

技能統合を意識した言語活動が必要

第2部の講演で、今後の大学入試において英語の4技能が重視されていくという環境変化の解説がなされた後、第3部では、4技能を評価するために日頃のテストではどのような出題をすればよいのかについて、講演とグループワークが行われた。

まず、GTETC統括編集長の渡辺都子がライティングの評価について説明。一例として、14年度、文部科学省「英語教育改善のための英語力調査事業」(*1)で出題された情報要約問題を紹介した。これは、1分程度の英語の音声聞き、約30語で要約するという問題だ。参加者はその問題に取り組んだ後、「問題を解くために必要なスキル」「そのスキルを育成するための言語活動」について、ペアを組んで意見交換をした。



ベネッセコーポレーション GTETC 統括編集長

渡辺都子

わたなべ・とし

参加者からは、「リスニング力はもちろん、英語の文章の構成を読み取る力やメモを取るスキル、また、メモから文章を書き起こす力などが必要だ」という声が上がった。それに

対し、渡辺は、「本問題は、英語の音声聞いて、英語で要約する、つまり『聞く↓書く』という技能統合型の問題であり、定期考査のように、授業での学習内容の理解度や定着度を測る問題ではありません。このような技能統合を意識した言語活動を通して、必要なスキルが養われていきます」と説明した。

「英語教育改善のための英語力調査事業」では、技能別のレベルを示す国際標準規格として欧米では一般的なCEFR(*2)によって評価していることについても解説した。

「CEFRは、action-orientedつまり、『英語を使って実際に何が出来るのか』という観点で英語力のレベル分けをしています。英語を使う環境において、授業で学んだ事柄を使

うと何が出来るのかを考える良い機会となるはずですよ」と、渡辺は話す。

また、文法指導に関しては問題を提起。個別の知識にとどまらず、「書く・話す」を見据えた文法指導の重要性を強調した。文法指導に関する課題の一例として、同じ知識を問うているものの、形式を変えると正答率が大きく異なる2つの問題を提示(図2)。「生徒が頭の中の引き出しから必要な文法を引き出せないことが、正答率の差に表れています。場面に応じて必要な文法を引き出せる運用力を伸ばす指導が、文法指導では大切です」と指摘した。

更に「Reading Passageから「書く」言語活動をどうつくるのかについても、具体的な問題を提示しながら説明が行われた(図3)。

スピーキング力が伸びる活動とは何かを実際に体験

スピーキングの評価については、まず、参加者全員がGTETC for STUDENTSのスピーキングテストを、実際の形式と同じようにタブレット端末を使って解いた(写真3)。次に、GTETCコンテンツデーレ

図3 Reading Passage から「書く」言語活動への移行

①英文を読み、理解・確認をする

初めに概要を捉えさせる。

②生徒とのインタラクション

英文の内容を考慮しながら、教師と生徒が英語でやりとりをし、自分の問題に置き換えて考えさせるなどして、英文と生徒を結び付ける。ここは書く活動の前提となる話す活動の段階であり、問題提起であるため、うまく答えられなくてもよい。

③ Writing 活動の設定

「書き手の立場」「書く目的」「読み手」などを設定し、よりauthenticなタスクを提供することが大切。

* 研修資料を基に編集部で作成

図2 出題形式の違いによる正答率の違い

【歌舞伎公演のポスターを見て】

Koji : Do you know about kabuki?

Mike : Yes, but I have seen it.

(否定文にしなさい。)

Koji : Really! Then you should see it. Let's go together.

正答率
65.3%

【歌舞伎公演のポスターを見て】

Koji : Do you know about kabuki?

Mike : Yes, but _____ it.

(see)

Koji: Really! Then you should see it. Let's go together.

正答率
24.5%

* 研修資料を基に編集部で作成

* 1 高校3年生約7万人を対象に行った英語力調査。詳しくは右記サイトを参照。http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1358258.htm

* 2 Common European Framework of Reference for Languagesの略。



写真3 GTEC for STUDENTS で実際に行われているスピーキングテストを教師が体験。

クターの森野勉が講師となり、授業で出来る言語活動として、教師役が生徒役に質問して話を引き出しながら2分間会話を続けるペアワークを行った。その際、「What's the date today?」「How's the weather?」「What's the Display Question (質問者が答えを知っている質問、学習者の理解を試すための質問) から徐々に踏み込み、Referential Question (質問者が答えを知らない質問、コミュニケーション目的の質問)を増やしていくことで、会話が活性化し、生徒が英語を使う練習になると説明された。

ワーク後、数組が発表し、「質問は生徒が答えやすいものにする」「生徒が答えた事柄に関連する質問をする」「教師より生徒が多く話すようにする」「教師が支援し、生徒が発言できなかつたことを言えるようにする」といった活動のポイントを共有した。次に、論理的に話す力を伸ばす活動として、メモを活用したスピーチの手法が紹介された。参加者は「The recent news that impressed me」というタイトルのスピーチを2分間で準備し、代表者2人が各1分間で発表した。「メモはキーワードのみとし、英文を書かないのがポイントです。即興的に文法を組み立てて話す練習になります」と、森野は話す。

スピーキングの評価方法も詳しく解説。森野は、「複数の教師が異なる観点で評価する場合を除き、教師1人で内容や発音、正確さなどのあらゆる観点を同時にチェックするのは難しいと思います。そのため、『会話を1分間続けられるか』『指示通りの内容が含まれているか』など、具体的な観点を決めておくのが望ましいでしょう」と事前に評価のポイント

を絞り込む重要性を強調した。生徒には、「学習した表現を入れる」「意見の理由を述べる」など、評価の基準にかかわる指示をしておくことよいと、森野は話す。

質疑応答

生徒の実態に合わせて無理のない実践を

また、生徒が「やらされ感」を抱かないように、「誰に対して、何を伝えるために話すのか」という設定を明確にし、生徒の目的意識を高める重要性も指摘した。

最後の質疑応答では、参加者から多様な質問が寄せられた。「生徒の実態を踏まえると、文部科学省の設定する目標は高過ぎるのではないか」という質問に対して、高校事業部GTEC事業推進課課長の込山智之は、「確かに高度な英語力の育成を目指し、改革のペースがこれまでになく速いのは事実だと思います。ただ、文部科学省は、各校の生徒に合った内容やレベルの教材を用いた活動を行うことを基本方針としています。生徒の実態に合わせて無理なく、興味・関心を高めやすい内容や形式の言語活動を導入することが求められています」と述べ、あくまでも生徒目線の活動の重要性を語った。

英語の外部検定試験でのライティ

ングの問題に関して、「採点では、表現の型が優先され、現実の場面で用いる英語とはやや食い違いがあるのではないか」という質問があった。それに対し、森野は「生徒のレベルによっては、ある程度、型を与えることは大事ですが、それが全てではありません。自然な流れの会話と判断されれば、型通りでなくても減点されることはない」と、生徒たちに伝えてください」と、GTECでの採点基準を例に挙げ、現実場面に即した運用能力を伸ばす大切さに触れた。

「指導と評価の一体化」の考えに基づき、まず評価方法を変えることで、指導の内容や方法、そして生徒の意識の変革を図る福井県の取り組みの進展を、今後も注視していきたい。



ベネッセコーポレーション GTEC コンテンツディレクター

森野 勉

もりの・つとむ

指導を改めて見直す必要性を痛感

8月号の特集は、それぞれの立場に立脚した高大接続改革が紹介されており、相互理解を果たせる素晴らしい特集だった。群馬県・伊勢崎市立四ツ葉学園中等教育学校の飯塚秀彦先生の「教師は生徒に『考えてごらん』とよく言うが、比較したり類推したりするものを設けていない限り、本当の思考力・判断力を問うているとは言えない」という指摘は胸に突き刺さった。また、そのような先進事例を見る度に、グループワークや観点別評価の重点化などに伴う中学校と高校との学びのギャップ、多くの高校で行われている講義型授業と大学での学びとのギャップを痛感する。

〔愛知県立日進西高校・野々山新〕

生徒が地域の課題を考える重要性を感じた

8月号の「ハートをかがせー」を読み、地域の切実な課題を高校生が考えることは重要だと感じた。町づくりに若い世代が積極的に関わっていくことが、地域の活性化につながるのだろう。継続的に取材してもらい、取り組みの変化、生徒の変化を知りたいと思った。

〔岡山県立岡山大安寺中等教育学校・杉山義則〕

教師の意識次第で生徒は変わる

8月号の「新課程 指導最前線」で紹介された、兵庫県立加古川東高校の取り組みが参考になった。模試分析は、本校でも課題の1つだ。同校では、学年団が主体となり、細やかな連携がなされているのだろう。「教師の意識次第で生徒は変わる」ことを改めて感じ、

Reader's VIEW

Volume 4

読者のページ

読者の先生方からのご意見を紹介します

本校の教師にもこの事例を紹介して、具体的な取り組みにつなげていきたいと思った。

〔愛媛県・私立新田青雲中等教育学校・菊池岳史〕

生徒の信頼と期待に応え、高校の求心力を高める

8月号の「指導変革の軌跡」で紹介された北海道札幌北高校の記事で、1学年主任の小山浩二先生も言われていたが「学校の求心力を高める」ことは重要な視点だ。生徒が自分の進路実現のための方策を、全て高校で工面するのではなく、「生徒が高校を信頼し、どのように活用していくのかを考える」ことがポイントではないだろうか。高校は、そのような生徒の信頼と期待に応えなくてはいけない。

〔山形県・匿名希望〕

専門高校の生徒が活躍できる場を増やすべき

8月号の「半歩未来を考える教育オピニオン」を読み、日本は普通科高校が多いので、専門高校の生徒が活躍できる場を増やし、専門高校の魅力が伝えることが必要だと感じた。「アグリマイスター顕彰制度」は農業高校の生徒の技能を評価し、外部に発信していくものであり、このような取り組みが他の専門高校にも広がっていくとよいと思う。

〔茨城県立水戸第一高校・川久保典昭〕

教師川柳

忘れまい 生徒目線で見る景色

広島県立広島観音高校・長光優樹

『VIEW21』高校版はウェブサイトでもご覧いただけます！

本誌の最新号、及びバックナンバーは、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトで公開しております。誌面のPDFや「改良！指導ツール ピフォーアフター」の図版もダウンロードできます。ぜひご利用ください。

詳しくは

VIEW21 高校版

検索

<http://berd.benesse.jp/magazine/kou/>



編集後記

◎今回の特集の取材では、アクティブ・ラーニング（AL）型の授業を拝見しました。どの授業でも感じたのは、生徒が活動をしている時の机間巡視の難しさです。一斉型授業での机間巡視は、生徒が問題を解いている時などであり、生徒の状況は手の動き具合などで把握できると思います。しかし、AL型授業での机間巡視では、話し合いの途中から生徒たちの話を聞くことが多くなるため、活動の状況を判断するのが難しいと思いました。生徒が主体的になるAL型授業では、様々なに変化する生徒の状況を把握するために、ますます教師もアクティブになるのだと感じました。（柏木）

VIEW21 10月号 Vol.4

2015年10月16日発行

発行人 山崎昌樹
 編集人 春名啓紀
 発行所 (株)ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所
 印刷製本 凸版印刷(株)
 編集協力 (有)ペンダコ
 執筆協力 中丸 満、二宮良太
 撮影協力 荒川 潤、福山 哲、松原 誠、ヤマガテイッキ
 イラスト協力 伊藤美樹

VIEW21編集部
 〒163-0411 東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビルディング13階

©Benesse Corporation 2015

VIEW21

2015
December
12月
Volume 5

次号は
12月11日発行(予定)

『VIEW21』高校版は
年6回の発行です

COVER STORY
教師と生徒の肖像

いつだって本気

表紙の学校 兵庫県立北条高校 衣川 顕子^{きぬがわ あきこ}先生



「テンポが速く、量も多くて大変。でも、重要なところは『ここは覚えなあかん』とはっきり言って、覚えやすいように説明してくれる」と、生徒が大きな信頼を寄せる衣川顕子先生の英語の授業。各自で教科書を黙読後、まずは自分で考え、まとめとして全員で音読。そして、「英語は実技教科。筋トレと同じように継続が大事や」と、CDでネイティブスピーカーの発音を聞きながら音読を何度も繰り返す。更に、週4日の単語テストとテスト不合格者への放課後の単語学習は、1年生から3年生の前期までずっと続けてきた。「本校は交通の便が良くない場所にあり、地域の子どもは地域で育てるという意識を強く持っています。たとえ怖い先生と思われても、生徒に志望をかなえられる学力を付けさせるために、何をすべきかをいつも考えて授業に臨んでいます」と、衣川先生は語る。

その姿勢は進路指導でも同じだ。1学年4クラスのため、3年間受け持つ生徒も多く、一人ひとりの学力や性格、家庭の事情もよく分かっている。だからこそ、10年後に社会に貢献できる大人になっているのか、50歳になった時に幸せだと思える人生を送っているのかと、生徒の未来に思いを馳せ、「その選択で本当に良いのか」と生徒に問い掛け、先生自身も考える。文転をずっと悩んでいたという3年生はこう打ち明ける。「決意して衣川先生に話をしたら、驚きもせずに『それならこんな進路はどうや』とアドバイスしてくれました。それが自分にぴったりの学部で、自分のことをよく見て、いろいろ考えてくれていたのだから分りました。あとは頑張るだけだと決意が固まりました」。

未来に向かって一歩を踏み出すのが高校時代。衣川先生は、時に厳しく、時に寄り添い、いつも本気で生徒と向き合う。

VIEW21

ビュー21 高校版 Volume4 2015年10月号
2015年10月16日発行/通巻第354号 発行人 山崎昌樹 編集人 春名啓紀 発行所 (株)ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所
©Benesse Corporation 2015

お客様
サービスセンター

【フリーダイヤル】 0120-350455

受付時間 月～金 8:00～19:00/土 8:00～17:00 (祝日、年末・年始を除く)
株式会社ベネッセコーポレーション岡山本社 〒700-8686 岡山市北区南方3-7-17